

の壁は塊の他の部分と少しも異つて居ない。母によつて吐き出されたか、或は單に浸み出したかしたクリーム様の塗料は少しもない。此の變化からどう云ふ結果が生じて来るか。

何も困つた事はない。幼虫は其の生家に於けると同様によく發育し、健康は益々良好である。そこで私は最初の中はある思ひ違ひに欺かれて居た事になるのである。糞虫の作品にあつて卵の室の壁を殆ど常に蔽うて居る所の細い塗料は、ある單なる滲出物に過ぎないのである。幼虫の食ひはじめに方つて、幾分便利であるかは知れないけれども別に必要無く可らざるものではない。今日の實驗が之れを證明して居る。

此の實驗に供せられた幼虫は廣々と口をあけて居る一つの井戸の底に沈められた。此の状態は其のままに捨てて置く事は出来ない。屋根の無いと云ふ事は闇と静寂とを好む幼虫に取つて快い事ではない。彼はどう云ふ風にして此の開けつばなしの天井を蔽ふであらうか。漆喰鏝はまだ其の機能を發揮する事が出来ない。漆喰袋はまだ何物をも消化して居ないので、材料がないからである。

まだ極く新米ではあるけれども、此の小虫にはまた相應の手段がある。漆喰職人になる事が出来ないので、彼は軟材石工となる。肢と大腮とで自分の室の壁を小片に欠き取り、之れを一つづつ井戸の縁へ積み上げる。防禦工事は速かに進行し、小分子は寄り集まつて一つの圓天井を作る。尤も此の圓天井には抵抗力がまるで無い。私が口で吹いても此の圓屋根は崩壊してしまふ。けれども間もなく幼

虫は最初の食事を始めて腸は一杯になる。そこで材料が充分に溜まると彼はやつて来て、此の建築のすき間に漆喰を注入して之れを強固にする。充分にセメントで固められると今まで脆弱だつた天井裏がしつかりした天井となる。

此の幼虫はこれでそつとして置いて、今度はいゝ加減育つた他の幼虫を調べてみよう。ナイフの先端で丸藥の上端を貫き、數平方ミリメートルの天窓を開ける。幼虫は早速不安氣に此の窓に頭を現はして此の災害を調べる。彼は自分の室でぐるりとひつくり返えつてまた窓口に姿を見せるが、今度は肉厚の縁のある大きい鏝を出して来る。割目に向つて漆喰を一吹き吹き出す。けれども此の漆喰は少し水でぬらし過ぎて品が餘り上等でない。散つて流れて、直ぐは固まらない。そこで引續き何回でも吹き出す。無駄な骨折。漆喰職人が何度やり直し、どんなに立ち騒いで此の流れ去る材料を肢と大腮で引留めようとしても無駄である。穴は塞がらない。漆喰が相變らず薄すぎるのである。

可愛さうに、さう絶望する事はない。お前の妹の眞似をしたらよいではないか。先刻の若い幼虫のやうにしたらよい。室の壁から小片を欠き取つてそれで天井裏を作るがよい。此の海綿のやうな足場の上ならばお前の薄い漆喰だつて充分うまく行く。所が此の大虫は自分の鏝にすつかり信頼してそんな方法などは考えない。根限り働くのだが大して成績が學がらない。あの若い小虫が巧い方法で塞ぎ了せた穴を彼は塞ぐ事が出来ない。極く若い虫が知つて居た方法をいゝ加減大きくなつた虫は最早知

らないのである。

さう云ふわけで昆虫の仕事には或る時期だけ利用されて、その後は打ち捨てられ、全然忘れ去られてしまふ種々な方法がある。数日の前後によつて技能が變つてしまふ。極く若い小虫はセメントがなくても軟石材を使ふ事を知つて居る。幼虫は漆喰が豊富にあるので、必要な道具は小虫よりも完備して居るに拘はらず、積み上げ作業を輕蔑し、或は寧ろ最早これを知らない。身體が頑丈になると、數日前のまだ身體の痺弱だつた頃にあれ程よく知つて居た所のやり方を最早思ひ出さない。情ない記憶力だ。尤も此の平べつたい頭蓋の下に記憶力があるかどうかは分らないが。けれどもしまいには吐き出された材料が蒸發するので、手早い方法を忘れてしまつた此の虫も、どうやら天窓を塞ぐ事が出来る。約半日と云ふものが此の鰻の努力に費やされるのである。

そこで私の考えに浮んだのは、そのやうな場合に絶望的になつた幼虫を母虫が助けてやるかどうかと云ふ事である。卵の上の方の天井を破ると母虫が大急ぎで之れを修繕するのは我々の既に見た所である。母虫は胚種の爲めに爲した所を、既に大きくなつた幼虫の爲めにもするであらうか。丸藥の中に居るのが無能な漆喰職工である場合にも、その破られた丸藥を修理してやるであらうか。

試験の結果を一層確實ならしめんが爲めに私は、母虫と關係のない丸藥を選んで之れが修理を母虫に託する事にした。そこで丸藥を野良で採集したのであるが、不規則な形をして居てどれも瘤だらけ

である。それはこれ等の丸藥の横はつて居た土地が小石混りの地で、廣い仕事場を設けるに適せず、隨つて正確な幾何學に適さない爲めである。のみならずこれ等の丸藥は赤味を帯びた堅い外皮で蔽はれて居る。途々ぶつかつて傷がつくといけないと思つて私が鐵砂の中に浸したからである。要するに廣々とした廣口瓶の中の綺麗な臺の上で作り上げられた完全な卵形の少しも泥で汚れて居ないのとは著しく異つて居る。其の中の二個の頂上に一つ口をあけてやる。すると幼虫は自分の方法を忠實に守つて、忽ち之れを塞がうと努力する。けれども成功しない。二個の中一方は鐘形の硝子蓋で蔽うて置いて證人の役をさせる。もう一つの方は、母虫が二つのすばらしい卵形から成る其の巢窟を監視して居る一つの廣口瓶の中に入れてやる。

待つ時間は永くない。半時間も経つてボール紙の筒を取り除けてみる。母虫は、此の見も知らぬ丸藥の上に乗つて、如何にも急がし氣に一生懸命で、明りのさして來たのにも氣づかない。これ程緊急でない他の場合であつたならば、忽ち滑り下りて、此のいま／＼しい光の届かない蔭に身を潜めるのであらうのに、今は身動きもしないで、平然として其の仕事を續けて居る。私の目の前で、赤い外皮を掻き取り、綺麗になつた表面から更に幾分の材料を削り取つて之れを割目の上に伸べ、接ぎ合はせる。極めて迅速に穴は密閉される。如何にも巧みな封印の仕方に私は驚嘆するのである。

所で、ダイコクコガネが我が物ならぬ一丸藥を修理して居る間に、硝子蓋の下では第二の丸藥の持

主たる幼虫は何をして居るか。彼は依然として甲斐もなく立ち騒ぎ、どうしても固まらないセメントを無駄に費して居る。午前中試験に附せられた彼は午後に至つて辛うじて閉ぢ得たには得たが、それとても随分拙い。しかも借り物の母の方は二十分を費さずして美事に此の破損を修繕したのである。

彼女はそれ以上の事をする。應急手當も出来、遭難者も救はれると、彼女は終日終夜、そして其の翌日もなほ塞ぎ直した丸薬の上に停つて居る。附節の刷毛で靜に之を擦つて泥の層を消し癖を平にし、角張つた場所を滑らかにし、彎曲を正しくする。それで最初不格好で汚なかつた丸薬が、既に廣口瓶の中で作り上げられた丸薬と精密さを競ふ一つの卵形となる。

見知らぬ幼虫にこれまでの世話をすると云ふ事は注意に値する。續けてみなければならぬ。前の丸薬と同じやうな一つの丸薬を取つて、其の頂きに前よりも少し大きい口、約四分の一平方センチメートルの口をあけて、之を廣口瓶の中に入れる。困難が増しただけに之を修理すれば、その價値はなほ大きいわけである。

實際之れを塞ぐのは難かしい。くり／＼と肥つた幼虫は夢中になつて身體を動かして窓から脱蕪する。養母は穴の上から覗くやうにして幼虫を慰めて居るらしい。乳母が搖籃を覗き込んで居る形である。其の間にも救ひの脚は確實に働いて居る。穴の周圍を搔いては之れを塞ぐ材料を集める。しかし今度は材料は半ば乾いて居て堅く、粘り氣がない。此のやうな大きい口を塞ぐには適しないし又分量

が餘りにも少ない。それを事ともせず幼虫は相變らず其の漆喰を吐き出し、相手は自分の削り屑と之れとを混ぜて、之れに硬度を與へ、それから之れを伸べて遂に口は閉ざされる。

此の割に合はない仕事に午後一杯が費やされた。私に取つて好い教訓であつた。私もこれからは一層氣をつける事にしよう。もつと軟い丸薬を選ばう。そして材料をくり取つて之れに穴をあける代りに單に壁を少しづゝめくり上げて幼虫を露出するやうにしてやらう。母虫は此のめくり上げられた小片を舊に返えして、之れを接ぎ合はせさへすれば済むのである。

第三の丸薬に對してはさう云ふ風に行つた。すると直きに極めて手際よく修理された。私のナイフで荒した跡は少しも残つて居ない。私はさう云ふ風にして第四、第五と云ふ具合に母虫に幾分の休息を與へる爲め、可なり長い間を置いては續けて行く。容器が一杯になつて梅漬の瓶のやうになつた時にやめた。内容の總數十二個、中十個は他虫の丸薬で、十個共に私のナイフで傷つけられ、十個共に此の養母によつて復舊されたのである。

此の不思議な實驗は、廣口瓶の容積さへ之れを許せば更に續ける事も出来たのであるが、此の實驗から若干の興味ある事實が觀取される。ダイコクコガネの熱心さは之れ程多くの破壊を修繕した後でも毫も減じて居ない。又其の敏活さも終始變りがない。してみると私の實驗が彼女の母性愛を使ひ果たさせてしまはなかつた事が分かる。此の邊で満足して置かうではないか、之れで實に充分である。

第一に丸薬の並べ方に注意してみよう。三個で此の圍の中の床は一杯になつてしまふ。そこで他の丸薬は次第に層をなして積み重ねられる。其の結果四階の一柱が出来る。全體の形は秩序もない一と山で、まるで非常に狭い曲りくねつた小路だらけの迷宮のやうで、母虫は其の中を滑り歩くに相當骨が折れる。家内が萬事整頓して居る時、母虫は下の方の柱の下に砂と相觸れて居る。其の時、柱のすつと天邊てんぺんの三階なり、四階なりに傷つけられた一つの新しい小房が挿入される。筒をまたかぶせて數分間待ち、それから再び此の廣口瓶を訪づれてみよう。

母虫はちやんと來て居る。穴をあけられた丸薬の上に攀ち登つて之れが閉塞に働いて居る。地階に居てどうして屋根裏部屋の出來事が分つたのであらう。一疋の幼虫が上の方で救を求めて居る事がどうして分つたのであらう。赤ん坊は何かあると泣き叫ぶ。そこで乳母が驅けつける。けれども幼虫は何も云はない。これは黙りやである。彼の絶望的な身振りは何の物音をも伴はない。しかも監視の母虫には此の啞者の叫びが聞こえるのである。彼女には沈黙が聞こえ、目に見えぬ物が見えるのである。私は迷ふ。これ等の知覚は我々の性質とは餘りにも異なり、モンテーニユならば之れを以て我々の悟性を混迷させるものと云つたかも知れないが、此の神祕の境では誰でも迷ふ事であらう。それ故この程度で止めて置く事にしよう。

他の所で云つた通り、昆虫の中で最も天賦の才に富む膜翅類は他虫の卵を實に殘酷に取扱ふ。葉蟎

蜂、左官蜂其他は、時とすると殘忍極まる行爲をする。復讐の念に燃えた一時、或は産卵の終りに突發する不可解な錯亂の一時には隣虫の卵は、缺のやうな大肥でもつて小房から兇暴にも引き出されて打ち捨てられる。情け容捨もなく踏みつぶされ、引き裂かれ、食はれさえもする。優し過ぎる程のダイコクコガネとは何とまあ異つて居るではないか。

糞虫に家族間相互扶助の觀念ありとなしたものであらうか。捨子救助の實行者と見做す大なる名譽を彼に拂つたものであらうか。それは愚かしい事であらう。母虫が他虫の子等にあれ程熱心に救助を齎らすのは、確かに我が子等の爲めに働いて居るのだと信じて居るからである。私の實驗に供した母虫には自分の丸薬が二個あつた。其處へ私が更に十個を加えてやつた。しかも頂上まで一杯に盛られた梅漬瓶の中で彼女は、我が生みの子と偶然に與えられた子等との間に何の差別をもつけずに世話をする。彼女の智性はそれ故最も簡單な數を、單數と複數とを、多と少とを區別する事を知らないのである。これは闇の故であらうか。否、若しも光が眞に彼に缺けて居る所の手引きであるならば私の度々の訪問は、不透明な筒を取り除けた際、此の不思議な積み重なるの何であるかを調べ且つ知る機會をダイコクコガネに與へて居る。のみならず彼にはもう一つの調査の方法があるではないか。天然の巢窟に於ては丸薬は三つか精々四つであつて全部地上に横はり、唯々一と並びの一群をなして居る。しかるに私の足し前を加えては四階に積み上つて居る。

天邊まで攀ち登る爲めには、恐らくどのやうなダイコクコガネの住居とても此のやうな状態を示した事の會てないやうな一つの迷路を通つてよち登る爲めには、彼は此の一と山を形づくるあらゆる玉に眩を觸れ手で觸つて居るのである。しかも此の戸口調査は何の役にも立たない。彼に取つては全部が一巢の雛であり、全部が家族であり、天邊からどん底に到るまで同じ世話に値するのである。彼の算術に於ては私の作つた十個と本當に産んだ二個とが同じ物なのである。

例へばダーウインの如く、昆虫にも一道の理性の光ある事を來つて私に語らんとする者あらば、私は其の者に此の不思議な計算者を引き渡さう。二つに一つである。其の理性の光なるものが皆無であるか或はダイコクコガネの理性が神の域に達し、彼昆虫界の聖ヴァンサン・ド・ボルとなつて捨子の悲惨を憐れむのであるか。選んで貰ひ度い。

人或は原理を救はんが爲めに没常識をも取てするかも知れない。そしてダイコクコガネは憐み深い虫として他日進化論者等の實踐倫理の中に掲げられる事であらう。そんな事はないとどうして云へよう。既に同じ趣旨からして或る種のボアを掲げたではないか。何でもそれは情の厚い蛇で、主人を失つたら、悲しみのあまり死んで行つたさうである。いや實にしほらしい蛇ではある。かう云ふ訓話は人間をゴリラに引き戻さうと云ふ考えから編纂されたもので、之れに出會ふと私は暫し快い笑を味ふのである。あまり執拗くは云ふまい。

さてそれでは仲好しのダイコクコガネよ、今度は二人だけで別に、大騒ぎを起すやうな虞のない事を話し合はう。お前が昔あれ程評判を取つた原因を私に話してくれまいか。古代埃及人はお前を紅花崗石や白班紅石に彫んで頌讚して居た。お前を崇めて居た。實際お前には立派な角があるからな。また大玉押コガネに對すると同様に種々の名譽をお前に授けて居た。お前は古代埃及の昆虫學に於ては第二位を占めて居た。

ホルス・アポロの語る所に據ると、角のある聖糞虫に二つある。一つは頭上に一角を有し、他の一つは二角を有する。前者は私の廣口瓶の賓客たるお前だ。さうでないまでも少くともお前に酷似した何者かだ。若し古代埃及人が、只今お前が私に教へて呉れた事を知つたのであつたならば、きつとお前を大玉押コガネの上位に置いたに違いない。何しろ大玉押コガネは浮浪の丸薬虫で、家を捨て、子等の爲めに一度所要の食糧が準備されたが最後、あとは自分等でどうにでもやつて行くやうに捨てて願みないのだから。お前の驚く可き習性は今初めて此の物語に記されるので、古代埃及人はそれに就いては何も知らなかつた。それだけ彼等がお前の功績を像感した事は一層稱讚に値する。

第二の二角を有するものは、諸先生の説によると博物學者がコプリス・デイジス(Copris D'Isis)と呼ぶ所の昆虫であるらしい。私はそれを肖像で見知つて居るばかりであるけれども其の姿が如何にも美事なので、此の晩年に於いても猶ほ若かつた頃のやうに彼方ニユビー(Nubie)の國に赴いて、ナ

イル河畔をさすらひ駱駝の糞の蔭に、かの聖なる孵化者であり、日の神オシリス (Osiris) に感じて懐胎する自然である所のイジス (Isis) の記章たる此の虫に訊ねて見たい憧憬が起つて来る。

いや、お目出度い奴さ、お前の玉菜の手入れでもし、蕪青の種子でも蒔くがよい。それだつて結構同じ事だ。お前の高直に水をやるがよい。もうこれ限り悟るがよい。單に糞虫の智を探るだけでも我の調査が如何に効のないものであるかを。もつと野心を小さくするがよい。事實の記録者たる役割をもつて満足するがよい。

さう云ふ事にしよう。幼虫に就ては何も變つた事はない。彼は大玉押コガネの幼虫の爲す所を反覆するに過ぎない。極く細かい點に彼特有のものがあるにしても其處には何等の興味もない。同じやうに脊の眞中が隆起して居て、同じやうに最後の環節が斜に切斷されて上面が鏝狀に擴がつて居る。素早い脱糞家で、大玉押コガネの幼虫程ではないにしてもやはり割目を塞いで隙間風を防ぐ事を知つて居る。其の期間は一ヶ月から一ヶ月半である。

七月の末頃に若虫が現はれる。最初は全部琥珀様の黄色で、それから頭、角、前胸甲、胸、肢にすくりのやうな赤色を呈し、しかも翅鞘はアラビヤ護謨のやうな青白色を帯びる。それから一ヶ月後の八月末には成虫が其の木乃伊の皮から抜け出す。其の時の彼の服装は、デリケートな化學的變化の作用を受けて生まれ出る大玉押コガネの服装と同様に不思議なものである。頭、前胸甲、胸、肢は栗色

の赤である。角、口瓣、前肢の齒形には褐色の雲がかゝつて居る。翅鞘は少しく黄味を帯びた白色で、腹部は白い。たゞ尾環節は前胸部よりも更に濃い赤である。大玉押コガネ、玉押コガネ、クロマルコガネ、センチコガネ、ハナムグリ及び其の他の種々な昆虫に於て私は、腹部の他の部分が今猶全く蒼白であるのに尾環節のみが既に早く色づいて居る事實を認める。何故の此の早熟か。此處にも一つの疑問點がある。此の疑問點も亦待たるゝ解答の前に何時までも立ち盡す事であらう。

二週間ばかりの日が経つ。服装は黒檀の様に黒くなり、鏝は堅くなる。昆虫は外出の準備が出来た。九月も末となれば、土は幾度かの俄雨を吸つてさしも堅固だつた殻も軟くなり容易に脱出し得る時機である。さあ時だ。私の捕虜たち。私はお前たちをいくらか苦しめはしたものの少くとも豊かな生活をさせてやつた。お前達の殻は容器の中で堅い匣のやうになつてしまつたから、お前達の努力ではどうしても破る事は出来まい。私が手傳つてやる。何う云ふ具合に事が行はれるか詳細に語つてみよう。三つなり四つなりの分け前の丸薬を割り取るべき大きい麵麩の塊が既に巢窟に收められると、母虫は二度と戸外に姿を現はさない。しかも彼女自身の爲めには何等食糧の準備をして居ない。倉の中に取り込まれた塊は子供たちの菓子であり、幼虫に限られた相續財産であり、彼等はこれを等分に分ち與へられやうとするのである。それ故此處に蟄居する母虫は四ヶ月間何物をも口にしないのである。

随意の禁食である。實際、食糧は直ぐ足下に豊富にしかも上等なのがあるのである。しかし之れは

幼虫の爲めに取つてあるので、母虫は決して之れに手を觸れない。自分の爲めに幾らでも取れば、それだけ幼虫の分が減るではないか。最初まだ子供等の負擔のなかつた頃の貪食に次いで極めて長期の禁慾を忍ぶ節制時代が来るのである。卵を抱く牝鶏は數週間の間だ食を忘れる。我が巢の雛を守るダイクココガネの母は一年の三分の一の長さの間之れを忘れる。糞虫は母性的献身に於て鳥に優るのである。

所でこれ程まで自分を忘れる此の母は地下で何をして居るのか。何かと家庭の世話に此のやうに永い斷食の時を彼女は費し得るのか。私の容器は満足すべき回答を與える。既に云つた通り私は二種の容器を有つて居る。一種は廣口瓶に薄い砂の層を設けボール紙の筒で蔽うて暗くするものであり、他の一種は大きな植木鉢に土を満たし硝子板で蓋をしたものである。

如何なる場合に最初の容器の暗筒を取り除けてみても、母虫は或は彼女の土壺の圓屋根の上に登つて居り、或は地にあつて半ば伸び上り肢をもつて膨れた腹を磨いて居る。また極く稀には壺に圍繞されてまどろんで居る。

彼女の時の使用法は明らかである。彼女は彼女の寶物である丸薬を監視して居る。其の内部で行はれて居る所の事を觸角で聽診する。乳兒の成長に耳を傾ける。缺點のある部分に修正を施すか、あらゆる表面を磨きに磨いて以て其の中の虫が完全に發育するまで、内部の乾燥を出来るだけ緩慢ならしめようとする。

かうした細かい世話、寸時も休まない世話は、最も經驗の淺い觀察者の注意をも惹くに違いない程の種々の結果を生ずる。卵形をした土壺、と云ふよりも寧ろ育兒場の搖籃は素晴らしく正しい曲線と清潔さとを有つに至る。其處にはもう漆喰がはみ出して居るやうな割目は一つもなく、あのひびもなく、鱗片のさ々くれ立つものもなく、要するに最初の中は如何にも立派なあの大玉押コガネの梨を、後に至つて殆ど常に傷つける所のあの種々な事故の何一つもないのである。

有角糞虫の小匣は、例へば製像作家が石膏をもつて之れを作つたとて、之れよりも美事には出来なないであらう。心まで乾燥しきつてしまつた時でもなほさうである。あゝ、巢の卵と大さ及び形を競ふ暗銅色の立派な卵よ。此の完全さは、殻が破れて虫が抜け出る時まで一點非難の餘地ない状態に保たれるのであるが、それにはもう修正を絶えず加へて行かなければならない。たゞ長い間を置いて時たまの休息はある。其の間は母虫は山の下で瞑想し假睡する。

廣口瓶の使用にはまた疑ひの餘地が残つて居る。踰える事の出来ない園の中に捕はれて居る此の昆虫が、彼の丸薬と一緒に停つて居るのは、他所へ行く事が出来ないからであると人は云ふかも知れない。それも尤もである。併しそれにしてもなほあの磨きの仕事や不斷の監視はどうしたものであらう。若し之れが母虫の習性でなかつたならば、彼女は決してそんな事をする氣にはなるまい。たゞも

う自由を恢復したい一心で、落着きなく、出鱈目に圍いの中を歩き廻る事であらう。所が實際を見ると彼女は甚だ平然として瞑想して居る。

ボール紙の筒を取り除けて俄に明るくしてやる時、彼女の驚きを示す唯一の行爲は、丸薬の天邊から滑り下つて山の蔭に身を小さくして隠れるだけである。明りを控え目にしてやるとちきにもとの平靜に歸つて、また先刻の通り圓屋根の上に登り、私の訪問の爲めに中斷された仕事を續ける。

のみならず、常に眞暗にしてある方の容器が此の實物説明の不備を補つてくれる。六月に母虫は豊富な食糧を擁して私の植木鉢の砂の中に潜つたが、やがて此の食糧は若干数の丸薬に形を變えた。母虫としては何時でも氣の向いた時に表面に出てくる事が出来る筈である。出て来れば彼女の脱走を防ぐ爲めの廣々とした硝子板を透して明るい晝の光が射して居る。彼女を誘ひ出さうとして私が時々新しいのと更へて置く食糧があるのである。

所が、明るい光も、こんな長い斷食の後ではさぞかし好もしいに違いないと思はれる食糧も彼女を誘惑する事は出来ない。雨の来ない限りは何一つとして私の鉢の中で動くものなく、何一つとして表面に登つて来るものがない。

きつと廣口瓶の中で行はれて居る通りの事が地下でも行はれて居るに違いない。それを確める爲めに私は時期を逸えて私の容器の幾つかを訪づれてみる。すると何時も母虫が巡視に都合のよい廣々と

した穴の中の彼女の丸薬の傍に居る。若し彼女が休息を求めるのならば、もつと深く砂中を下つて何處でも氣に入つた地點に身をかゝめる事が出来るであらうに。若し食事によつて氣力を恢復する必要があるならば、地表に出でて新鮮な食糧の卓に着く事も出来るであらうに。更に深い地下室の休息も太陽と軟かい小型麵麩の喜びも彼女をして、彼女の子等の側を離れさせる事は出来ない。すべての子等が其の殻を破るまでは彼女は産屋を去らないのである。

十月である。人も禽獸も待ちに待つた雨がやつとの事でやつて来て、地を少しく深い邊りまで潤した。灼けつくやうな埃りつぽい夏の日が続いて生活は一時休止の状態にあつたが、今や涼風吹き來つて生命を呼び醒まし、茲に一年の最後の祭が催される。薔薇色の小鈴咲き初めるヒースの叢に大紅葎は其の眞白な巾着を綻ばせ、白味を半分剥ぎ取つた卵の黄味のやうな姿を現はす。赤紫のどつしりとしたイグチは行人の足下に踏みにじられて青くなる。秋の綿囊兒はリラ色の花をつけて其の小さい紡錘竿を突き立てて居る。楊梅は其の珊瑚の小玉を軟らかにする。

此の小春日和は地下にも反響する。春に産みつけられた大玉押コガネ、玉押コガネ、クロマルコガネ及びダイコクコガネは温氣によつて軟らいだ彼等の殻を、大急ぎで破つて地表に昇り來り、残り少ない好日の歡喜に馳せ參する。

私の捕虜等はこの恵みの雨に浴する事が出来ない。彼女の匣のセメントは酷暑に灼かれて餘りに堅

く到底打ち破る事が出来ない。頭巾と肢の鱧も之れには齒が立つまい。私は此の憐れな者達に手傳つてやる。天然の雨の代りに如露の水を適當に加減して私の鉢に注いでやる。もう一度、糞虫の脱殻に對する水の効果をたしかめる爲め、若干の器を酷暑に基く乾燥状態のままにして置く。

灌水の結果は直きに現はれる。二三日経つと或は一つの廣口瓶の中で、或は他の廣口瓶の中で、丸薬が恰度好い具合に軟かくなつて、捕虜等に押し破られて崩れ落ちる。生まれたばかりのグイコココガネが現はれて、母と共に私のととのえた食糧の卓に着く。

蟄居の虫が肢を突張り脊を丸くして、彼を閉ぢ込める圓天井を微塵に押し破らうと努力する時、母虫は外部から之れを攻撃して彼に助力するであらうか。大にさうかも知れない。此の監視の母は、今まで我が巢の子等の世話にあれ程までも専念し、丸薬の内部で行はれる事にあれ程までも注意して居たのであるから、捕虜等の出ようとあせる騒ぎが聞こえない筈はない。

我々は私に不法にもつけた割目を倦まずに塞ぐ彼女を見た。ナイフの先で穴をあけた丸薬を、幼虫の安全の爲めに修理して居る彼女の不意を飽きるほど襲うた。本能によつて修繕し、建築する事の出来る彼女である以上どうして破壊する事が出来なからう。けれども私は何も見て居ないのだから、何とも斷言する事は出来ない。折角の好機會が何時も私の試みの失敗に歸した。或は私の行きやうが餘り早すぎたり、或は又餘り遅すぎたりした。それにまた、忘れてはならない事は、明りが射すとい

つも仕事を中止してしまふ事である。

砂を満たした鉢の内部の神祕境とても、脱殻の様は之れと異なる筈はないのだが、私には彼等が地を出る所をしか見る事が出来ない。私が巢の入口に供へた新鮮な食糧の香に誘はれて、今殻を出たばかりの子等が母に伴はれてそろ／＼と出て來、しばし硝子板の下を歩き廻はつて、それからその小山に突貫する。

彼等の數は三或は四、五をもつて限りとする。息子等は一段と角が長いので容易に見分けがつくが娘と母との區別は全然つかない。のみならず彼等の間にも同じ混同が行はれる。今まであれ程獻身的であつた母虫が俄に一變して、此の解放された我が子等に對してまるで冷淡になつてしまふ。これからはもう他人は他人、我は我である。お互にもう見も知らぬ他人となるのである。

人工驟雨に潤ほされなかつた容器の中の最後は悲慘である。干からびた殻は殆ど杏や桃の核のやうに堅くなつてどうしても打ち破れない。肢の荒鱧を以てしても辛うじて一掴みの粉をかき落すに過ぎない。不拔の城壁に加へられる工具のきしみが聞こえる。それから沈黙が続く。最初のものから最後のものに至るまで捕虜は皆斃れるのである。乾燥が時節外れまで続く此の世界では母虫も亦斃れる。グイコココガネにも大玉押コガネと同様に、石のやうに堅い殻を軟くする雨が必要なのである。

殻から出た虫に戻つてみよう。地を出てしまふと、母虫は最早其の子等を忘れ、之れを構はない。

と我々は云ふ。けれども今冷淡だからと云つて彼女が四ヶ月の間骨身を惜まらずに示したあの驚く可き世話振りを忘れてはいけない。

蜜蜂、黄蜂、蟻其の他我が子を哺育し、細かい衛生上の注意を拂つて之れを育て上げる社会的な膜翅類を除き、昆虫界の何處に此のやうな母性的献身、此のやうな育児上の配慮の例を見出し得ようか。私はそれを知らないのである。

ダイコクコガネはどうして此の高い特質を獲得したか。若し無意識の中にも道德を認め得るならば私は喜んで之れを道德的特質とさへも呼びたいのである。どうして彼はあれ程評判の高い蜜蜂や蟻を愛情の點で凌駕する事を覺えたのか。私は敢て凌駕すると云ふ。蓋し、蜜蜂の女王は單なる胚種製造工場である。如何にも驚く可き生産力を有つた工場である。しかし彼女は産卵するだけの事であつて、子等を育てるのは本當に獨身を誓つた慈惠院の看護尼僧のやうな他の蜂たちである。

ダイコクコガネの母虫は彼女の貧しい家庭に於て之れに優る事をやつて居る。たゞ獨り、何等の手助けもなく、子等の一人一人に一つの菓子を作り與へ、其の皮が固くなると、母の心をこめた饅を以て絶えず之れを新にして侵しがたい一個の搖籃たらしめる。愛の一心に彼女は食慾を忘れる。巢の奥深く閉ぢ籠つて四ヶ月の間引き續き我が巢の雛を守り、胚種の、幼虫の、若虫の、そして成虫の要求に注意して居る。彼女は子等の全部が解放された時でなければ、戸外の喜びを味ひに再び地表へとは

登つて來ないのである。斯の如く、賤しい糞喰虫の中に、母性的本能の最も美しい現はれの一つが燦然と輝いて居る。精靈はその欲する所に吹くのである。

クロマルコガネ。——ツノコガネ

糞虫族のお歴々、と云つてもセンチコガネは組合が違つて居るのだから別として、他のお歴々とは一と亘りお近づきになつた。しかし極く狭い私の調査半徑内には、まだクロマルコガネの賤民共が残つて居る。私の家の周囲だけでも一ダース程の種類を採集する事が出来るであらう。此の卑賤な虫共は何を我々に教えるであらうか。

大柄な同業者等にくらべて一段と熱心な彼等は通りすがりの驢馬が落ちて行つた糞山の採掘にまつ先に駆けつけて来る。彼等は群を爲して來り、永い間其處に滞在し、蔭と涼味とを與える屋根の下で働く。其の山を足でひつくり返えして見るとよい。外部からは一向にそれらしい風も見えなかつた無数の虫が蠢めいて居るのに驚くに違いない。一番大きいのでやつと豌豆程の大いさであるが、それよりも遙かに小さいのも居る。そして此の一寸法師どもも他の連中に劣らず忙しげに、また同様に熱心に、一般衛生上是非とも素早く取り片着けねばならぬ此の汚物を細かに碎いて居る。凡そ大規模の工事を遂行するに賤民等の力に及ぶものは何もない。彼等は其の微力を協せる事によつて一つの巨大な

力を實現する。數を加える事によつて膨脹し、無に近きものが莫大な總和となるのである。

快報が一度傳へられるとすぐに群を爲して駆け集まり、加ふるに彼等と同様に微小な彼等の共同者マグソコガネが來たつて彼等の有益な労働を助けるので、彼等は忽ちにして地面より其の汚物を片着けてしまふのである。しかしそれは彼等の食慾がこれ程豊富な食糧を食ひ盡すほど旺盛であると云ふのではない。此のやうな一寸法師共に食物として何程のものが必要であらう。云ふに足らぬ程の微量である。しかし此の微量は、滲出物の中から選ばれるので、摺り潰された稊の細片の間に探し求められねばならない。そこで糞塊は次から次々と無限に分割され、日の一と射しにも乾かされ、一吹き風の風にも吹き散らされるやうな細片に分解されるのである。そこで仕事は片着くと、そしてまことに美事に片付けられるのだが、此の清掃夫等の群はどこか他の肥取場を探しに取かゝる。あらゆる活動を中止させる嚴寒の候を除けば、彼等は休業と云ふ事を知らない。

しかし此のやうな汚ない仕事をして居るからには定めし彼等の様子が不格好で、服装もぼろだらうなどと思つてはいけない。昆虫と云ふものは我々のやうな惨目さを知らないのである。彼等の世界に於ては土方はきちんとした豪華な上着を着て居り、屍體運搬夫は曙色の三重の飾帯に身を飾り、木樵は天鵞絨の帽子を冠つて働いて居る。同様にクロマルコガネにもそれ相應の贅澤がある。尤も彼の服装は常に嚴格である。黒か褐色が勝つて居て、或は光澤消しであり、或は黒檀のやうに光つて居る。

しかし全體としての此の地色の上に何と細かい点にあつさりとしてしかも優美な裝飾の多い事よ。

あるものは薄い栗色の翅鞘に黒點を半圓形に描き (O. lenui)、あるものは (O. nuchicornis) これ亦薄い栗色に稍々ヘブライの角文字に似た墨色の斑點を散らし、或は (O. schreibri) 黒玉の色にも比ぶべき黒光りに赤い朱の花結びを四つも飾り、或は (O. furcatus) 其の短い翅鞘の端に燃え残る石炭の光のかけにも似た光を漂はせる。そして多くのものは (O. vacca, O. Cenobia 其の他) 前胸甲及び頭部に装金し、フロレンス銅の光彩を之れに與えて居る。



41 ネガコルマロク夏三

金彫の妙は彼等の服装を一段と美化して居る。可憐な平行線の刻み目、節立つた珠子の細い幾並び、眞珠のやうな圓形突起の苗床、などが殆どすべてのものに惜氣なく分け與えられて居る。いや、此の小さいクロマルコガネなどは、身體こそづんぐりし、刻み足で素ばしこくちよこくと歩き廻つては居るけれども、まことに立派なもの共である。

それに又彼等の前額の裝飾のなんと獨創的である事よ。此の平和な者どもは、實の所何等の害悪をも爲し得ぬに拘はらず、まるで戦争でもしようとして居るかのやうに物騒な武器飾を好んで居る。多くのものは恐ろしい角を頭上に戴いて居る。だがこれ等有角虫の中で一對だけを茲に擧げて置かう。其の物語は殊に我々の注意を促さんとして居るのである。第一は牡牛クロマルコガネ (O. taurus) で

全部黒裝束である。彼の戴く二本の長角は優美な曲線を描いて兩側面にはね返つて居る。瑞西の牧場で選り抜きの牡牛とてもこれ程美事な曲線を描いた角を有つものはない。第二は三叉クロマルコガネ (O. furcatus) で柄はこれよりも遙かに小さい。其の甲冑と云へば三本の先端を垂直に突立てた一本の三叉である。



21 ネガコルマロク牛牡

これが此の短いクロマルコガネの傳記の二つの重なる立役者である。しかし其の他のものは此處に物語るに値しないと云ふわけではない。最初のものから最後のものに至るまで何れも皆興味ある材料を供給し得るものである。中には他に見られない特殊の材料をさえも供給してくれるものも二三はあるかも知れない。しかしこれ等全班に亘つての觀察は中々に厄介であるからして、此の多數の中に制限を加えなければならなかつたのである。それに又、これは一層重大な條件ではあるが、私には選擇の自由が無かつたのである。私は偶然に手に入つた若干の掘り出し物と、虫小舎に於て擧げ得た若干の好成績とを以つて満足しなければならなかつたのである。

此の二つの點からして、僅に右に擧げた二種だけが私の望みを叶えてくれた。彼等の仕事の様を見てもみよう。彼等は全部族の生活様式を大體ながら我等に教えてくれるであらう。蓋し、牡牛クロマル

コガネは其の軀幹に於て第一位にあり、三叉クロマルコガネは末位にあるので、大いさの階梯の兩極端は此の兩者によつて占められて居るからである。

先づ第一に巢に就いて語らう。私の期待に反してクロマルコガネは巢作りが下手である。彼等には日向を樂しげに轉がして行く玉もなく、地下の仕事場で苦心して作り上げる卵形もない。まるで彼等は汚物粉碎の本職が忙がしいので到底長い辛抱を必要とするやうな仕事をして居る暇がないやうである。最少限度の必要に止めて、出来るだけ手早に作り上げるのである。

一つの堅穴が掘られる。深さ約二寸の圓筒形。口徑は井戸掘人夫の身體の大きさによつて變る。三叉クロマルコガネのそれは鉛筆の直徑であり、牡牛クロマルコガネのそれは二倍の廣さである。其のどん底に四壁にびつたりとくつつけて幼虫の食糧が集められ、積み上げられる。食糧の山の周圍に少しの餘地も残されて居ない點が、食糧供給の方法を説明して居る。此處には、母虫に菓子を捏り且つ形づける爲めの運動の自由を與えるやうな室もなければ、極く僅かの片隅も全然ない。それ故材料は單に圓い容器の底へ踏み込まれ、其處で西洋指拔の中味を一杯にしたやうな形を取るのである。

七月末に私は三叉クロマルコガネの巢を二三掘り出してみる。可なり粗雑な仕事なので、製作者の可憐さを想ふと其の無骨さは一寸意外である。秣の莖がいゝ加減にくつつけられて、逆立つて居るので餘計にごそ／＼に見える。材料も今度は驢馬の供給品であるからして、其の性質も此の見場の悪さの

原因の一部をなしては居る。これ等の巢は長さ十四ミリメートル、幅七ミリメートルである。上の面は僅かに中低になつて居るが、これは母虫が押壓を加えた證據である。下端は鑄型となつた井戸底と同様に丸くなつて居る。私は此の粗末な建築を針の先端で少しづつ削いでみる。食糧塊は低部を占め、西洋指拔の下三分の二が固い塊になつて居る。卵の室は上方にあつて、中低の薄い蓋で蔽はれて居る。牡牛クロマルコガネに於ても何等之れと變つた所がない。其の作品は、大きさの大きい點を除いては三叉クロマルコガネの作品と異なる所がない。尤も彼の遣り方を私は知らない。巢作りの深い秘密に就いてはこれ等の一寸法師は、彼等の大柄な同僚等と同様に遠慮深い。たゞ一疋だけが私の好奇心を満足させた。それとてもクロマルコガネの一種ではなくて近似種の黃脚ツノコガネ (*Oniticellus flavipes*) である。



21/2 キコノフ脚黄

七月の最後の週間に私は其の何疋かを捕えたのだが、場所は麥打場で束踏みに使つて居た驢馬が、仕事休み中に落した糞の山の下であつた。此の厚い被覆は、激しい太陽の熱を受けて比類なき孵化器と變り、其の蔭に一群のクロマルコガネを宿して居た。ツノコガネは唯一疋だつた。彼がぼかんと口をあけて居る一つの井戸の中に大急ぎで駆け込んだ事が私の注意を惹いた。私は約二寸程の所を發掘して其處の主人と其の作品とを取り出したが、作品はひどく傷つ

いて居た。しかしそれが一種の袋をなして居る事は分つた。

此のツノコガネを、水呑コツブに土を盛つた上に置いた。巢作りの材料としては大玉押コガネ、ダイコクコガネの特に好む所の羊の軟かい捏粉を與える。産卵間に捕はれたので、堪え難い卵巢の要求に刺戟されて、母虫はまことに快く私の希望を叶えてくれる。三日間に四個の卵が産まれる。随分早い。若し私が好奇心から此の産婦の邪魔をしなかつたならばもつと早かつたに違いない。が此の早さは仕事の簡單さによつて説明が出来る。

私が供給してやつた食糧の山の下面の中央部の一番軟かい部分を輪形に切り込んで母虫は、彼女の計畫遂行に足るだけの分量を一塊に切り取る。之れは一つの丸薬を作るに足るだけの分量を丸麵麩から切取るあのダイコクコガネのやり方である。一つの井戸が其のすぐ下に前もつて掘られて居る。虫は切り取つた荷物を抱えて其處を下りて行く。

作品の形の出来る暇を與える爲め三十分ばかり待つて、それからコツブをひつくり返さず。母虫が家事にいそしんで居る様を不意打ちに見てやり度いと思つてである。

初めの小さな塊は今では井戸の周壁に押し付けて型付けた一つの袋になつて居る。母虫は此の革袋の底にあつて邪魔な私の訪問と、俄に射し来る光りとに度を失つて凝つとして居る。彼女が其の頭巾と肢とを用ひて材料を伸ばし、踏みつけ、そして之れを彼女の土箱の表面にあてがふ有様を見る事は

却々實現困難と思はれるので、諦めてすべてを舊の状態に戻す。

それから少し経つて、母虫が巢窟を去つてから第二回の検査を行ふ。最早仕事は終つて居る。外形から云ふと、高さ十五ミリメートル、幅十ミリメートルの西洋指拔である。上端は平で全然革袋の口に一つの蓋をして丹念に接合した光景である。革袋の下半部は端が圓くなつて居て、中味が一杯に詰まつて居る。之れは幼虫の食物倉である。其の上方が孵化室で、其の底に卵がその一端を固定して垂直に突つ立つて居る。

酷暑の子たるツノコガネ及びクロマルコガネに取つて危険は大きい。彼等の食糧を藏する革袋は容積のまことに小さいものである。其の形は蒸發緩和を目的として何等の計算も行はれて居ない。淺い地下に在る事も之れを乾燥の危険にさらして居る。若し此の菓子干が干からびてしまへば、幼虫は出来るだけは禁食するけれども、その先は死ぬより他に途はない。

私は硝子管をもつて天然の井戸を代表させ、其の中にクロマルコガネとツノコガネの革袋を二三入れる。尤もあらかじめ其の側面に一つの口を開けて置く。これは内部で行はれる所の事を見る爲めである。硝子管には綿栓を施して之れを私の書籍の日蔭に置いておく。此の容器は不透透性であるしまだ栓で塞がれて居るので蒸發は甚だ少ない筈である。それでもなほ蒸發の結果數日にして食糧塊は食用に供し得ぬ程度に乾燥してしまふ。

見ると餓えた幼虫共は此のおぞましい麵麩の皮に噛みつく力もなく、凝つとして居る。肥満がだんだんに失はれ、皺がより、しなびて遂には二週間も経つとあらゆる死相を呈して来る。そこで乾いた綿を捨て濡れた綿を詰め更えてやる。硝子管内にしつとりとした大氣がみなぎる。革袋が次第に水氣を含み、膨らみ、また軟かになる。そして瀕死の虫が蘇生する。彼等は必ず立派に蘇生する。それで濡れた綿を時々取更えてやりさえすれば變態の全経過が何等の支障なく行はれる。

濡れ綿を雲として次第に俄雨を降らす私の技巧が生命への復歸を促す。それはさながらの復活である。灼くが如き八月の普通の状態では、雨は如何にも乏しいので此の俄雨に相當するものは殆ど絶對にあり得ない。それならばどうして此の宿命的な食糧乾燥を避けるか。第一に、母虫の働きによつて乾燥から守られる事が不十分なこれ等の小虫には、若干の恩典が與えられて居るやうに思はれる。私はクロマルコガネ及びツノコガネの幼虫が三週間の断食に皺よつた一小球塊となり果てた後、濡れ綿のお蔭で食慾と肥満と元氣とを恢復するのを見たのである。此の辛抱強さにはそれ相應の効用があるのである。之れあるによつて、幼虫は死と相隣りする昏睡状態にあつて、甚だあてにならない若干の雨滴の濺ぎ來つて彼の饑饉を救はん時を待つ事が出来るのである。辛抱強さは幼虫を救ひはする。けれどもそれだけでは足りない。種族の繁榮は缺乏の上に打ち立てられる事は出来ない。

そこでそれ以上の事が行はれる。そして此のそれ以上の事は母虫の本能によつて與えられる。梨や

卵形を作る虫共が、常に除土の堆山以外に何の保護物もない曝露地に彼等の巢窟を穿つに反し、小さい革袋を踏み固める此の虫は彼等の井戸を利用材料の直下に掘り、しかも好んで馬及び騾馬の厩大な糞山に之れを求め、此の厚い蒲團に蔽はれて、土は太陽の直射と風とから守られ、糞の水分に潤はされて可なり永い間其の新鮮さを保つのである。

のみならず危険の時期は永くはない。一週間足らずにして卵は幼虫と化し、十二日程経つと幼虫は別に障礙の起らぬ限り、完全に發育を遂げる。そこで合計約二十日がクロマルコガネ及びツノコガネの危険期である。其の後では中味を食ひ盡した革袋の壁がいかに乾かうとも平氣である。若虫は寧ろ此の函が丈夫な方がよいので、此の函は如何に丈夫だとしても後に九月の雨が降り初めて虫が脱出する時には、苦もなく毀はされるのである。

外觀及び習性から云ふと、此の幼虫は大玉押コガネ及び其の他が既に我々に知らしめた所の幼虫と同じである。空氣の乾燥作用に對して己が住居を保護する能力も同じ、腸のセメントをもつて極く僅かな割目をでも塗りつぶす熱心さと敏捷さとも同じ、脊中で瘤を作つて居る脊負袋も同じである。

ツノコガネの幼虫の瘤は最も注目に値する。簡單ながらも忠實な其のスケッチが欲しいと思ふならば、皺のよつた短い一本の腸詰を描いてみるがよい。そして、此の腸詰の側面中頃の所に一つの突起を接いでみるとよい。それが幼虫であつてほゞ等しい三つの部分に分たれる。下部は腹である。

上部は最初何處に頭があるか分らない程それ程下部の連續の様に見えるが、之れが例の瘤であつて、此の瘤の途方もない大きさと來たら、恐らくどんな漫畫家がどんなに馬鹿氣た考えを抱いた際とても決して敢て描かなかつた程である。此の瘤が胸と頭とのあるべき場所を占めて居る。それならば胸と頭とは一體何處にあるのか。怪物の様な脊負袋の爲めに側方に押し除けられて、まるで單なる疣の様に、側面の突起をなして居る。此の不思議な虫は其の脊負袋に押しつぶされて直角に曲つて居る。

自然が怪奇なものを作り出さうとしたが最後に底我々の及ぶ所ではない。だが之れは怪奇と云ふべきものであらうか。蒸溜器の頸のやうな、種々な色をした、水滴のきら／＼光る、うちやうぢやした、赤紫の、沈だらけな鼻の發明家であるラブレールが巨大さに對する彼の天才的眼力を以つてしても流石に想像し得なかつたやうな馬鹿氣た鼻を持つた猿を私は繪で見つて居る。あらゆる滑稽な鬚面を要約して頤鬚、亂髮、頰鬚をもちや／＼と生やしたのを知つて居る。しかも疑ふ可らざる事實は、蒸溜器の頸のやうな鼻や、恐ろしい程毛むくぢやらな顔は猿類にあつては甚だ好もしく見られて居るのである。端正と怪奇との限界は少しもない。すべては評價する者によるのである。

若し此の途方もない瘤を有つた幼虫が公衆の面前に現はれたならば、彼がツノコガネ及びクロマルコガネの目に美の至上表現と映ずる事は毫も疑ふ餘地はない。所があつたやうな引込み屋とて誰の目にもかゝらない。彼の魅力ある美も惜しいかな世に知られずに終る所なのだが、幸にも哲人的觀察家が

あつて斯う思ふのである。『何物によらず果すべき任務とよく調和する所のものは宜い。幼虫は其の食糧を乾燥から保護する爲めにセメントの袋を必要とする。彼は生き得んが爲めに脊負袋を負うて生れたのである。』斯うしてあの瘤は立派に申譯が立ち、自慢される。

其の効用の現はるゝ所更に他の一面がある。革袋は如何にも容積が小さいので幼虫は殆ど其の全部を消費してしまふ。残る所は一重の薄い層で、やゝもすれば崩れんとし、若虫は到底此處に安住の地を見出す事は出来ない。此の廢趾を補強し、其の上に更に新しい圍いを設けなければならぬ。之れが爲めにはツノコガネの幼虫は其の脊負袋の底をはたくのである。そして大玉押コガネ及び其の他の流儀で彼の住居の壁にむらのない上塗りをかけるのである。

クロマルコガネの幼虫はこれよりも更に藝術的な仕事をする。彼のセメントを點々と落す事によつて杉の毬果の鱗片に似た、突起の小さい鱗片のモザイクを作り上げる。いよ／＼出來上つて、よく乾いて、最初の革袋の破片を奇麗に取除いてしまふと、斯う云ふ風にして牡牛クロマルコガネの作つた殼は、小さな榛の實ほどの大きさであつた優美な赤楊の毬果に似て居る。そのあまりによく似て居る爲めに初めて私の虫小舎を發掘して此の不思議な産物を手にした時は流石に私も欺されたのである。そして其のハンノキの實だと思つたものの内容を見るに及んではじめて自分の過りを悟つた次第である。あの瘤もあれでなか／＼惡戯者で、斯う云ふ意外にも優美な裝身具の見本をもつて我々をあ

つと云はせたのである。

クロマルコガネの若虫はまた別の意外な物をもつて我々を驚かさうとする。私の観察したのは牡牛クロマルコガネと三叉クロマルコガネの二種にしか過ぎない。しかし、此の兩者の間の相違は丈から云つても形から云つても可なり大きい。そこで私は敢て次の不思議な事實をおしひろめて此の属全體に適用しようとするのである。

若虫は前胸甲の前縁の中途に、約二ミリメートルの突起を有つた極めて截然たる一つの角を有つて居る。それは透明無色で、堅さのない事此の時期に出来はじめの諸器官、殊に肢、額の小角、口の諸片等と變りがない。此の水晶様の突起が一つの未來の角を豫告して居る事は、大腮を豫告して其の最初の乳頭あり、翅鞘を豫告して其の鞘のあるのと同様に明白である。どんな昆虫採集家と雖も私の驚を了解するに違いない。一つの角がこんな所に、前胸部にあるのである。しかも唯一一疋のクロマルコガネとてもこんな武器を有つたものはない。私の虫小舎の帳簿は明からに此の若虫の屬を語つて居るのであるが私にはどうしてもそれが信じられない。ところで若虫が脱皮する。投げ捨てられた弊衣とともにあの見なれぬ角は乾からびて落ちてしまひ、後には何等の痕跡をも残さない。私の二種のクロマルコガネは先刻までは、用ゐせぬ一武器の故にそれと見分け得なかつたが、今では前胸甲に何の刺もない。

單なる疣をすらも残さずに消えてしまふ此の偉ない器官、遂には無刺となるべき一點に生ずる一時的の此の角は少々考えさせる。あの溫和な糞虫等一般に武器が好きである。彼等は異様な甲冑、鋏、附槍、猪槍、鉤、新月刀を好む。早速ながら西班牙ダイコクコガネの角をもう一度呼び出すことにしよう。印度の草原ジャングの犀だとしてこんなのを鼻の上に有つては居ない。基部は太く、先端は尖り、弓なりに曲つて居て、頭を擧げると其の鞘の斜に切られた前胸甲の隆起部に接する。何か怪物の腹を突き破る爲めの鋸とでも云つた按配である。ミノートルをもう一度呼び出してみよう。受筒のある三本の鎗の束で敵を串刺しにしさうな様子をして居る。新月ダイコクコガネは前額に角を戴き、双肩に槍を擔ひ、前胸甲に新月形を切り込んで肉屋の曲つた肉切庖刀を想はせる。



24 ネガコマルコガネ

クロマルコガネの武器は甚だ種類に富んで居る。或もの(牡牛クロマルコガネ)は牡牛の三日月形の角を採用し、或もの(牡牛クロマルコガネ)は一つの幅廣く短い刃を選び、其の切先は前胸甲の切り込みを以て鞘として居る。またあるもの(三叉クロマルコガネ)は三叉の鋒を以て戦ひ、あるもの(ツノマルコガネ *O. nuchicornis*)は基部に小翼を有つた短剣を所持し、或は(アカバネマルコガネ *O. Canalicatus*)胸甲騎兵の直刀を所持する。最も武備薄きものは前額上に横の稜角と一對の小角とを戴いて居る。

斯うした武器飾は何の爲めか。之れをもつて鋏、鶴嘴、又、シアベル、挺、等昆虫が其の發掘に使用するであらう道具と見る可きであるか。決してさうではない。彼等唯一の道具は頭巾と肢、殊に前肢である。私は巢窟を掘り或は食糧を混ぜ合せる爲めに其の武器を使用して居るどんな糞虫をも見た事がない。のみならず、大抵の場合、武器の方向だけでも道具としての其の働きに反するであらう。前方に發掘を行ふに方つて西班牙ダイコクコガネがどうして後方に向いた其の鶴嘴を使用出来るよう。

其の強大な角は攻撃的に向はずして之れに背を向けて居るのである。



34 ネガコルマノフ

ミノトールの三叉鋒は適當な方向に向いては居るけれども、さればとて別に用途があるわけではない。私が缺で此の武器を切り取つてしまつても彼は坑夫としての技能を少しも失ひはしない。完全な仲間のものと同様に易々と地下に降つて行く。それよりも更に結論的な證據は巢作りの仕事を擔當する所の母虫である。母虫は此の上ない好い働き手であるに拘らず、これ等の角飾を有たず、よしや之れを有つて居るにしても著く減退して居る。彼女等は甲冑を簡單にし、全然之れを投げ捨てる。蓋し、仕事に際して手助けになるよりも寧ろ邪魔になるからである。

これを以て防禦の具と見るべきであらうか。さうでもない、主として糞食虫を養ふ所のもの反芻類であるが、彼等も亦前額に武装する傾向がある。趣味の類同は明らかであるがその由來する所遠い

動機に至つては我々之れを推測する事が出来ない。牡山羊、牡牛、牡羊、羚羊、牡鹿、馴鹿、其の他何れも角及び叉角をもつて武装し、戀の争ひ、或は脅かされた群の保護に之れを使用する。クロマルコガネはかうした闘争を知らない。彼等の間には喧嘩と云ふものはない、そして若し危険があれば、單に肢を腹下に縮めて死を装ふ事をもつて是れりとする。

それ故彼等の甲冑は單なる裝飾であり、男性のおめかしの一つに過ぎない。最も美々しく飾られたものに勝利の榮冠が歸するのは之れ生存競争の法則である。我々にはあの鼻上の長劍が奇怪なものと思はれるにしても、彼等の意見はまた別であつて、最も奇怪を極めたものが最も好まれるのである。極く小さな球塊が偶然一つ餘計に隆起すると、それだけ男振りが上つて婚定めの材料となり得るのである。最も美しく飾られたものが母虫を捕え、子を儲け、彼等の勝利の原因たるあの小角、あの疣を子孫に傳えるのである。今日昆虫學者の讚嘆する所のあの裝飾は斯うして次第に作られ、斯うして傳えられ常に益々完成せられたのである。

進化論者の説に對してクロマルコガネの若虫は答える。「私の脊には一つの角が生えかけて居る、之れを發達させれば我々が身につけてまことに美事な一つの裝飾となるのである、其の證據にはニセダイコクコガネを見るがよい。彼は之れを以て舢形の立派な突起を作つて居る。また異國の種々な親類たちを見るがよい。彼等はその前胸甲を伸ばして一つの素晴らしい蹴爪として居る。私には我々一

族の中に革命を起こさせるだけのものがあるのである。若し私が此の優美な新機軸たる瘡を保つて居れば、私の競争者などは第二位に蹴落して、私が選に入り、私が先祖となり、私の種族は私の試みの足らぬ所を補ひ、悪しき所を改良して遂にはあんな古い、時代離れのした種々な風俗の消滅を見るであらうのに。何故私の脊の疣は用もなく凋れ落ちねばならぬのか、何故私の試みは幾世紀來毎年繰り返えしつゝも決して約束の結果に達しないのか。」

まあ、さう野心を起さずにお聴き。學説は如何なる偶然の獲得にせよ、またそれが如何に小さいものであるにもせよ、若し用ゐて利あるものならば相傳えられ、増大すると云ふ事をたしかに斷言して居る。だが此の斷言を餘りあてにしてはいけない。更に一つの裝飾をつけ加えると云ふ事がお前に取つてどれ程有利であるかを私は疑はない。だが、變形の因子としての時及び場所の有効性に就ては疑ふ。しかも大に疑ふ。お前は遠き世に一時的の肉刺をでかして生まれた身、今も猶、また將來も、此の瘡の未成物を有つて生まれ、しかも之れを固定し、之れを硬化せしめて一つの角となし、お前の婚禮衣装に更に一つの裝飾を付け加える望みは決してないものと信じた方が賢い。

人間も糞虫も、我々は皆一つの變る事なき原型に摸して作られたものである。生活の變轉極まりなき諸條件は我々の表面をこそ少しは變える。骨組に至つては斷然變える事は出来ない。幾世紀の綠青はメタルを鏝で蔽うて之れを醜くする。しかし最初の繪模様、最初の銘記を亡ぼし他のものをもつて

之れに代える事は出来ない。此の人間の濁界にあつて如何に鳥の翼の希はしくとも、何物も私にそれを與える事は出来まい。それと同様にお前の若虫時代の疣が如何に其の前徴と見えようとも、お前が成年に達した時何物もお前に武者振り雄々しい羽前立を與えはしない。

クロマルコガネ及びツノコガネの若虫は約二十日にして成熟期に達する。八月の中に形はすつかり整つて、今迄の研究でおなじみの紅白染め分けの服を纏ふ。正規の色彩は可なり速かに出来上る。しかし虫は急いで殻を破らうとはしない。餘りに困難が大きいからである。九月の雨の降り初めて、彼を助けて其の函を軟くしてくれるのを待つて居るのである。

此の救ひの雨がやつて来る、すると忽ち、小さなクロマルコガネの群が嬉々として地下を出で食糧の山に駆けつける。此の時期に虫小舎が私に啓示してくれる種々な深い秘密の中で殊に一つ私の注意を惹くものがある。私は別々の住居に新兵と古兵とを同時に飼つて居るが、古兵は新兵に劣らず輕快で、初めて戸外の食卓についた彼等の息子等と同じやうに熱心に食糧に寄りついて居る。二つの時代が私の虫小舎に住んで居るのである。

大玉押コガネ、ダイコクコガネ、玉押コガネ等春に巢作りするすべての糞虫にあつては同じやうに父と子が同時に生活する。私は慎重の注意を拂つて卵の孵化を監視し、孵化するに連れて若い虫を一つの特別室に入れるやうにして此の驚く可き同時性を確める事が出来た。

昆虫學上の規則から云ふと親は其の子を見ない事になつて居る。親は子等の將來が保障された以上は死ぬのである。大玉押コガネと其の競争者とは素晴らしい特權によつて彼等の後繼者を知つて居る。父と子とは、私の虫小舎では研究の必要上已むなく引き離されて居るけれども、自由な野良に於ては同じ饗宴に招かれるのである。彼等は日向に共に嬉戯し、うまくめぐり合せた山を共に採掘する。そして此の楽しい生活は秋の好き日に恵まれる限り続く。



3 ネガコマルコガネ

寒さがやつて來ると、大玉押コガネ、ダイコクコガネ、クロマルコガネ及び玉押コガネは我が爲めに一つの巢窟を掘り、食糧を抱いて此處に下り、門を閉ざして待つのである。一月の凍り切つた一日私は風雨に曝して置いた虫小舎を發掘してみる。捕虜の全部を辛い目に會はせないやうに用心に用心して掘る。掘り出された虫は各々一つの住居の中に居て傍に食ひ残りの食糧がある。日に當ててやると觸角と肢とを少しく動かす、寒さから來る假死の状態にあつてはそれだけがやつとである。

二月になつて、やつと無鐵砲な巴且杏の木が花を開いたと思ふと、もう眠つて居た中の幾つかが目醒す。クロマルコガネの中でも一番早熟な二つ(オニ・クロマルコガネ O. Lemur、前角クロマルコガネ O. fronticornis)が此の頃は一番普通に見かけられるもので、大道で日に照らされてなま温かく

なつた糞をもうあさつて居る。それから間もなく春の祭が一時にわつと始まつて大きいのも小さいのも、新參も古參も皆之れに参加する。古參者は、皆が皆ではないが、少くとも其の中の若干、體力のなほ衰えぬ者は再度の婚姻をする。前代未聞の特權である。彼等は一年の間隔を置いた二組の子を有つのである。またある大玉押コガネ (S. lativollis) の證據立てて居る通り三組の子を有つ事も出来る。此の大玉押コガネは三年來虫小舎にあつて毎春彼の梨の蒐集を私に與えて居る。殊によつたら之れ以上にも與えるかも知れない。糞虫族には其の尊敬すべき族長が居るのである。

センチコガネ——一般衛生

成虫の形で一年四季を完全に過し、一陽來復の賀宴には其の子等に取り巻かれ、家族を二倍にし又三倍にする、これこそ實に昆虫界稀に見る所の特權である。蜜蜂屬は本能に於て貴族であるが、一度蜜壺が満たされると死ぬ。蝶も亦貴族であるが、これは本能に於てではなく裝飾に於ける貴族であつて、彼の卵の包を適當な場所に産みつけてしまふと死ぬ。オサムシは豪華な甲冑に身を裝つて居るが、子孫の種を小砂利の下に撒いてしまふと斃れる。

其の他のものも皆同様で、たゞ社會的昆虫だけは、母虫が唯獨り、或は從者を從えて生き残る。此の法則は一般的であつて、昆虫は生まれながらにして父も母もない孤兒である。所が茲に意外にも風向きが變つて此の賤しい肥取虫はあの立派な虫共を無殘にも薙ぎ倒して行く奇酷な運命からまぬかれて居る。糞虫は飽きる程長生きして族長となるのである。

此の長壽は先づ第一に、私が嘗て身の上話の大層面白さうに思はれた虫類と近づきにならうと思つて、私の箱の中に膜翅類を針で留めて並べて居た頃に私を強く打つた一事を説明してくれる。オサム

シ、ハナムグリ、タマムシ、カミキリムシ、ハンノキカミキリ等、何れも一つ一つ見出されるもので却々搜索に時間を要したのである。何か一つ發見すると感激に頬をほてらせたものである。我々の中の一人がこれ等の珍稀な發見物の一つを捕えると我々初心者の一團から感嘆の叫びが擧がつたものである。其の幸福な所有者に對する我々の祝詞には幾分の嫉妬の情が伴つて居た。其れは已むを得ぬ事であつた。まあ考えても頂きたい。却々皆の手に入る程は居なかつたのだから。

櫻の枯木に棲んで居るアヲハンノキカミキリは卵黄に黒天鷲絨の段々をつけた衣裝を纏い、紫赤オサムシは其の黒檀の翅鞘の周圍に紫水晶の縁を取り、燦光タマムシは黄金と銅とのきらめきを孔雀石の豪華な縁と組み合はせる。これ等はまことに我々全部を満足させるには餘りにも稀な大發見であつた。

所が糞虫に至つては何とも有難い次第である。先づ此の膜翅類だつたならばどんなに貪慾な殺虫瓶にでもいやと云ふまで詰め込んでやる事が出来る。他の膜翅類がまばらに存在するに反しこれは無數に群れをなして居る。殊に小さいのがさうである。私はクロマルコガネとマグソコガネとが同じ屋根の下で幾千とも數知れず蠢いて居たのを覚えて居る。之れなどはシアベルで掬えば掬える程であつた。

今日まで何度此等の大群を繰り返し見ても私の驚異は衰えない。昔と同様、糞虫の家族の豊富な事は諸他のものの比較的稀である事と著しい對照をなして居る。若し昆虫採集箱を再び取つて、あれ

程樂しい思ひ出のある探索を再び始めようと云ふ考えが私に起つたならば私は確かに、此の族の他の方面で貧弱な掘出物をする前に大玉押コガネ、ダイコクコガネ、センチコガネ、クロマルコガネ及び其の他の同一團員をもつて私の殺虫瓶を満たすに違いない。五月の月になると糞捏虫が數に於て優勢を占める。七月八月となつて目も眩まんばかりの暑氣が野良の生活を一時中止させる時期になると他の虫共は土中に身を埋め、凝つとして、麻痺したやうになつて居るのに此の汚物經營虫ばかりは相變らず働らいて居る。彼は同時代の蟬と共に酷暑時に於ける活動の殆ど唯一の代表者である。

斯く糞虫が、少くとも私の地方に於て、非常に數多いのは、其の原因が成虫形に於ける長壽にあるのではなからうか。私はさうだらうと思ふ。諸他の昆虫が好季節の歡樂に一時代づつしか招かれないのに、彼等は父は息子と共に、娘は母と共に招かれるのである。そこで繁殖力が等しいとすれば彼等は二倍に表はされるわけである。

そして彼等の勤勞を思ふならば彼等は眞に之れに値して居ると云はねばならない。世には一般衛生と云ふものがあつてあらゆる腐敗物を出來るだけ速かに消滅させる事を要求する、巴里は未だ其の汚物處理の大問題を解決して居ない。これは早晚此の怪物のやうな都市の死活問題とならう。其の中に光の都は腐敗物で飽和した土地の瘴氣の中に消えて行く運命にあるのではないかと疑はれる。數百萬人の集團が其のあらゆる言と才能とをもつてしてなほ持ち得ぬ所の物を、いとも小さき寒村が何等の

費用をも掛けぬばかりか、大した問題にすらもせずして既に所有して居るのである。

自然は農村の衛生に就いては惜しげもなく心を勞するけれども、都會の安樂には無關心であるか、さうでなければ之れに反對する。自然は田園の爲めに何物にも倦むまず、何物をも厭はぬ二種類の清掃人夫を創り出した。一は蠅、ヒラタシデムシ、鏝節虫、クロシデムシ、エンマムシ等で彼等は屍體解剖係りを命ぜられ、肉を刻み、骨を截り、彼等の胃中で死の殘物を蒸溜してこれを生に戻すのである。

農具に腹を斷ち割られた一疋の土龍が既に紫色に變じた其の腸をもつて小徑を汚して居る。一疋の蛇が芝生地に横はつて居るが、之れは通りがりの者が愚にも何かよい事でもする積りで踏みつぶしたのである。まだ羽根も生えない小鳥が巢から落ちて木の根元に惨めにもびしやんこになつて居る。其の他之れに類似のあらゆる種類の幾千と云ふ死骸がそこゝに點在して居て、若し何物も之れを片着けないならば毒氣を發散するのまことに危険である。だが心配する事はない、一つの死骸が何處かに見つかつたと云ふ知らせがあると早速小さな屍體運搬人夫どもが駆けつけて來る。そして之れに加工し、之れを空らし、骨まで食ひ盡し、さうでないまでも之れを木乃伊のやうに乾燥させてしまふ。一晝夜足らずにして土龍も、蛇も、小鳥も消えてしまふ、そして衛生は満足に保たれる。

第二種の清掃人夫にあつても仕事に對する熱心は同様である。都會で我々が苦しまぎれに訪づれるあのアンモニア臭い共同便所は村では殆ど知られて居ない。高さもほんのこればかりの一つの小さな

土塀、一つの生垣、一つの茂み、そんなものが百姓が獨りである事を希ふ時に隠れ場所として要求する所のものの總てである。地衣の薔薇模様、苔の小座蒲團、ペンケイサウの繁み、其の他古石を飾る種々の美しい物についさそはれて、葡萄酒の土を支えて居る一寸した土塀まがひに近づいて行く。おつと、こんなにしゃれて飾られた隠蔽物の足元に、これはまあ何と堪らない奴がこて／＼とひろげられて居るではないか。そこで逃げ出す。地衣も、苔も、ペンケイサウも最う誘惑しない。翌日もう一度来てみるとよい。例のものは消え失せて、其の場所は綺麗になつて居る。糞虫の手が此處に働いたのである。

斯う云ふ不愉快なものを餘り屢々繰り返して見ないで済む様にしてくれる事は、これ等の勇敢な働き手としては極く些細な仕事に過ぎない。之れよりもつと大きな使命が彼等には託されて居る。學者の斷言する所に據ると最も恐るべき人類の災禍は植物界の最極限界にある徴と相隣る所の微生物細菌をもつて其の手先として居るのださうである。此の怖るべき種は到底算える事の出来ない程の數をもつて傳染病の時期には排泄物の中に蠢めいて居る。彼等は生命の第一の榮養分たる空氣と水とを汚染し、我々の肌着、我々の衣服、我々の食物の上に撒きちらされ、かくて傳染病を蔓延させる。之れに汚染した物はすべて火をもつて焼却し、腐蝕剤をもつて殺菌し、地に埋めなければならぬ。更に用心するならば汚物を地面にしばらくでも捨てて置く事は斷じて許せない。それが無害である

か、危険であるか、疑のある場合には之れを消滅させるに越した事はない。古代の賢人は斯う理解したらしい。怠りなき警戒が此の場合如何に必要であるかを細菌が我々に教えてくれた時よりも遙に以前の事である。東洋の諸國民は我々よりも一層傳染病の危険に曝されて居るが、此の問題に就いて明確な掟を知つて居た。モーゼは此の場合明かに埃及の學問を模倣して居るのであるが、其の民がアラビヤの沙漠をさすらふ時の行動を規定して居る、「便意を催せる時は陣營を出で尖れる棒を取り、地に一つの穴を穿て、而して掘り出せる土をもつて汚物を蔽え」(申命記第二十三章十二—十三節)。

素朴な中に重大な意義のこもつた掟である。若し回教徒にしてカアバに於ける其の大巡禮の際に、斯くの如き注意と之れに類似した諸他の注意とを怠らなかつたならば、メツカは最早毎年コレラ病の發源地となる事なく、又歐羅巴は此の災禍を防がが爲めに紅海の岸邊を警戒させる必要もなくなる事はたしかである。

プロヴァンスの百姓は、先祖の一人であるアラビア人と同様に衛生には無頓着で、少しも危険に氣づいて居ない。幸にもモーゼの教訓を忠實に守つて居る糞虫が働いてくれる、細菌を宿した材料を消滅せしめ、之れを埋めるのは彼の役である。彼は、イスラエルの民が急用に促されて陣營外に出る時に革帯に携行しなければならなかつたあの先端の尖つた棒よりも、もつと優れた發掘道具を携えて駆けつける。人が行つてしまふと彼は早速一つの井戸を掘り、汚物は其處に呑み込まれて、最う無害の

ものとなつてしまふ。

これ等埋葬人夫等の働きは田園衛生上極めて重要なものである。しかも我々は、此の不斷の清掃作業の利益を享くる事最も多きに關はらず、これ等の健氣な虫共に侮蔑の一瞥をでも投げてやるのはまだよい方である。口善惡ない民間では甚だ聞き苦しい名稱を附して彼等を惱まして居る、だがそれが一般の定めらしい。曰く、善を爲せ、しかし汝の働きは認められず、惡名を着せられ、石をもつて打たれ、踵下に踏みにじらるべし、と。あの蟻、蝙蝠、針鼠、鼻、及び



ネガコチンセ、ルゲニビス

其の他我等の補助者としてよく我等の爲めに盡し、しかも僅かの寛容を請ふ以外には何物をも要求する事なき諸禽獸の運命が證據立てて居る通りである。

所で、あのしやあ〜と日向に寝をべつて居る汚物の危険から我々を守つてくれる虫等の中で、我々の地方として一番注目に値するすのはセンチコガネである。それは何も彼等が他のものよりも熱心だからと云ふわけではない、たゞ柄が大きいので一番大きな仕事をすゝる事が出来るからである。のみならず、單に彼等の口腹を満たすだけの時には、彼等は好んで我々の最も恐れねばならぬ所の材料を求めるのである。

四種のセンチコガネが私の附近で働いて居る。その中二種(カワリセンチコガネ *G. mutator* Marsh.

及び森センチコガネ *G. sylvaticus* Panz.) は稀にしか存在しないのであるからして永續的研究にはあてにしない方がよい。他の二種マダソセンチコガネ (*G. stercorarius* Lin.) クロセンチコガネ (*G. hypocrita* Schneid.) は之れと反對に最も頻繁に見かける所のものである。上側はインキのやうに黒いが下側はどちらも豪勢な装束をして居る。此の様な肥料係りがこんな立派な寶石を藏して居るのを見ては誰でも事の意外に驚かされる。マダソセンチコガネは下面に素晴らしい紫水晶のやうな紫色を帯び、クロセンチコガネは其處に黄銅鍍の紅輝をふんだんに使つて居る。

これが私の虫小舎の二種の寄宿生である。

先づ第一に彼等が埋葬人夫としてどんな大手柄を立て得るかためしてみよう。彼等の数は二種を合せて一ダース程である。虫籠は今までいくらでも遣り放第にやつて居た食物の残りをあらかじめ取除けてしまふ。

今度は一疋のセンチコガネが一回に埋め得る所の量を測定したのである。日の入り頃、恰度其の私の家の門口に一疋の驟馬が落ちて行つた山の全部を私の捕虜十二疋に御馳走してやる。實に豊富でたつぷり一籠の分量はある。



ネガコチンセロク

翌朝みるとその山は地下に姿を消して居る。もう外部には殆ど何もない。そこで可なり近い数字の測定をする事が出来る。つまり私のセンチコガネ一疋は、十二疋の各々が同じ分量の仕事をしたもの

と假定して、略々一デシメートル立方近くの材料を倉入れした事が分かる、此の虫の柄の小さい事を想ひ且つ獲物を運び入るべき倉庫を地下に掘らねばならぬ事を想つたならば、これはまことに仁王様の働きと云はねばならない。しかもそれが唯々一夜の中に行はれたのである。

これ程たんまりと食糧が出来たからには彼等は、これから此の寶物を持つて地下に凝つとして居るであらうか。どうしてどうして、天氣は上々だし、黄昏は静に和やかにやつて来る。これこそ大飛躍の時、羽音高く歡喜の亂舞をする時、今家畜の群が通つて行つた路上に遠征する時である。私の寄宿生たちは彼等の地下室を捨てて再び地上に登つて来る。彼等ががさ／＼と音を立てたり、金網に攀ち登つたり、夢中になつて壁にぶつかつたりするのが聞こえる。此の黄昏時の騒ぎは豫想されて居た。前日の食糧と同様に豊富な食糧が晝間の中に集められて居たのである。私は其れを御馳走してやる。すると前回と同様に夜の中に消えてしまふ。翌日になると其の場所は綺麗になつて居る。若しこれ等飽くなき埋藏家を満足させるに足るだけのものが常に私の手許にあるならば、斯うした状態はタベタベの晴穩である限り無限に續くのである。

センチコガネは如何に豊かな獲物を有つて居る場合でも、日の入りとなると之れを去つて暮れ残る微光をたよりに嬉戯し且つ新しい仕事場の探索に取りかゝる。まるで彼に取つては既得物は計算に入らないで、たゞ之れから獲得されようとして居るもののみが價值あるかのやうである。斯くして好季節

に毎夕新しく取り込んで行く倉庫の品物を彼は一體どうするのであるか。これ程豊富な食糧を一夜にして消費し得ない事は火を賭るよりも明かである。彼の所には有り餘つてどうしてよいか分らない程の食糧がある。彼は決して利用する事のないであらう財産を溢れる程も有つて居る。しかも一杯に詰まつた彼の倉だけでは満足が出来ないで此の獨占者は、毎夕更に多くを倉に積み込まうとして骨を折つて居る。

彼は其處此處に建てた倉の一つ一つから行き當りばつたりに其の日の食料品を取つて来る。そして残りは殆ど全部棄ててしまふ。此の埋藏者としての本能が消費者としての食慾よりも切實である事は私の虫小舎の證明する所である。其處の地面は直きに隆起して来るので私は時々其の水準を必要の限度に引き下げる事を餘儀なくされる。若し其處を掘つてみるならば其の厚さの全部がまだ手のつけない食糧の残りの山で満たされて居るのを見出すのである。最初の土はたゞもう紛然雜然として何處が何やら分らない一つの塊りとなつて居るので、これから先の觀察に迷ひ過つ事のないやうにと思へば大に之れに手入れをしなければならぬ。

正確な測定を許さぬ題目に於ては過大過小の誤謬は避け難いものであるから、此處にも誤謬はあるであらうが、たゞ一つの點が私の調査の結果極めて明かになつた。即ち、センチコガネは熱狂的埋藏者である。彼等は彼等の消費に必要である以上の財を地下に搬入する。之れと同様の仕事は、種々な

程度に於て、大小無数の協働者によつて遂行されるが故に、土地の清掃が其の影響を蒙る事多かるべき事は明かだ、一般衛生は斯くの如き補助軍を其の働き手として有つ事を喜びとしなければならぬ。のみならず植物及び間接には多数の存在がこれ等の埋藏に關係を有つて居る。センチコガネが地に埋めて其の翌日には棄ててしまふ所ものは決して無駄にはならない。いやそれ所ではないのである。此の世の精算書に於ては何一つとして無駄に失はれるものはない。財産目録の總額は常に不變である。此の虫によつて地下に埋められた此の小さな一塊の堆肥は、附近に茂る芝草の緑をいよ／＼濃くするであらう。一疋の羊が通りかゝつて其の草を食む。するとそれだけ人間が待つて居る羊の腿は肥る事になる。糞虫の働きのお蔭で我々がおいしい御馳走にありつけようと云ふわけである。

すべてを我々本位に考へたがる我々の悪習慣から見ても、これは既に何等かの價値を有つ事である。若し我々にして反省熟慮、此の狭い見地を脱出するならば其の價値遙かに大なるを認めるであらう。直接間接に其の利益にあづかる總てのものを調べ上げる事は、生物相互の關係錯綜してまた解きが故に到底不可能である。たゞ漠然と想像される所を擧げてみても、例えば頼白が雨と陽に茶色に焦げた細かい麥藁を拾つて彼の巢の寢床の心とする。何かミノムシの幼虫が此の同じ麥藁屑を鱗狀に並べて彼の護鞘を作る。小さなコフキコガネが禾木科植物の莖を食ふ。極めて小さな穀象虫が熟した種子をもつて幼虫の搖籃とする。木虱の群が葉の裏に居を卜すると蟻が此の群の甘い小角を吸ひに来る。

まあ此の位にして置かう。いくら數え上げても切りがないのである。肥料埋藏者たる糞虫の農業から利益を受ける者は實に多い。先づ第一に植物があり、それに次いで植物の利用者がある。小さな世界だと云はれれば如何にも小さな世界に違いないけれども、しかしよく考へてみると決して等閑に附し得ない世界である。斯くの如き無にも等しい小さなものからこそ全宇宙の偉大な生命は出來て居る。幾何學の全體が零に隣りする量から成り立つて居るやうなものである。

農業化學の教ふる所によると、家畜の堆肥を最もよく利用するには出來るだけ新鮮な状態で之れを埋めなければならぬ。雨に洗はれ、空氣にさらされては堆肥は活力を失つて地を肥やす力がなくなる。此の農學上の眞理は極めて重要なものであるが、センチコガネ及び其の同業者等は之れを熟知して居る。彼等は埋藏作業を行はうとする時には何時も新鮮な材料を選ぶ。彼等は出來たてのまだボツタシウムと窒素と磷酸とに富んだ代物を埋藏するに熱心なれば熱心なだけ、日に照らされて硬くなり、空氣に長い間曝されて養分に乏しくなつた物を輕蔑する。價値のない殘物は彼等の關心せざる所。そんな憐れにも貧弱な代物は他の連中にくれてやる。

これで衛生家として又肥料蒐集家としてのセンチコガネの事は分つた。次に第三の見地から見ると彼が聰明な氣象學者である事が分かる。田舎では夕方センチコガネが澤山非常に忙しげに地面を掠めて飛ぶのは翌日晴天のしるしであると信じて居る。此の田舎の天氣豫報には何等かの價値があるか。

私の虫小舎によつて之を知る事が出来る。彼等の巢作り期たる秋中私は私の寄宿生たちを嚴重に監視する。私は前日の空模様を記して置き、翌日の天氣を記録する。此處では寒暖計も使はなければ、晴雨計も使はない。氣象臺で用ゐて居る立派な道具などは何一つとしてない。たゞ私の個人的印象を簡単に記録するに止まる。

センチコガネは日没後でなければ彼等の巢窟を出ない。暮れ残る夕の微光に、若し大氣穩かにして肌に温かならば、彼等は羽音高く地を掠め飛ぶ。一日の活動が彼等の爲めに準備してあるかも知れない材料を探るのである。氣に入つたのが見つかるると彼等は其の上にとつと襲ひかゝる。餘りひどい勢で飛び下りてとんぼかへりしたりする。そして此の發見物の下に潜り込んで之れを埋める爲めに夜の大部分を費す。斯うして野良の不淨は一回の夜業で片付けられてしまふ。

此の清掃には是非一つの條件が必要である。靜で温かい大氣が必要なのである。若し雨が降るならばセンチコガネは動かうとしない。彼等は長期の休業に堪えるだけの食糧を地下に藏して居るのである。寒いとか、北風が吹くとかしても矢張り出掛けない。どちらの場合にも私の虫小舎の地面は寂寥を極めて居る。斯うした餘儀ない遊びの時期は除いて、たゞ大氣の状態が彼等の外出に適する夕、或は少くとも私にはさう思はれる夕だけを觀察してみよう。私は私のノートの詳細を三つの大きな場合に要約してみよう。

第一例。素張らしい夕。センチコガネどもは檻の内で大騒ぎ。彼等の夕方の夫役に早く駆けつけたくてちり／＼して居る。翌日、極上の天氣。豫報は此の上なく簡單なものに過ぎない。今日の快晴は前日の快晴の續きである。若しセンチコガネの知る所が之れに止まるならば彼等は殆ど其の評判に値しない。だが結論する前に試験を續けてみよう。

第二例。同じく美しい夕。私は経験によつて此の空模様ならば明日は快晴だと思ふ。所がセンチコガネはさうは思はない。彼等は出て來ない。どちらが正しいのだらう。人間か糞虫か。糞虫の方だつた。彼は其の鋭い感性によつて驟雨を豫感し、嗅ぎつけたのだつた。實際夜中に俄に雨が降り出して翌日の一部まで降り續いた。

第三例。曇天。南風雲を集む。雨を齎すであらうか。私はさう思ふ。どう見てもさうとしか思へない。しかるにセンチコガネどもは彼等の檻内を羽音高く飛び廻つて居る。彼等の豫報が適中して、私の間違つて居た。雨の脅威は消えてそして翌日の太陽が輝かしく昇つた。

大氣中の電壓が殊に彼等に作用するらしい。雷雨を孕んで蒸し暑い夕方など彼等は平常よりも更に大騒ぎをやる。翌日には猛烈な雷が鳴り出すのである。

三ヶ月間續けた私の觀察を要約すると右の通りである。晴れて居やうと曇つて居やうと空模様の如何に拘はらずセンチコガネどもは夕暮頃に忙し氣に騒ぎ廻つて晴天或は雷雨を豫報する。まことに生

ける晴雨計である。ことによつたら、此のやうな場合、物理學者の晴雨計よりもつと信頼の出来る晴雨計かも知れない。生命の微妙な感性は鈍重な水銀柱に優つて居るのである。

機會があつたならば改めて詳細を報告するだけの價値のある一事實を此處に擧げて本文を終らう。一八九四年十一月十二日、十三日及び十四日、私の虫小舎のセンチコガネ共が異常な騒ぎをやつた。私は曾てこんな騒ぎを見た事もなし其の後とても二度と見た事がない。彼等はまるで狂氣の様に金網に攀ち登る。絶えず飛立つては忽ち壁にぶつかつて翻筋斗ヒルキウして落ちる。容易に巢窟ネソに戻らうとはしないで夜更けるまで不安氣に行つたり來たりして居る。こんな事は彼等の習慣と全く相反する。外部からは附近に居た自由な身の二三の仲間が驅け着けて私の虫小舎の門前で一緒になつて騒いで居る。一體何事が起つたのでこんな他所の者までやつて來たり、殊に私の虫小舎がこんなにまで心配して居るのであらうか。

此の季節には極く稀な暑い日が幾日か續いた後で南風が吹きつゝのり、今にも雨を降らさうとする。十四日の夕方になるとはてしなき斷雲が月の面を掠めて走る。まことに壯觀である。其の數時間前にセンチコガネ共は狂氣のやうに立ち騒いで居た。十四日から十五日へかけての夜中に風は風ぎた。そよとの風もない。空は一様に灰色。雨が降る、垂直に、單調に、絶え間もなく、手のつけやうもなく。もうこれつきりやまないのぢやないかと思はれる。事實十八日までやまなかつたのである。

センチコガネは十二日からして既にあんなに騒いで居た。此の大降雨を豫感したのであらうか。どうもさうらしい。しかし、雨の近くには彼等は通常その巢窟を出ないのである。してみると彼等があるやうに騒ぐには何かまことに異常な出來事があるに違いない。

新聞が此の謎を解いてくれた。十二日に、前代未聞の激しい突風が佛蘭西北部地方に起つたのであつた。暴風雨の原因たる激しい氣壓の低下が私の地方にまで響いたのである、そしてセンチコガネ共が彼等の異常な不安状態によつて此の深い混亂を警告したのであつた。若し私にして彼等の云ふ所を了解し得たならば、彼等は新聞に先んじて私に此の嵐を語つて居たのである。之れは單なる偶然の一致であらうか。それとも原因結果の關係があるのだらうか。資料の數不充分なるが故に此の疑問點をもつて本文を終るとしよう。

センチコガネ——巢作り

九月から十月にかけて、降り初めた秋雨に土は潤ひ、大玉押コガネも函を破つて生まれ出る頃、マグソセンチコガネとクロセンチコガネとは家族の住居を作るのである。「土掘り」といみじくも呼びなされたこれ等の坑夫の、名もいたづらに、其の家は可なりにお粗末なものである。しかし冬の厳寒を防ぐに足る程の隠れ家を我が爲めに穿つ點に於ては、センチコガネはまことに此の名に相應しいものである。井戸の深さに於て、仕事の完成と速度に於て何者も彼に比肩し得ない。砂利混りで掘るに大して骨の折れない土地で、私が掘り出したものは深さ一メートルに達して居つた。他の連中になると更に深く掘り進んで居て、私の忍耐力と私の道具とを疲らせて居た。これこそまことに老練な井戸掘人夫であり、比類なき土掘りである。寒さがいよ／＼厳しければ彼は最早凍結を恐るゝに足らぬ程の深さにまで掘り降りるすべを知つて居るのである。

併し家族の住居となると問題は自ら別である。好季節は短い。各幼虫に此のやうな住宅を興へねばならぬとしたら、到底時が足りない。冬が近づいて餘暇の生じた時、此の餘暇を無限の測深孔に費す

のはまことに結構である。隠れ家は一段と安全になるし、活動はまだ休止されて居ないので差當り他に仕事もないのであるから。しかし産卵期には、こんな骨の折れる仕事は到底不可能である。時の経つのは早いし、可なり多数の家族に四五週間で住宅と食糧とを供給してやらなければならぬ。随つてこつ／＼と辛抱して何時までも井戸を掘つて居るわけには行かない。

のみならず、地面の危険に對しては種々と用意が施されるのである。成虫自身は無防禦なので、既に家族の者等の住居が出来てしまふと、自分の冬營所を非常に深い地點に設けなければならぬ。そして其處から春になるとあの大玉押コガネのするやうに我が子等の社會へと登つて來るのである。しかし幼虫や卵は兩親の勞作によつて保護されて居るので、極寒の候とてもこんな大が／＼りな避難所を必要としない。

センチコガネが其の幼虫の爲めに穿つ所の巢窟は、季節の相違にも拘はらず、ダイコクコガネ及び大玉押コガネのそれと殆ど深さを異にしない。約三デシメートル、これが深さを制限する何物もない野良で私の確めた所の總てである。私の虫小舎では土の厚さに制限があり、昆虫は其の中にあるだけの土の層を利用するより他に途がないのであるから、此の測定はそれ程信用が出来ない。しかも私は此の薄い土層すらも函の底板まで貫通されて居ない事を度々認めるのである。これは大した深さを必要としない事の一新證據である。

野良で自由にして居る時も私の虫小舎に囚はれて居る時も、巢窟は常に利用蕘山の下に穿たれる。驢馬の龐大な落し物によつて蔽はれて居るので外部からは少しも分らないが、兎穴に似て圓筒形を呈し、瓶の頸程の口徑を有し、等質の土にあつては眞直に垂直に下り、粗雑な地質に於ては屈折曲折して不規則だが、これは石や木の根に妨げられてやむを得ず急激な方向轉換をやるからである。私の虫小舎では、井戸は最初は垂直であるが底板に會して屈折し、水平に伸びて居る。随つて掘鑿上等等正確な規則があるわけではなく、地勢によつて形状が決定される。

地下道の末端に於ても、ダイコクコガネ、大玉押コガネ及び玉押コガネが彼等の梨や卵形を藝術的に作り上げるあの廣い室、あのアトリエを想はせるやうな物は何もなく、たゞ他の部分と同じ直經の袋小路があるばかり。抵抗の異なる地中にあつては避け難い結節や屈曲を除いてみれば宛然たる探り穴である。曲りくねつた百ひろ、それがセンチコガネの巢窟である。

此の粗末な住居の内容は一種の腸詰であつて、圓筒の下部を満たして其の型通りきつちりとつまつて居る。其の長さはセンチコガネにあつては二十センチメートルを去る事遠くなく、幅は四センチメートルである。クロセンチコガネにあつては全體の容積が之れよりも少し小さい。

何れの場合に於ても腸詰は殆ど常に不規則で或は曲り、或は多かれ少なかれ凹凸が出来て居る。此のやうに表面が不規則なのは石地の凹凸の爲めで、さう云ふ地勢になると直線と垂直とを好む此の虫

も流石に其の技術の規則に随つて掘るわけには行かないのである。型付けられた内容物は其の鑄型のあらゆる不規則な形を忠實に再現して居る。下端は巢窟の底それ自體と同様に圓味を帯び、上端は少しく中低になつて居る。中央部を餘計に押しつける結果である。

此の巨大な塊は幾重もの層に割られる。そして其の剝片の彎曲の具合や、層々相集まつて居る具合は時計の硝子蓋を一柱に積み上げた趣きがある。其の一つ／＼が一と抱えの材料に相當する事は明らかで、之れは巢窟の上方にある蕘山から掘り出され、巢窟内に搬び下され、前に在る層の上に置かれ、それから強く踏みつけられたものである。此の圓板の周縁は右の押壓作用を受くる事比較的少ないので、少しく高い水準に止まつて居る。それやこれやの結果として一つの中低メニクスが出来たのである。また此の押しつけられる事比較的少ない外縁は相集まつて一種の皮をなして居るが、此の皮は此の穴の壁と接觸して居るので土で汚れて居る。要するに其の構造は其の製作方法を我々に語つて居る。センチコガネの腸詰は我々の腸詰と同様に一つの圓筒内に材料を詰め込んで作つたものである。材料を次ぎから次ぎへと搬び込んで幾重もの層を作り、層の出来るに連れて之れを押しつける。殊に操作者の最も踏みつけ易い中央部が強く押しつけられる、其の結果出来たものに違いない。後に至つて直接の觀察をすると此の推理に間違ひのない事が分り且つ作品の検査だけでは到底豫想する事も出来ないやうな極めて興味ある幾多の材料が獲られた。

此の記述を續ける前に、此の昆虫がその巢窟を常に腸詰材料を掘り出すべき山の下に穿つが、これは實に素晴らしい靈感によるものである事を注意して置かう。一と抱えづゝ次第に搬び込み、次ぎから次ぎへと押しつけて行く、其の度数は實に莫大なものである。一層の厚さを四ミリメートル（可なり近い數である）として、約五十回の往復が必要と思はれる。若し毎回若干距離の地點に材料を求めねばならぬとしたら、センチコガネは勞力と時間とを要する事餘りにも多い其の仕事に堪えないであらう。彼の仕事の方法は大玉押コガネの遍歴を摸したやうな遍歴とは兩立しない。一段と思慮深い彼は山の下に居を構えるのである。彼はたゞ井戸を登つて行きさえすればよい、其處には、門前の足下に、我が腹詰の材料が轉がつて居る、其の腸詰をどれ程大きなものにしたたいと希はうとも決して材料に不足はないのである。

尤も、それが爲めには仕事場に充分の材料が積み込まれて居なければならぬのは云ふまでもない。幼虫の爲めに仕事をする場合にはセンチコガネは此の條件に注意し、材料供給者としては専ら馬と騾馬とを選び、決して之れを羊に求めない。羊は餘り吝嗇だからである。此の場合問題となるのは食料品の質ではなくて、其の量なのである。事實、私の虫小舎での實驗は若し羊がもつと寛大だつたならば羊の方が選ばれるに違いない事を證明して居る。羊が天然の状態に於ては與へない所のものを私が手出しをして收穫に收穫を重ねて與えてみたのである。こんな異常な寶の山は野良では決してみる事

のないもので、私の囚人等は其の下で實に熱心に働いて居る。其の熱心さは此の意外の儲け物を如何に彼等が珍重して居るかを證明して居るのである。彼等はどうしてよいか分らない程の腸詰を私に作つてくれる、私はこれ等の腸詰を新鮮な土と共に大きな植木鉢の中に敷き重ねる。冬になつてから幼虫の動作を観察する爲めである。私は又それ等をつづゝ試験管の中に、硝子管の中に入れる。それをブリキ箱の中に積み重ねる。私の書齋の板と云ふ板はそれで一杯になる。私の蒐集は一と揃ひの罐詰を想はせる。

材料が變つても別に構造は變らない。材料の質が緻密であり粘りが一層強い爲めに表面は一層規則正しく、内部は一層等質であるが、結局それだけの事である。

腸詰の下端は、やはり圓味を帯びて居るが、其處に孵化室がある。小さい椽シヤクの實を容れ得る程の圓い凹みである。胚種の呼吸の必要上、側壁は可なり薄く、空氣の浸透に便して居る。内部に縁が、つた半流動體の塗料の輝いて居るのが見えるが、これはダイコクコガネの卵形や大玉押コガネの梨の内部と同様粗糲な此の塊の單なる滲出物に過ぎない。

此の圓い籠の中に卵が安置されて居るが、周壁とは少しも粘着して居ない。卵は白色で、長楕圓形で、昆虫に比較すると著しく大きい。マグソセンチコガネにあつては長さ七八ミリメートル、最大幅四ミリメートルであり、クロセンチコガネの卵はそれより少しく小さい。

腸詰の奥深く、其の下端に設けられた此の小さな籠は、センチコガネの巢作りに就いて私の讀んだ所とは毫も一致して居ない。獨逸の古い著者フリツシウ (Frisch) に據つて (私は藏書に乏しいので同氏の著書を調べてみる事が出来ない) ミュルサン (Mulsant) はマダソセンチコガネを語りつゝ斯う云つて居る。「母虫は其の堅穴の底に、大抵の場合土をもつて一種の巢即ち卵殻を作る。此の卵殻は一方が開いて居るが、其の内壁上に麥粒程の大きさの白味がかつた卵を一個産みつける」

大抵の場合土で出来て居て、幼虫が上方にある食糧の柱まで登つて行く事の出来るやうに一方を開けてある此の殻とは一體何の事なのであらうか。私には分らない。殻などは、殊に土で出来た殻などは、ありはしない……開いた口、なんてものもありはしない。いくら見返えして見ても食料筒の下端に、四方を閉ざされた一箇の圓い小房が設けられて居るだけで、他には何も無い。右に描寫された構造に漠然と似たものすらもない。

二人の中のどちらがこんな架空的な構造の責任者なのか。獨逸の昆虫學者が皮相な觀察によつて此の過ちを犯したのであらうか。それとも里昂の昆虫學者が此の古い著者を誤り解したのであらうか。私には資料がないので過誤の根源に遡つて責任を明かにする事が出来ない。大家達が、觸鬚の一關節に就いてはあれ程までも細かい詮議立てをし、野蠻な一つの名稱をつけるに就いてもこせ／＼して先を争ふに拘らず、昆虫の生活の至高の表現たる習性及び仕事に關しては殆ど無關心なのを見るのは實に

嘆かほしい事ではないか。分類學者の昆虫學は多大の進歩を爲した。我等はそれに煩はされ、その洪水に押流されやうとして居る。もう一つの昆虫學、即ち、生物學者の昆虫學は、これこそ唯一の興味あるものであり、眞に我々の省察に値するものであるに拘らず、全然等閑に附せられて居て極くありふれた種類の昆虫ですらも其の歴史が書かれて居ず、たまさかに僅かばかりの記述があれば根本的の訂正を必要とする有様である。尤も之れは甲斐のない愚痴である。斯うした状態はまだ却々變りはしない。センチコガネの腸詰に立ち戻らう。其の形状はダイコクコガネ及び大玉押コガネが我々に教えた所とは相反して居る。ダイコクコガネや大玉押コガネは材料の量に於ては極めて節約しながら、勞力と時間とは少しも吝まらず丹念に彼等の作品を作り上げて、乾燥防止に最も適當した形とする。其の卵形をもつて、或は上部に頸をつけた球體をもつて、彼等は貯え少ない子等の食糧を新鮮に保存する術を知つて居るのである。センチコガネは此のやうな巧妙な方法を知らない。これよりも粗野な習性を有つた彼は何でもかでも有り餘る程あるのでなければ安樂と認める事が出来ない。穴に食料品が滿ち溢れて居さえすれば、其の形の不格好さなどはどうでもよいのである。

彼は乾燥防止に努める所ではなく、むしろ之れを求めて居るやうである。事實、此の腸詰を御覽になるがよい。長さは途方もなく長いが、たゞ粗雑に集められたばかりである。緻密な防水性の外皮もなく、全面積は法外に廣く、圓筒の全長に亘つて土と接觸して居る。これこそ正に急速な乾燥を促す

に必要な条件である。これこそ大玉押コガネその他によつて解決された最小面積の問題と正反對である。これでは食糧塊の形状に關する私の觀察はどうなるのか。私は此の觀察を我々の論理に據つて如何にも理由あるものと信じて居たのに、實は盲目的な幾何學が偶然合理的な結果に達したに過ぎないのに私が欺かれて居たと云ふのであらうか。

さうだと斷言する人があつたら、其の人に對して事實は斯う答える。玉造り虫は夏の暑さの眞盛り、地は乾燥の極にある時に巢作りする。筒造り虫は雨が雨に潤ふ秋に巢作りする。前者は子等の麵麩が餘りに固くなる危険に備えなければならぬ。後者は乾燥による餓饑の惨めさを知らない。彼等の食糧は冷え／＼とした土の中に詰め込まれて居るので、何時まででも適度な軟かさを保つて居る。彼等の食糧は形によつて保護されないけれども鞘の濕氣によつて保護される。季節の濕度は今や夏時のそれとは反對である。それだけでも酷暑の候の種々な用心は必要がなくなるのである。

もつと掘り下げてみよう、さうすると秋には球體よりも圓筒形の方がよい事が分る。十月、十一月となると雨は頻々と降りしかも執拗である。しかし一日陽が照ると、それで充分センチコガネの巢のあるあたりの浅い土は水が切れる。此の楽しい快晴の一日を無駄に過ごさない事が大事である。幼虫は如何に之れを利用するか。

彼の爲めに準備されるあの厩大な食糧塊を以てしては、随分大きな球體が出来る事であらうが、其

の中に彼が閉ぢ籠つて居るものと假定してみよう。一雨來て、すつかりと濕氣を含んだ以上、此の玉は何時まででも頑固に此の濕氣を保つて居るであらう。其の形は最少蒸發の形であるし、日の恵みに浴する土との接觸も最少だからである。二十四時間の後に土地の上層は通常の新鮮さに戻つても、此の球塊は、水氣の切れた土と充分に接觸して居ない爲め、依然として其の過度の水分を保つて居なければならぬ。さうすると籠が餘りに濕つぽくまた餘りに厚いので食糧は黴る。外部の熱も空氣も充分にやつて來ない、そして幼虫はあの晩秋の日射しの恵みを受くる事甚だ少く、彼を適度に成熟させ、嚴冬の試練に堪える力を彼に與ふべきあの遅まきの熱浴の恩恵に浴する事甚だ少ない事になるのである。

七月、過度の乾燥を防がなければならなかつた頃に長所であつたものが、十月、過度の濕度を避けねばならぬ頃には缺點となるのである。そこで球體に代へるに圓筒をもつてするのである。此の新しき形は其の過度の長さによつてあの丸藥製造虫の重要視した條件とは反對の條件を實現して居る。即ち、之れにあつては、同一量に於て、表面が極度に廣くなつて居る。此のやうな相反した形をとるには何か動機があるのか。きつとあるに違いない。そして私にはそれが漠然ながら分るやうな氣がする。

最早乾燥を恐れる必要のない今となつては、此の面積の形状によつて食糧塊は最も容易に其の過度の濕氣を失ふのではあるまいか。尤も雨降りの時には其の面積の廣きが故に潤ふ事も一層早いと云ふ危険はある。併しまた、天候恢復と共に其の過剰の水は、水切れの早い土との廣い接觸によつて迅

速に失はれるのである。

最後に此の腸詰がどう云ふ風に作られるかを調べてみよう。野良に於ける仕事を見ると云ふ事は實行不可能とは云はないが、甚だ面倒な企てだと私には思はれる。虫小舎に於ては、少しの忍耐と技巧とを以てすれば、成功は確實である。箱の後方にあつて人工土地を支えて居る板を外すと其の土地の垂直面が露出する。それをナイフの先で眞窟に出會ふまで少しづつさぐつて行く。若し此の操作を慎重に行ひ、いやしくも土を崩壊させて平和を攪亂するやうなへまな事をしないならば、労働者等の働いて居る所を不意に襲ふ事が出来る。尤も彼等は俄の光線侵入に立ちすくんでしまつて、まるで働いて居る最中をそのまま化石してしまつたやうに見えるが、仕事場と材料の配置、職工等の位置、姿態等によつて充分仕事の場を想像してみる事が出来る。此の場は俄に中止されたまゝで、我々の訪問の續いて居る限りは再び開始されない。

そして第一に注意しないでは居られない一つの事實が目につく。之れは極めて重要な事實であり、昆虫學上これが私の目についた最初の例である程それ程特異な事實である。私が發掘した一つ／＼の巢窟の中に私は常に二疋の協同者を見出したのである。之れは一と番ひであつて、雄が母虫に手を貸して居るのである。家庭の仕事は此の二疋の間に分擔されて居る。私のノートから次の場を抜き書きしてみると、不動の姿勢を取つた俳優等の姿態から此の場を活躍させてみる事は容易である。

雄は地下道の底にあつて辛く一寸程の長さの腸詰の一端上に蹲まつて居る。彼は材料が積み重ねられ一と押し毎に中央を一段と強く壓せられる爲めに出來た所の鉢形を占領して居る。家宅侵入を受ける前に彼は其處で何をして居たのであらうか。彼の姿勢はよく之れを語つて居る。彼は其の強い足、殊に後足で最後に積み重ねられた層を踏み固めて居たのである。彼の妻は上階の殆ど穴の口の邊りに居る。彼女の肢の間には材料の大きな一と抱えが見える。住宅の天邊にある山の麓から今集めて來た所なのである。私の家宅侵入に驚駭したもののそれでも抱えて居る物は投げ出さなかつた。此の足場も何もない天邊に引つ懸つて、井戸の四壁に肢を突張つて、止動病カタルシスにでも罹つたやうに固くなつてお荷物を抱きしめて居る。どう云ふ仕事か途中邪魔されたのか推測が出来る。積み重ねたり踏みつけたりするあの力仕事を續けて行くに必要な材料を自分よりも力強い夫ファイルモン (Phlémon) (註) に卸してやつて居たのである。卵を産みつけ、之れに母親のみが秘訣を知つて居るあの種々な細かい用意を施してしまふと、彼女は圓筒の建造作業を其の夫に譲り、自分は材料運びの端役に満足して居るのであつた。

註 希臘寓話中の二人物の名。諧老同穴の夫婦愛を象徴する。

これと類似の場を幾つも、仕事の進行中に不意に覗いてやると、全體の畫面を組み立ててみる事が出来る。腸詰は最初は短い幅廣い一個の袋であつて巢窟の底に密着して居る。此の一杯に口をあけ

た革袋の中に夫婦の虫が粉々にされた材料に囲まれて居る。多分、幼虫が食ひ初めに極上の食料品を口にする事が出来るやうにと、踏み固める前に材料を選り別けたのであらう。二疋して、此の夫婦は壁を粗塗りし、此の凹みが孵化室として必要の程度に其の直径を減するまで壁の厚さを増して行く。

いよ／＼産卵の時機である。雄は遠慮して片隅に引き退つて待つて居る、産卵の済んだ室を閉ざす爲めに材料の準備を整えて待つて居る。室を閉ざすには袋の縁を引き寄せ、一つの圓天井を、一つの蓋をセメントで密着させる、これはなか／＼にデリケートな仕事で力よりも寧ろ技巧を要する。母虫が獨りで之れに従事する。今度はフイレモンは單なる手傳ひ人夫に過ぎない。彼は漆喰を取つて出すだけで圓天井の上に乗る事を許されない、其の押し方が亂暴なので天井を踏み抜くといけないからである。

やがて屋根は充分に厚く塗られ、補強されて、もうどんなに壓しても平氣である。そこで力一杯の踏み固めが始まる。骨の折れる仕事なので雄が主役を引き受ける。マグソセンチョコガネにあつては兩性の體格と力との差は著しい。彼等にあつては、本當に稀らしい例外として、フイレモンの方が強い性に屬して居る。堂々たる風采、強い筋力は彼に與えられて居る。彼を捉えて掌中に握りしめてみるがよい。少しでも手の皮が敏感だつたら到底握つて居る事は出来ない。彼は其の荒い齒のついて居る足を痙攣的に硬直させて手の皮を引つ掻くのである。彼は何物も支え得ぬ楔のやうに指の股へ潜り込む。堪つたものではない。いやでも放してやらなければならない。

家庭にあつては彼は水力壓搾器の役をする。我々は鉢の玉を拵らえるのに、之れを壓搾器にかけて邪魔な容積を減らす。彼も同様に此の筋つばい腸詰材料を壓搾して小さくしてしまふ。最も屢々雄を見出すのは圓筒の頂上であつて、此の頂上は凹んで深い籃をなして居る。此の籃は母虫が卸してよこす荷物を容れる所で、センチョコガネは、大桶の底で葡萄の實を踏む葡萄作りのやうに、止動病的な彼の籠手で踏んだり、積み上げたり、混合したりする。其の操作が如何にも巧みに行はれるので、最初着いたばかりの時は、まるで粗雑な嵩張つた屑糸のやうであつた材料が緻密な層となり、前からあつた層と一體を爲すに至る。

しかし母虫も亦其の權利を抛棄しはしない。私が不意に訪づれてみると彼女は時折その鉢の中に居る。多分仕事の進行状態を調べに來て居るのであらう。彼女の觸感は育兒上の細かい點に一層鋭敏なので、修正を要する缺點を雄よりもよく探し出すのであらう。更に又彼女が、骨の折れる壓搾作業に疲れ切つた雄と交代しにやつて來たと云ふ事も大に有り得る事である。彼女も亦力強く、姿勢はしつかりして居て、よく彼女の勇敢な夫に代つて力業をする事が出来るのである。

しかし彼女が平常居る場所は地下道の上部である。見ると彼女は今集めたばかりの一と抱えの材料をいだいて居る事もあり、或は一と山の材料をいだいて居る事もある。これは幾抱えかの材料を下の仕事の準備にと集めた結果であつて、必要に応じて其處から材料を取り出し、少しづつ雄の壓搾器の

下に卸してやるのである。

此の假倉庫から底の鉢まで可なり長い空間が擴がつて居るが、其の下部は仕事の進行に就いての一つの参考資料を我々に提供して居る。其の壁は材料中最も粘性に富んだ部分から抽出した一種の塗料で粗塗りされて居る。此の細目にはそれ相當の價值がある。即ち之れによつて我々は、昆虫が幼虫の食糧たる腸詰を層一層と積み重ねて行く前に、先づ鑄型の粗雑で可透性を帯びて居る壁をセメントで塗り潰す事を知るのである。彼はその井戸をセメントで塗り固めて幼虫を雨期の水分滲出から豫防するのである。空が餘りに狭くて壓搾によつて其の壁面を適度に固める事が出来ないで、彼は廣大な仕事場で働いて居る者等の夢にも知らぬ一つの方法を採用する。即ち彼は周圍の土の壁面にセメントを粗塗りするのである。斯うすれば雨季に水びたしになる事を出来るだけ防ぐ事が出来るわけである。

此の防水被覆は圓筒の伸びるに連れて間歇的に作られる。母虫は、彼女の假倉庫に材料が充分積込まれて一寸暇の出来た場合に、此の仕事に没頭するものと思はれる。夫が踏み固めて居ると、其の間に彼女は一寸ばかり上の所で粗塗りをやつて居るのである。

夫婦共稼ぎでやつと圓筒は其の規定の長さに達する。其れから上は井戸の大部が空のままセメントで固められないで残されて居る。センチコガネが此の長い無用の空間を心に懸ける様子は少しもない。大玉押コガネ及びダイコクコガネは掘り出した除土の一部を地下室前庭に投げ出すが、彼等は家

の前に防柵を設けるのである。腸詰作りは斯うした用心を全然知らないらしい。私の見た巢窟は何れも上部が空である。除土をちやんと舊の場所に積み上げた形跡は少しもなく、たゞ材料を掘り出した山の崩れ或は壁の崩れがあるばかりである。

斯うした怠慢の動機は住宅上方にあるあの厚い屋根にあるのかも知れない。既に見た通り、センチコガネは通常馬、或は驃馬が彼等に譲つてくれる豊富な食糧の下に居を構えるのである。斯う云ふ掩蔽物がある以上門戸を閉ざす必要が果してあるであらうか。のみならず雨風が之れを閉鎖してくれる。屋根は落ち、土は崩れて、開けつばなしの井戸の口も幾何もなくひとりでに塞がつてしまふのである。

先刻私の筆端にフィレモンとポーススの名が浮んで來たが、事實センチコガネの夫婦は此の神話中の平和な夫婦をある點で想ひ出させるのである。一體昆虫の世界で、雄は何であるか。一度婚禮が済んでしまふと、それは一個の無能者であり、閑人であり、やくざ者であり、邪魔物なので、人に嫌はれ、時には残忍な方法で片付けられてしまふ。之れに就ては蟻螂が實に悲惨な例を我々に見せてくれる。

所が此處にまことに珍らしい例外として、怠け者が勤勉家となり、一時的の戀人が忠實な夫となり、子に對して無關心なものが眞面目な家庭の父となるのである。瞬間の遭遇が長期の結合に變るのである。二人の生活、家庭生活が成立するのである。まことに素晴らしい革新であつて、其の最初の試みは糞虫の所まで行かなければこれをみる事が出来ない。それより更に下るともうそのやうな事は少し

もない。またそれより上に昇つてみてもなか／＼そんな例はない。最も高い程度にまで登らなければそんな例は見られないのである。

我國の小川に住む小魚、棘魚エビフツツは水綿や水草で巧みにマーフ形の巢を作り、雌が其處へ来て産卵する。しかし彼は共稼ぎと云ふ事を知らない。子の世話は彼獨りの仕事で、母は殆ど之れを顧みない。しかし兎に角一步進み出たわけである、しかも此の一步は大きな一步であり殊に魚類にあつてはまことに著しい進歩と云はなければならぬ。蓋し、家庭愛に對しては此の上なく冷淡な彼等であり、養育の勞に代えるに怖るべき多産をもつてする彼等だからである。彼等は、お伽噺のやうなとんでもない數をもつて両親は勿論、單なる種袋に過ぎない母親の技巧の缺を補つて居るのである。

藁になると父親の義務を盡さうと試みるものが二三ある。それからは最う鳥になるまで何も無い。鳥は夫婦生活の熱烈な讃美者であつて、鳥に至つて夫婦生活は其の道徳美を完全に發揮する。一つの契約があつて夫婦は子等の繁榮の爲めに等しく熱心な二個の協力者となり、父も母と同様に巢の造營に、食物の搜索に、雛の餌食の分配に、初めて飛躍を試みる若鳥の監督に參與するのである。

動物の階段を哺乳動物まで登つて見ても、其の爲す所は此の驚嘆すべき模範の襲踏に過ぎずして、何物をも之れに付け加へないばかりか反對に屢々之れを單純化してさへ居る。最後は人類である。彼をして萬物の靈長たらしめる所の立派な資格の中には家族扶育の重任が含まれて居て、之れは決して解除される事はない。尤も中には此の大任を迴避し藁以下に身を墮して我々の顔に泥を塗る者もある。センチコガネは鳥に匹敵する。其の巢作りは夫婦の共同作業である。父は其の材料を集め、之れを積み、之れを踏み固める。母は粗壁を塗り、新材料を運んで来て壓搾工の足下に置く。彼等の家は夫婦の努力の結晶であると共に、また食糧庫でもある。彼等は其の日其の日に餌食を一つ／＼の雛の口に運んでやりはしない。しかし食糧問題は矢張りよく解決されて居る。二匹協力の結果豪華な腸詰が出来た。父と母とは立派に彼等の義務を果したのである。彼等は最も充實した食糧庫を幼虫に遺すのである。

夫婦關係が永く保たれ、一組の雌雄が力と技巧とを合せて子孫の幸福を計ると云ふ事は確かに偉大なる進歩であり、恐らく動物界に於ては最大の進歩であらう。何處を見ても孤立孤獨の中、たま／＼天才的糞虫によつて發明された夫婦生活なるものが現はれたのである。どう云ふわけで、此の素晴らしい獲得が或る少數者の特權たるに止まつて、一つの種類から他の種類へと同業組合内全部に廣く傳播しなかつたのであらうか。大玉押コガネやダイコクコガネは母虫だけが働く代りに、一個の協力者があつても時間と勞力との節約に於て何等得る所がないと云ふのであらうか。さうしたならば、萬事一層速かに行はれるだらうし、一層多くの家族を持つ事が出来るだらうのに。そしてこれは種の繁榮上看過し難い條件と思はれるのであるが。

又センチコガネの方ではどうして雌雄協力して巢を作り、食糧庫を補給する氣になつたものであらうか。一體に無頓着な昆虫の父性が、愛情に於て母性の競争者となつたと云ふ事は極めて重大な、極めて稀有な出来事であるので、是非其の原因を探究したいと云ふ氣が起る。しかし其のやうな願ひが我々の貧弱な調査手段をもつてして許されるものであらうかどうかは分らない。第一に一つの考えが起る。雄の身體の一段と大きい事と其の働き好きとの間に何等かの關係がありはしないだらうかと云ふ事である。母親よりも一段と身體も大きく力も強く生まれついた爲めに、何時もの怠惰者が一變して熱心な補助者となり、勞働を好むのも精力の過剰から來たのであらう。

氣をつけなければいけない。此の説は一應尤もしくは見えるけれども確なものではない。クロセンチコガネの雌雄は殆ど體格に於て異なる所がない。母虫の方が優れて居る事すら屢々ある。それでもない雄は其の妻の手助けをして居る。彼は彼の隣人たる巨大なマグソセンチコガネと同様に熱心な井戸掘りであり、力強い踏み手である。

もう一つ更に結論的な一理由がある。綿布の經糸を描え或は樹脂を捏ねる蜜蜂類、ハツミバチにあつては雄は雌よりも體格遙に強大であるに拘らずまるで仕事をしない。彼が、此の強大な、四肢の頑丈な彼が骨折仕事に手を出さなう、飛んでもない事である。根限り働くのは母の役目である。か弱い母の役目である。彼は、屈強な彼はラヴァンドやニガクサの花の上で遊び戯れて居ればよいのである。

そこでセンチコガネにあつて、家族の父が子等の幸福の爲めには骨身を惜まぬ勤勞家となつたのは、其の體格が優れて居るが爲めではないと云ふ事になる。調査の結果は之れで盡きる。これ以上調査を續けると云ふ事は無駄な努力であらう。性能の起源は我々之れを知る事が出来ない。何故これにこの天賦の才能有り、彼にこの他の才能が有るのか。誰に分らう。それどころか我々は何時かは之れを知り得ると自惚れる事さへ出來るだらうか。

たゞ一點明かな所がある、本能は構造によつて左右されないと云ふ事である。センチコガネは太古の時代から知られて居る。昆虫學者等は其の微に入り細を穿つ虫眼鏡をもつて、此の虫の最も小さな部分までも調べつくして居る。しかも誰一人として此の虫の夫婦生活と云ふ驚くべき特權に氣づいて居ない。單調な太平洋の水面上に突如小島の斷崖が屹立するが、これ等の小島は其處此處に孤立點にして、地理學者の調査測定を經ない限りは到底前もつて豫想する事の出來ないものである。それと同様に、生命の大洋上にも本能の峻峰が聳え立つのである。

センチコガネ——幼虫

産卵期の早いか遅いかによつて卵の孵化に要する日數も一週間から二週間の間を上下するが概して十月初旬には孵化する。發育は可なり速かで、間もなく幼虫は諸他の糞虫とは全く異つた一つの特徴を示して来る。これは全く新しい世界であつて、意外な事實に満ちて居る。幼虫は身體を二ツに折り曲げ、鈎形に内曲して居る。これは腸詰の内部が食ひ盡されるに連れて次第に掘られて行つた小房の狹隘なるが爲めに已むを得ず取つた體形である。

大玉押コガネ、ダイコクコガネその他の幼虫もそのやうに身を處して居た。しかしセンチコガネの幼虫にはこれ等諸他の幼虫を如何にも不恰好に見せて居たあの瘤がない。彼の脊は規則正しい曲線を描いて居る。セメント倉である此の背負袋の全然無い事は習性の著しく異つて居る事を語るものである。事實、此の幼虫は割目を塞ぐ技術を知らない。腸詰の彼の住家にあたる部分に一つの孔を開けてみても彼は此の孔が何であるかを調べたり、身を翻えして早速にセメントをたつぷりと載せた鍔で此の破損を修繕したりしない。空氣の侵入は彼には一向不愉快でないらしい。と云ふよりも寧ろ彼の防

備手段中には豫想されて居ないらしい。

事實、彼の住居を見るがよい。龜裂を塞ぐ漆喰職人の技術など何の必要があらう。彼の住宅は鏝割れる虞れがないではないか。此の腸詰は巢窟の圓筒内にびつたりと嵌まつて居て、其の鑄型で堅く押さえられて居るのでぼろ／＼と碎ける心配は決してないのである。大玉押コガネの梨は廣い地下室内にぼつんと置かれてあるので膨脹し、龜裂を生じ、鱗立つ。センチコガネの腸詰は一ツの鞘に固く納められて居るのでかうした變形を受ける虞れはない。それによしや裂目が生じたにした所で、そのやうな事故は少しも危険を伴はない。蓋し、今や時は秋であり冬であるからして、土は常に冷えて居て、あの玉轉がし虫があれ程恐れた乾燥は最早少しも按ずるに及ばないのである。そこで此のやうな殆どあり得ない、そしてまたあつたにしても殆ど無害な危険に對しては何等特別の技術が用意されて居ない。鍔を振ふ材料の提供に途方もなく順從な腸もない。塗喰倉たる不恰好な瘤もない。我々の最初に研究した無盡蔵の脱糞虫は姿を消してその代りに適度な働きをもつた幼虫が現はれたわけである。

大食なる事彼の如く、加ふるに外部との交通皆無なる一室に籠居する彼の事であれば我々が清潔と呼ぶ所のもは彼の全然知らぬ事である。さう云つたからとて彼が胸の悪くなる程汚なく汚物にまみれて居るものと思つてはいけない。それこそ大間違ひである。彼の滑澤な皮膚程綺麗で、光澤のあるものは他にはない。此等すべての糞喰虫が、どのやうな化粧上の注意によつて、どのやうな特典によ

つて斯くまでも清潔に身を保つのかと怪しまれる。彼等を其の常住の環境外で見ると何人とも雖も彼等の不潔極まる生活を想像する事は出来まい。

不潔さは別にある。尤もこれはよく考えてみると結局此の虫に利益を齎す所の一つの長所を缺點と呼んで差支えなければの話である。言葉と云ふものは我々の考えをしか反映しないもので、現実の表現となるともう通り迷ひ不忠實ものとなる。我々の観點に代えるに幼虫の観點をもつてし、人間を振り捨てて幼虫となつてみよう。さうすると忽ち聞き苦しい言葉は消えてなくなる。

此の幼虫は盛な食欲を有つた消費者でありながら外部との連絡がない。消化した滓をどうするであらうか。彼はそんなものに困る所ではなく、却つてそれを利用して居る。尤もこれは殻の中に閉ぢこめられて孤獨生活をする他の幼虫等のいくらでもやつて居る事である。彼はこれを利用して隠宅の隙間を塞ぎ、メルトン布で壁を張る。彼はこれを擱けて柔かい寢床を作る。デリケートな肌を取つてまことに貴重なものである。また之れを以つて滑かな龜を建てて水の滲み込まない寢間を作る。長い間の冬眠を守るためである。一寸自分が幼虫であると想像して見さえすれば言葉の意味が全然變つて來ると云つたのは其處である。汚いもの、邪魔なものが實は幼虫の安樂に極めて必要な貴重な材料となるのである。クロマルコガネやダイココガネ、大玉押コガネや玉押コガネに於て我々はさうした技術に見慣れて居る。

センチコガネの腸詰はほぼ垂直の位置にある。幼虫の孵化室は其の下端にある。彼は成長するに連れて上方へと食ひ進む。しかし周圍には著しく厚い壁を残して置く。これはこんな厩大な腸詰を與えられて居るからこそ出来る事なのである。大玉押コガネの幼虫は冬の用意がいらないので其の與えられる所の食糧はまことに貧弱である。此の小さな梨は吝な分量をしか含まないので全部平げられて僅に薄い壁しか残されない。尤も彼は彼の漆喰をたつぷりと塗つて之れを厚くし之れを補強する事を忘れない。

センチコガネの幼虫は之れとは大に異つた事情の下にある。彼には大玉押コガネの幼虫の食糧の約十二倍に相當する厩大な腸詰が用意されて居る。之れを全部食ひ盡すと云ふ事は如何に丈夫な胃と食欲とを以つてしても到底不可能である。そこでこれは食糧問題だけの爲めではないと云ふ事になる。更に冬營と云ふ重大問題があるのである。両親は冬の嚴しい寒さを見越して之れに備えるだけのものを子供等に遺したのである。途方もない此の腸詰は今や防寒用の袋たらんとするのである。

事實、幼虫は頭の上の方へと次第に食ひ進んでやつと通れるだけの狭い通路を穿つ。かうして中央部だけが消費されて周圍には極めて厚い壁が残されるのである。此の鞘が心をくり抜かれて行くに連れて壁は腸の排泄物を以つて次第にセメントを塗られ革張りをされる。餘分の産物は後方に集積して防壁を作る。好季節の續く限り幼虫は自分の掘つた地下道の中を歩き廻はる。それから上の方か下の

方に足を停めるが、食糧を襲ふ齒の勢は日に日に衰えて行く。斯うして五六週間の日子が饑寒に過てされる。それから寒さがやつて來、それと同時に冬眠がやつて來る。さうすると鞘の下端の、消化されて細かい捏粉となつた物の山の中に幼虫は一つの卵形の籠を穿ち、尻を振つて其の壁面を滑かにする。彼は其處に入つて寢床の彎曲した天蓋の蔭に身を隠す。これで冬眠の準備は出來た。彼は安心して眠る事が出来るのである。彼の両親は凍結の影響を受けるやうな浅い地下に彼の住居を定めたにしても少くとも彼等は食糧をありあまる程準備する事を知つて居た。そして此の莫大な過剰食糧から嚴寒の冬季に於ける最善の住居が出來て居るのである。

十二月には幼虫は殆ど完全に發育を遂げてしまふ。若し氣候さえよければ今頃は若虫の出來る時分である。しかし時正に嚴寒、用心深い幼虫は此のデリケートな變態を延期する方がよろしいと考える。彼は其の强健な體軀を以つてよく寒さに抗抵し得るけれども新生活に一步踏み出したばかりの未だ柔い若虫には到底其の眞似は出來まい。そこで彼は我慢をして身體をかじかまして待つて居る。私は彼を其の籠から引出して調べてみる。

幼虫は上面が中高、下面が殆ど平で、鈎形に折れた半圓筒形である。前に擧げた諸糞虫特有の瘤は全然なく、尾端の鋸もない。刺目を繕ふ漆喰職工の技術を知らぬが故に漆喰倉も漆喰を塗る道具も不要になつたのである。

皮膚は滑かで白く、後半部は薄黒い腸内容物によつて暗色を呈して居る。まばらな細毛が、或は可なり長く、或は極めて短く、體環節の中央脊部に逆立つて居る。之れは明かに幼虫が其の小房内を尻の運動だけで動き廻るに役立つものである。頭部は小さく、淡黄色を帯び、強大な大腮は末端が褐色を帯びて居る。

しかしこんな細かい點は甚だ興味少ないものであるからして措いて置かう。そして直ちに此の虫の特徴は肢にある事を云はう。最初の二對は可なり長い。殊に狹隘な住居に籠居する虫としては可なり長い。其の構造は普通であり其の力は幼虫をして食ひ開けた腸詰の内部を攀ぢるに足らしめるに違いない。第三對はまことに變つて居て他に其の例を見ない。

此の一對の肢は生れながらにして不具な、無能な、發育不完全な痕跡器官である、まるで血の氣の通はなくなつた手肢の切口のやうである。其の長さは僅に前者の三分の一に過ぎない。のみならず、普通の足のやうに下方には向かないで上方に縮み上り、脊の方を向き、ひねくれて、關節が硬直して何時までも此のをかした姿態を保つたまゝで居る。どう注意して見ても幼虫が少したりとも之れを使用する所を見る事が出來ない。しかも此の肢にも他の肢と同じ諸部分を認めるが、それが皆極めて退化して生氣なく、活氣がない。要するにセンチコガネの幼虫の特徴は四語に盡きてしかも他と混同する處はない。曰く後肢萎縮。

此の特徴は極めて顯著であり且つ稀有である。如何に目先の利かぬ者とても之れを見あやまる事は有り得ない程である。生まれながらにして不具であり、しかも斯くまで明瞭に不具である虫といふものはいやでも注意を惹かずには居ない。他の人々は之れをどう云つて居るか。何も云つて居ない。少くとも私の知る限りに於ては。私が手許にもつて居る僅かばかりの著書は此の點に就いては啞のやうに黙つて居る。尤もミュルサンはマグソセンテコガネの描寫をやつては居る。けれども彼は此の異常な構造に就いては何にも云つて居ない。細部の描寫に専念するの餘りに此の奇怪な構造に氣がつかなかつたと云ふのであらうか。上吻、觸鬚、觸角、關節數、毛、すべてが指摘され穿鑿されて居る。しかも退化してすりこぎのやうになつた此の無力の足は默過されて居る。砂粒が山を蔽ひ隠して居るのである。私は理解を斷念する。

更に注意すべき事は成虫の後肢が中の肢よりも一段と長く且つ強く、よく前肢とその力を競ふ事である。してみると幼虫の不具な足が成虫の強力な壓搾機械となるわけである。不隨なすりこぎが壓搾職工の強力な道具と變るのである。

糞掘虫の中にすでに三度も認めた所の此の異常が何處から來るかを誰が我々に説明してくれるであらう。大玉押コガネは若い頃はすべての肢が丈夫でありながら成虫になると前の指がなくなつてしまふ。クロマルコガネは若虫時代には胸部に角をもつて居るが、最後の裝身具としては少しも之れを利

用する事なしに此の背中肉刺を消え失せさせてしまふ。センチコガネは最初は跋行の幼虫であるが此の無益の不具をもつて彼の最善の挺たらしめる。これは進歩し、前二者は退歩する。何故不具者が強壯者となり、強壯者が不具者となるのか。

我々は恒星の化學的分析を行ひ、星雲の天體產出状態を覗ふ。しかも我々は何故一疋の卑賤な虫が足萎えて生まれ來るかを知る事は決して出來ないと云ふのだらうか。さあ、生命の神祕をさぐる潜水夫たち、深淵の中更に深く下り行つて、せめてはセンチコガネ及び大玉押コガネの間に對する答、此の小さな眞珠をなりとも我々に齎らして貰ひ度い。

容器の下端に自ら設けた寢室で、寒さ厳しい冬の來た時、幼虫はどうなるか。此の點に就いて一八九五年一月二月の異常な寒さが我々に種々な事を教えてくれた。私の虫小舎は常に大氣に開放されて居るので、零下約十度の低氣温に幾度か曝された。かうした西伯利亞のやうな寒さの折に私はあれ程防寒設備の悪い私の虫小舎がどのやうな状態にあるかを調べ確かめてみたいと思つた。

所がどうしても目的を果す事が出來なかつた。土層は前々からの雨に潤つて居た爲めに全部緻密な一塊と化し終り、已むを得なければ石でも斷ち割るやうに鶴齧か鑿でも用ゐてこれを細かくしなければならなかつた。しかしそんな亂暴な事をして掘り出す事は出來ない相談であつた。そんな事をしたならば鶴齧の激動の爲めにすべてを危険に陥れてしまつたに違いない。のみならずまだいくらかの生

命が此の氷塊の中に残つて居たにしても、餘りに急激な氣温の變化の爲めに之れに危害を及ぼすに遠くない。自然の解氷は極めて緩慢ながら之れを待つ方がよい。

三月の初め、再び虫小舎を訪れる、もう氷はない。土は柔かで樂に掘れる。センチコガネの成虫は十月に私が取り集めて安全な所に藏つて置いたのと同じ程豊富なもう一山の腸詰を遺して全部死んで居る。最初のものから最後のものに至るまで例外なしに死んで居る。寒さの爲めか、老衰の爲めか。

此の頃から四五月の交にかけて、新しい時代がまだほんの幼虫の状態にあるかそれでもなくとも精々若虫の状態にある頃に、私はセンチコガネの成虫が彼等の肥取作業に従事して居るのを屢々見掛ける。してみると此の老虫は二度目の春に會ふわけである。彼等も亦大玉押コガネ、ダイコクコガネ、其の他と同様に長壽を保つて彼等の子等を知り、子等と共に働くのである。この氣早の連中は老兵である。彼等は十分深く地中に潜入し得たが故に冬の嚴寒からまぬかれたのである。私のセンチコガネどもは數枚の板の間に囚はれて居て、十分深い井戸を掘り得なかつたが爲めに死んだのである。防寒には地下一メートルの深さが必要であつたのに、一尺足らずの土しかなかつたのである。それ故寒さが年よりも早く彼等を殺したのである。

此の低い氣温は、成虫に取つては致命的であつたに拘はらず、幼虫には無害であつた。私が十月に發掘した際、もとのまゝにして置いた幾つかの腸詰は幼虫を完全な状態に保つて居る。此の保護器は

完全に其の任務を果たした。それは兩親に取つて致命的だつた災害から子等を保護したのである。

十一月中に作られた其の他の圓筒形は更に注目すべき何物かを藏して居る。其の下端にある孵化室に一個づゝ卵を包藏して居るが、其の卵たるや丸々と肥つて、いかにも光澤よく、産みたてのやうに立派である。此の中には今もなほ生命があるのであらうか。冬の大部分を氷の塊の中で過ごした後でそのやうな事があり得るであらうか。どうもさうとは信じられない。それに腸詰は腸詰で見てくれがよくない。發酵の爲めに一段と褐色を呈し、微嗅く、どうも食べられさうもない。

どうなるか分らないがまあ見てやらうと思つて、先づ中に卵のある事を確かめた上で、私はこれ等の惨めなさまの腸詰を硝子瓶の中に入れた。此の慎重な注意はよかつた。これ等の胚種はあれ程厳しい冬の寒さを越しはしたものの其の水々しい外見は決して人を欺いては居なかつたのである。間もなく孵化が行はれた。そして五月の初めには遅生まれの幼虫が秋に孵化した彼等の兄達と殆ど同じ發育を遂げて居た。

此の觀察から二三の興味ある事實が明かにされる。

先づ第一に、センチコガネの産卵は九月に始まつてから随分晩くまで續いて十一月の月にまでも及ぶ。此の初霜の頃になると地の温みは孵化には不十分なので遅蒔きの卵は彼等の兄達と同じ速度で孵化する事が出來ず、一陽の來復を待つのである。四月に入つて温い日が二三日續きさえすれば今まで

休止して居た彼等の活力は俄然として眼醒めるのである。それからは普通の通りの發育が行はれるのであるが、其の速かな事は驚くべきもので、五六ヶ月の休止にも拘はらず、これ等遅ればせの幼虫は五月に入つて最初の若虫の現はれる頃には殆ど他ものと同じ體格になるのである。

第二に、センチコガネの卵は嚴寒の試験に平氣で堪える事が出来る。私が石工の鑿をもつて打砕かうと試みた時、あの氷塊の内部の溫度が恰度どの位であつたか私には全然分らない。外部に於ては寒暖計は時とすると零下約十度を示して居つた。しかも此の寒さは永い間續いたのであるからして、私の虫小舎の土層も同じ程度に冷却したものと信するに難くない。所で此の石のやうに堅くなつた氷塊の中にセンチコガネの腸詰は嵌め込まれて居たのである。

尤もこれ等の腸詰は纖維質を以て作られて居るのであるからして其の比較的不熱傳導性を有する事も大に考慮しなければならぬのは勿論である。糞壁は或る程度まで幼虫と卵とを、直接之れに觸れたならば忽ち凍死したに違いない程の寒さから保護したのである。しかしそれにしても此のやうな環境にあつては、最初濕つて居た糞筒は、しまいには石のやうに堅くなつてしまふに違いない。彼等の孵化室に於て、また幼虫の作つた地下道に於て、氣温が氷點以下に降つた事は疑ひない所である。

其の場合幼虫と卵とはどうなつたのであらう。彼等は實際に凍つたのであらうか。どうもさうらしく思はれる。此の繊弱な物の中でも繊弱な一つの胚種、一個の蛋白球の中に藏された一つの生命の口

火が硬化し、砂粒と化し、それから再び其の活力を恢復し、解氷後その發育を續けると云ふ事は到底考えられない事である。しかもすべての状況は之れを斷言して居る。センチコガネの腸詰をもつて此れ程激しく且つ長期の冷却に對する十分の保護被覆と看做さうと思へば、彼等が如何なる物質も有つて居ないやうな不透熱性を有するものと假定しなければならぬ。此の場合溫度測程に關する調査資料の缺けて居る事は如何にも残念な事であるが要するに、完全な氷結になほ疑ひの餘地ありとするも次の一事だけは確實である。即ち、センチコガネの幼虫と卵とは彼等の保護囊中にあつて何等の危険なく極めて低い氣温に堪える事が出来る。

恰度よい機會であるからして昆虫の耐寒力に就いて更に一言を付け加える。數年前、ツチバチの繭を葉土の一山中にあさつて、私は金色ハナムグリの幼虫を澤山採集した。私はこれ等の幼虫を一つの植木鉢に入れ、その上から幾握りかの植物性腐土をやつと虫の脊筋を蔽ふ程度に入れた。私は當時自分の行つて居た或る研究の材料を此處から得る筈であつた。所が此の鉢を庭の一隅の大氣の中に置き忘れてしまつたのである。その中にひどい寒さと、ひどい氷と、雪とがやつて來た。私は此の様な氣候に防寒設備もろくにしてない私のハナムグリの事を思ひ出した。行つてみると鉢の内容は土と、腐つた葉と、氷と、雪と、しなびた幼虫とが一緒になつて堅くなつて居た。まるで一種のヌガーで幼虫はさしあたりアメンドの核と云ふ所だつた。かうまでひどく寒さにやられたのでは定めし死んで

しまつたらう。所が、さうではない。氷が解けると此の氷虫は甦つて何も變つた事がなかつたかのやうに蠢めき始めた。

成虫の耐寒力は幼虫のそれに及ばない。體組織は精巧になるにつれて強健さを失ふのである。私の虫小舎は一八九五年の冬ひどい寒さに見舞はれて其の顯著な一例を興えて居る。私は自分の研究の目的から此處に極めて種々な糞虫を集めて居たのである。其の中で、大玉押コガネ、ダイコクコガネ、玉押コガネ、クロマルコガネ等の若干種は新虫と老虫とによつて同時に代表されて居た。

センチコガネは最後の一疋に至るまで全部石塊と化した土層の中で斃れた。ミノートルも亦全滅した。しかも此の兩種はどれも北部地方にまで進出して寒氣を恐れぬものである。之れに反して南部種たる聖大玉押コガネ、西班牙ダイコクコガネ、エクボ玉押コガネ等は老いたるも若きも、豫想外によく寒氣に堪えた、尤も其の多數は死んだ、それが大部分を占めては居た。しかしそれにしても若干の生存者があり、それ等が凍結から甦つて太陽の最初の愛撫にちよくと走り出したのを見ては私は驚嘆したのである。四月になるとこれ等凍死を免れた連中は再び仕事を始める、そこで分つた事は、自由の天地にある時はダイコクコガネ及び大玉押コガネは深い地下で冬營する必要がないと云ふ事である。風當りの少ない何處かの一隅に僅かばかりの土を被つて居ればそれで十分なのである。地を掘る技術に於てセンチコガネに及ばない彼等は、一時的の寒さに對する抵抗力を一段と餘計に備えて居

るのである。

話が脇道にそれたが、最後にもう一つ注意すべき一事を付け加えて置かう。それは多くの人の既に云つて居る事だが、農業が其の怖るべき敵たる昆虫を驅除する上に於て寒氣に頼る事の出来ないこと云ふ事である。非常に強い長期の凍結が地下甚だ深く及ぶ時には、十分深く地下に潜入する事をしらぬさまざま種類を死滅させる事はあり得るが、しかし多くのものは生き残るのである。のみならず、幼虫及び卵に卵は多くの場合我國の如何なる嚴冬をも物ともしないのである。

四月になつて快く晴れはじめると、圓筒下層の假宅に引つ込んで居た兩種のセンチコガネの幼虫は無氣力な状態から脱出する。活氣が甦りそれと同時に残つて居た食慾が戻つて来る。秋の饑饉の殘肴は豊富である。幼虫は之れを利用する。尤も今度は前のやうに大食はしない。冬の眠りと、それよりも一層深い變態の眠りと、二つの眠りの間の夜食に過ぎない。そこで容器の壁の食ひ方も一樣ではない。割目がぼつかりと口を開く、壁面が崩れ落ちる。そして間もなくさしもの大建築ももう何か分らないたゞの廢墟となつてしまふ。

しかし最初の腸詰の下部だけは指何本かを横に並べた程の長さだけ壁も完全に残つて居る。此處には最終の仕事の準備として幼虫の排泄物が厚い層をなして蓄積されて居るのである。此の塊りの中央に一ツの龜が穿たれ、其の内部は丹念に磨かれて居る。掘り出した材料で上方に一ツの蓋が出来て居

るが、此の蓋は冬の寢室を蔽うて居つたやうな單なる天蓋ではなくして一個の頑丈な蓋で、外部の節だらけな所など、外觀から云ふと、腐土の殻をもつて身を蔽ふハナムグリの仕事に可なり似て居る。此の蓋は腸詰の残りと共に一個の住宅を形づくるのであるが、可なり黄金虫 (Hanneton) の住宅を想はせるものである。尤もそれにしては上部が缺けて居るし、また其處には大抵の場合填れた圓筒の缺けが突つ立つたりして居る。

其處に幼虫が腹の滓をすつかり空にして凝つと變態を待つて閉ぢ籠もつて居るのである。數日ならずして腹部の最後の環節の背面に一つの水泡が現はれる。それが膨れて、擴がつて、次第に前胸部の方へ登つて行く。脱皮作用が始まつたのである。此の水泡は無色の液で張り切つて居てかすかに一種の乳狀の雲形が見える。これは新しい體組織の下圖である。

一ツの龜裂が前胸部の前方に起こる。皮は靜かに後方に踏みぬがれる。そして遂に姿を現はして來る若虫は眞白で、半ば不透明で、半ば水晶様の透明である。五月の初め頃に私は最初の若虫を獲たのだつた。

それから四五週間の後に成虫が出来る。翅鞘及腹部は白いけれども、身體の他の部分は既に普通の色彩を帯びて居る。色彩變化は速かに完成される。そして六月もまだ終らぬに既にセンチコガネは十分の發育を遂げて、夕のほの間に地中から湧き出で、いち早く肥料運搬の仕事を始めに飛び出して行

くのである。卵の状態を冬を過ごした遅生まれのものは彼等の早生まれのものが脱皮する頃には未だ眞白な若虫の状態にあり、九月近くになつてはじめて殻を破つて生まれ出て彼等も亦野良の衛生に協力しに行くのである。

蟬と蟻との寓話

評判と云ふものは何と云つても語り傳へから生まれて行く。作り話が歴史を蹂躪する事は動物の世界も人間の世界も變りがない。とりわけ昆虫は、何かの意味で人の注意をひくと、いろ／＼民間巷説の種子となつて居る。しかもこれ等の物語が凡そ等閑に附する所の事は眞を傳へると云ふ事である。それで、例へば、あの蟬と云ふものを名だけでも知らないものがあらうか。昆虫の世界で彼の名聲に比すべき名聲を何處に見出す事が出来ようか。身の行末を想ひ見ぬ熱情の歌姫と云ふ彼女の名聲は我々の最初の暗記課題であつた。覚えやすい短い詩句に歌はれて居る彼女は、朔風の吹き來るに及んで囊中に一物もなく、隣家の女房蟻の所へ泣き込んで餓を訴へる。しかし此の借り手はつれないあしらひを受け、急所を指した返辭を頂戴する。その返辭が此の虫の評判の主な原因となつて居る。

唱つて居たつて、まあ結構だわね

それちやあ今度は踊んなさいよ。

と云ふ此の短い二行は其の陋劣な惡意をもつて、此の虫の素張らしい技倆よりも更に多く彼の評判を

高からしめるに役立つて居る。それは楔のやうに子供心に打ち込まれてもう決して抜けないのである。蟬は橄欖の花咲く地方に局限されて居るので多くの人は其の歌を知らない。しかも我々は老幼を問はず皆蟻の許での彼の失敗を知つて居る。一體此の評判は何によるのか。たゞ一つの物語、それとても價値から云つて甚だ議論の餘地があり、道徳をも博物學をも等しく侮辱して居る一つの物語、短いのを唯一の取柄とする一つのお伽噺、それが拇指太郎の長靴や赤頭巾のお菓子と同様に厚かましくも物皆を亡ぼして行く星霜を凌いで永く残らうとする此の名聲の據り所なのである。



子供と云ふものは此の上ない保守主義者である。慣例や、傳統は一度彼の記憶の記録に託されたが最後までうどうしても之れを破毀する事は出來ない。蟬の名聲は、最初の暗誦練習として彼の不幸を廻らぬ舌に暗誦した子供等のお蔭で我々に傳はつて居るのである。此の寓話の筋を爲す

ひどいでたらめは子供によつて永久に保存されるであらう。冬にはもはや蟬は居ないに拘はらず、寒さが來れば何時までも俄に惱むであらう。麥粒は彼女の繊細な吸嘴と兩立し得ない食物であるに拘はらず、彼女は常に幾粒かの麥を乞ひ求めるであらう。彼女は決して物を食べぬに拘はらず、叩頭百拜、蠅や裸虫の喜捨を願ひするであらう。

こんな奇妙な過りの責任は誰に歸するの。ラフォンテーヌの寓話は大抵の場合いみじくも細かい

觀察によつて我々を魅了するのだが、此のやうなものを書く氣になつたのはまことに失策であつた。狐、狼、猫、牡山羊、鳥、鼠、鼯、其の他多くの主要人物は彼の徹底的に知る所で、彼は其の動作身振り細部に至るまで明快正確に語つて居る。これ等は彼の國の登場人物であり、隣人であり、食卓を共にする者どもである。彼等の生活は公私ともに彼の目前で行はれて居る。しかし蟬はジァノ鬼のはね廻はる土地では見られない。ラ・フォンテーヌは一度もこれを聞いた事もなく、見た事もない。彼の云ふあの有名な歌姫とはきつときりぎりすであつたに違ひない。

グランヴィルは挿繪を描いて、其の筆の冴えに本文と辛辣さを競ふものであるが、同じ過ちを犯して居る。彼の素描をみるに、蟬は甲斐々々しい家婦の扮装で、門口の大きな麥の幾袋の側に立ち、足をと失禮、手を差出して居る借り手の女に蔑みの背を向けて居る。大きな帽子を跳ね上げて、ギターを小脇に抱え込み、裾は激しい北風にびつたりと颯へまつわりついた哀れな姿、これが第二の人物であるが、まがふ方なき「きりぎりす」の面影である。ラ・フォンテーヌと同様、グランヴィルも亦本物の蟬などは思つてもみなかつたのである。彼は一般の人々の誤謬を立派に描き現はしたのである。

のみならず此の貧弱な小話はラ・フォンテーヌがある他の寓話作者に摸してつくつたものに過ぎない。蟬が蟻からあれ程ひどい待遇を受けた傳説は利己心と共に古いものである。つまり世界と共に古いのである。雅典の兒童等は、無花果と橄欖とを一杯に詰め込んだスパルト織の提籃を携けて學校へ

行く途すがら、既に暗誦課題としてこれを口誦んで居たのである。彼等は云つて居た。「冬、蟬が濡れた食物を日に乾かして居た。所へ不意に腹の減つた蟬がべこ／＼しながらやつて来て、お米を少し下さいと云つた。吝な蓄め込み家が答へるには「お前は夏中唱つて居た、冬は踊つたらいいだらう。」此の方が少し拙いけれども、ラ・フォンテーヌの主題と全く同じで、正しい考えとは全然相反して居る。それにしても此の寓話はやはりこの上ない橄欖と蟬との國、希臘から我々に傳はつたものである。たと語り傳へる如くエゾツプが確かにその作者なのであらうか。それは疑はしい。だが考へてみればそれはどうでもよい事である、話し手は希臘人であり、蟬の同國人であるからして、彼は蟬を充分によく知つて居るに違ひない。私の村ではどんな無智な百姓でも冬、蟬の全く居ない事を知らないものはない。土いちりをする者だつたらば誰でも、寒さが近づいて橄欖の根に培はねばならぬ時、あれほど度々鋤の先で掘り出すのだからして此の虫の最初の状態、幼虫を知つて居るのである。小徑のほとり度々鋤の先で掘り出して居るので、夏、此の幼虫が自分で圓い井戸を掘つて、どう云ふ風に地を出るかを知つて居るのである。此の幼虫がどんな風に何處かの小枝にしがみ付き、自分の脊を割り、ひからびた羊皮紙よりもなほ堅い其の拔殻を脱ぎ捨て、若草色の蟬となり、たちまちにして褐色に變るかを知つて居るのである。

雅典の百姓だつて馬鹿者ではなかつた。どれ程迂濶な者の目にも止まらないでは居ない所の事に

は彼等も気がついて居たのである。私の粗野な隣人たちの知つて居る事は彼等も知つて居たのである。此の寓話の作者たる學者は、誰であつたにせよ、これ等の事に精通するには最善の事情の下にあつたのである。それならば彼の物語の誤謬は何處から來るのか。

ラ・フォンテーヌよりも更に申し譯のない事には、此の希臘の寓話作者は、彼の身邊にシンバルを鳴り響かせて居る本物の蟬に問ふ事をしないで、書物の中の蟬を物語つて居たのである。現實には無頓着でたゞ傳説に従つたのである。彼も亦更に昔の語り手の眞似をしたのである。彼は凡ゆる文明の尊ぶべき母たる印度から傳はつた何かの傳説を繰り返へして居たのである。印度人の筆が文字に託して先見の明なき生活が如何なる危険を招來するかを示さんと試みた其の主題の何であるかがはつきりとは分らなくとも、こゝに物語られた動物界の小景が蟬と蟻との問答よりもつと眞に近かつた事は信するに難くない。大に禽獸を愛したかの印度が此のやうな間違ひをすると云ふ事は有り得ない。どの點から見ても次のやうに思はれる。最初の寓話の立役は我々の蟬ではなくて、たしかに何か他の動物であつた、何か他の昆虫であつたと云つてもよい。そしてその習性は寓話の本文とよく一致して居たに違ひない。

長い幾世紀の間、インドウスの河畔で賢人等を反省させ子供等を楽しませた後に希臘に移された此の寓話は、恐らくある家庭の父が初めて與へた儉約の教訓と同様に古いものであらうが、口から口へ

と或は正しく或は誤つて語り傳へられて行く中に、あらゆる傳説がさうであるやうに、時代と土地との狀況に應じて細かい部分を改變されたに違ひない。

希臘人は其の國土内に印度人の語つた所の昆虫をもたぬので、蟬が大體似て居る所から之れを採用し、近代の雅典たる巴里も亦之れと同様にキリギリスをもつて蟬に代用したのである。過ちは既に犯されて居たのである。此の誤謬は今日既に子供等の記憶に託された以上また拭ひ去るべき術もなく、火を賭るよりも明かな事實を尻目にかけて永く榮える事であらう。

寓話の爲めに無實の罪を着せられた此の歌姫の名譽恢復を試みてみよう。此の歌姫が迷惑至極な隣人である事は私とても之れを認めるに躊躇しない。毎年夏になると私の門口の二本の大きい鈴懸の緑葉に誘はれて幾百となくやつて來る。そして其處で日の出から日の入りまで其の囁れた奏鳴樂で私の腦を槌打つのである。此の耳も聾せんばかりの合奏では考え事は到底出來ない。考えは、眩暈がして、ぐる／＼廻りして、凝つと一つ所に止まる事が出來ない。若し早朝の幾時間かを利用しないならばその日一日は駄目になつてしまふ。

いや、まことに狂氣虫であり、靜なれと希ふ私の宿の大傷ではある。聞けば雅典人はお前の歌をゆつくりと楽しむ爲めにお前を籠に飼つて居たといふのに。食後うつとりとして居る頃の一疋位はまだよい。けれどもようやく考がまともらうとする時に幾百となく一時に啼き立てて耳を聾するに至つて

は正に拷問沙汰である。お前は其の言ひ譯としてお前の先占權を持ち出して来る。私の来る前は、此の二本の鈴懸は完全にお前に屬して居た。それで私の方が其の樹蔭に侵入したのだと云ふ。如何にもさうかも知れない。だがせめてはお前のシンバルに弱音を掛け、お前の音階練習をもう少し控え目にしてお前の身の上を語る此の私を助けてくれ。

事實はかの寓話作者が我々に語る所の事を馬鹿げた作り事として却ける。時として蟬と蟻との間に何等かの関係があると云ふ事は、此の上なく確かな事である。但だ此の関係は寓話作者の云ふ所と正に反對なのである。此の関係は蟬の方から進んで取結ぶのではない。彼は生きる上に於て決して他の援助を必要としないのである。之れを求めるものは強慾な搾取者で、食へるものならばどんな物をでも獨占して之れを自分の穀倉にさらひ込む蟻の方なのである。如何なる場合にも蟬が蟻の巢の入口に出かけて行つて餓を訴へ、利子と元金とを耳を揃へて返へす事を神かけて誓ふと云ふやうな事はない。それとは全く反對に蟻の方が饑餓に驅られて此の歌姫に哀願するのである。いや、哀願どころではない。借りたり返したりと云ふ事は此の掠奪者の習性にはない事である。彼女は蟬を搾取し、厚顔しくも之れを追ひ糾ぐのである。此の掠奪と云ふ事はまだ人の知らない奇怪な話だから、一つ説明してみよう。

七月の晝下り、息もつまりさうな時刻、昆虫界の賤民共が渴きを醫する術もなく色は褪せ水氣も枯

れた花から花と求め歩く時、蟬だけは此の一般の饑渴をあざ笑つて居る。細かい螺錐のやうな彼の口吻をもつて彼は、その汲めども盡きぬ酒倉の一と樽に孔をあけるのである。相も變らず唱ひつゝ、とある木の小枝にとまつて、日に熟れた樹液を孕む堅く滑らかな樹皮に孔を穿つのである。吸嘴をその樽孔から突つ込んで、身動きもせず、シロップと歌との甘美さに身心ともに陶然として、夢見心地に飲んで居るのである。

しばらくの間觀て居てみよう。多分意外なひどい目に會ふ所が見られるから。事實、其の附近には水に渴した多數の虫どもが徘徊して居る。それが井戸端ににじみ出して居る水氣によつて井戸の存在を發見する。そして驅けつけて来る。尤も最初の中は幾分遠慮して、濡れ水を舐めて我慢して居る。

蜂、蠅、ハサミムシ、アナバチ、ベツカウバチ、ハナムグリ、とりわけ蟻が此の蜜の湧き出る孔の周圍にひし／＼とつめかける。

極く小さい連中は泉に近づかんが爲めに蟬の腹の下を潜り抜ける。すると蟬は如何にも人の好さげに足を突つ張り身體を持ち上げてこれ等の厄介者を通してやる。一番大きい連中は待ち兼ねて足踏みして居るが、大急ぎで一口飲んで引下り、附近の小枝を一廻りして、それから更に大膽になつてまたやつて来る。渴望の念は増進し、先刻の遠慮者は騒がしい攻撃者となり、泉を湧き出させた井戸掘りを此の泉から追拂はうとする。

此の強盜行爲で一番執念深いのは蟻である。中には蟬の足先を噛む奴があつた。彼の翼端を引張り彼の脊に攀ち登り、彼の觸角を擽る奴もあつた。一番大膽な奴は私の目の前で彼の吸嘴をつかんで之れを引抜かうとするやうな大それた事までした。

かう此の一寸法師どもにいちめられては流石の巨人も遂に堪え切れなくなつて、井戸を見捨てる。彼は逃げしなに此の追刺どもにさつと小便をひり掛ける。しかし蟻に取つては此の至上の侮蔑も何でもない。彼女の目的は達せられたのである。これで彼女は泉の女王となつたのである。尤も此の泉は之れを湧き出させて居た仰筒が働かなくなると餘りにも速く涸れてしまひ、餘りにもあつけない、けれどもとても美味しい。それだけでも得としてまた同じ手段で、新しい一と口にありつける機會の起こるのを待つとしよう。

かう云ふわけで、事實はあの寓話が想像した所の役割を全然入れ替えて居る。強奪をも辭せぬ無作法な物乞ひは蟻なのである。憫む者には喜んで分ち與へる勤勉な職人は蟬なのである。もう一つの細かい點を擧げてみると、兩者の役割の逆である事が一層はつきりする。五六週間に亘る永い歡樂生活の後、此の歌姫はその生活に勞れ果てて樹の上から落ちる。陽は其の死骸を干からびさせ、行人の足は之れを蹂躪する。相變らず獲物をあさつて居る追刺の蟻がこれに遭遇する。早速此の素張らしい死骸を切り、刻み、粉々にして、貯え込んだ食糧の山を更に肥らせようとする。斷末魔の苦しみに今な

は埃の中で羽根をふるはせて居る蟬が、一隊の屠殺者の爲めに引つ張られ、八裂きにされるのを見る事は稀らしくない。蟬は其の連中で眞黒になつて居る。かうした殘忍非道な行爲のある以上、此の二種の昆虫の本當の關係は明かに證據立てられて居るのである。

拉丁、希臘の古代に於ては蟬は非常に尊ばれて居つた。希臘のペランジェー(Brangen)たるアナクレオン(Anacreon)はこれに一詩を捧げて居るが、其の讃辭は餘りにも誇張されて居る。「汝は殆ど神に似たり」と云ふのである。尤も此の頌榮の理由として彼の擧げて居る所のはあまり立派なものではない。其の理由とする所は次の三特權である。「土より生まれ、苦痛を感せず、肉に血なし」と。これ等の誤謬の故に此の詩人を責むるには及ばない。蓋し、之れは當時一般の信じて疑はなかつた所であるばかりでなく、其の後も永く傳へられて、遂に鋭犀な觀察眼の開かるゝ時にまで及んだのだからである。のみならず、拍子と諧調の妙とに重きを置くこれ等の小詩句にあつては其のやうな細かい事は云はないのである。

今日に於てすらも、プロヴァンス地方の詩人等は、蟬と親しみある事アナクレオンに劣らないに拘はらず、彼等が記章として選んだ所の此の虫を稱へるに方つては殆ど事實に無頓着である。尤も私の友の一人は熱心な觀察家であり、細心な寫實主義者であるので此の非難は當らない。彼は彼の手帳から次のプロヴァンス語の詩を抜き書きする事を私に許してくれた。此處には蟬と蟻との關係が科學的嚴

正さを以て明かにされて居る。たゞ其の詩的形容と道徳的考察とは、博物學者としての私の如にとつてデリケートな異國の花、その責任は彼に任せる事とする。けれども彼の物語の眞實さに至つては、私が毎年の夏、庭のリラの木で見かける所と一致して居るので、私はそれを保證する。彼の作品に添ふるに翻譯をもつてするが、此の翻譯は多くの場合大體譯である。佛蘭西語には必しも常にプロヴァンス語に相當する語があるわけではないからである。

蟬 と 蟻

有難い日だ、此の暑さ！ 蟬には勿怪の上天氣、宇頂天なる喜びに、火の雨浴びてしん／＼と。みのりに恵む上天氣。黄金の波にかこまれて、刈り入れ人は腰かゞめ、胸吹きさらし、働く働く。歌もとかくにとだえ勝ち、咽喉が渴いて聲が出ぬ。

お前の爲めに恵まれた此の上天氣、さあ蟬坊主、大膽に、打つたりお前の小さなシンバル、腹の「鏡」も破れよと、打ちふれ打ちふれ。だがしかし刈り入れ人は鎌を振る、鎌は揺れゆれ、色に出た穂末をわたる稲光。

砥石の水は水入れに、草で栓して腰に懸け、砥石は木箱で水を浴び、暑さしらすの好い身分。所が

人はかつと照る、暑い日さしに息はづませ、時には骨の髓が煮え立つ。

蟬よ、お前は渴けば飲める、柔かく水氣を帯びた木の皮に、嘴の針を突きさして、お前は一つの井戸を掘る。其の細道をのぼり来る砂糖のやうな甘い汁、蜜の流れる井戸ばたに、お前は口をつけて飲む。醍醐の味がにじみ出る甘露に咽喉をうるほして。

だが何時までものほほんとしては居られぬ、それどころか、盗人たちが——近所の奴等も浮浪人共も——お前が井戸を掘るのを見たのだ。奴等は咽喉をひりつかせ、哀れつぼくも持ちかけて、お前の水を一掬奴等の椀に取つて行く。だが氣をつける、あの文無し共は、初めのうちこそ腰がひくい、直きに圖太いころつきだ。

奴等はほんの一口をお願ひ申すが、それからは、最早お前の残りでは、満足しない。ふて／＼しくも頭を擧げて、あるだけよこせとおどしにかゝる。そしてあるだけ取るのだが、熊手のやうな手でもつて、お前の羽根の端を攪り、お前の廣い脊中には、上り下りの賑やかさ、お前の嘴取り、角を取り、足の指をば捉へて引つ張る。

こつちを引つ張りあつちを引つ張り、お前も遂には我慢が出来ない。びつびつと小便一とひり、一同にお見舞申して、さつさと枝を引き揚げる。此の下司共からすつと遠くへ行つてしまふが、所で奴等はお前の井戸をば盗んで置いて、笑ひ楽しみ、蜜でねばつた唇を砥めて喜ぶ。

所がかうして骨も折らずに、飲んで喜ぶごろつきどもの、中でも一番執念深いのは、あの蟻だ。蠅、黄蜂、腰細蜂に角コガネ、ありとあらゆるベテン師ども、ひどい暑さにお前の井戸につい誘はれた怠け者等も、お前に追つ立て食はせる蟻の、あの執拗さは有ち合はせない。

お前の足の指を押しやり、お前の顔を探り廻はし、お前の鼻をつまんで引つ張り、お前の腹の下まで駆け込む、圖々しさには誰でもかなわぬ。此のあばずれは梯子代りに、お前の足を登つて行つて、圖々しくも羽根に乗り、無禮にも、其處で散歩としゃれ込んで、上へ行つたり下へ行つたり。

二

所で此處に、怪しからぬのは、古人の話、何でも嘗て其の昔、冬の日の事、餓にせめられ、うなだれ勝ちに、人目さけつゝ出かけて行つて、地下の大きな米倉に、お前が蟻を訪ねたさうな。

此の成り上りのかみさんは、夜露にぬれて黴の出た、持ち麥を害にしまふとて、先づ日に乾して居る所。やがて乾いた其の麥を袋に詰めてゐたつけが、其處へお前が目に涙、浮べて不意にやつて來た。

お前の云ふやう、「お寒う御座んす。北風にあらちらと追ひ立てられ、お腹がすいて死にさうです。見れば豊なお米倉、此の背負袋に一杯だけ、恵んでやつて下さいませ、メロンの出來る好い頃にきつとお返へし致します。」

「麥を少々お貸し下され」だがおやめ、相手が耳を貸す事と、思つたならば大間違ひ。大きな袋がい

くつあらうと、お前は何も貰へはしない。「さつさと失せ居れ、何處へでも行つて、樽の底でも叩くがいゝわい、冬は餓え死ぬ、夏の間は、唱つて暮した吞氣者！」

これが古の作り話。其の教訓の手本は何か、財布の紐を、しめて喜ぶ我利々々亡者……何と腹痛、此の馬鹿共の、五臟六腑を咬んでやれ！

腹の立つのは其の作者、お前が多に、蠅や小虫や麥粒を、貰ひ歩くと吐かし居る。何も食べぬお前がよ。麥とは何だ！ お前にそれが何になる。笑談ぢやない！ お前には蜜の流れる泉がある。そのほかにお前に何が要るものか。

冬がお前にどうだと云ふのだ、お前の子等は、地下に避寒の假り眠り、そしてお前は永久に醒めぬ眠りについて居る。お前の遺骸はぼろくだ。あさり歩きの蟻どもが、一日それに目をつける。

干からびたお前の皮を、腹黒女はむさぼり食ふ。胸を裂き、身を切り刻み、倉に持込み鹽に漬け込む。雪降る冬の御馳走だ。

三

これが本當の物語、寓話とはまあ何たる違ひだ。どうだ、べらぼう、どう思ふ。鑊錢拾ひ、指曲り、駄腹肥りの手合ども、金庫で世界を治める輩。

お前等の云ひ觸らす所を聞けば、悪黨め！ 藝術家は皆怠け者、苦しむのは自業自得と、愚か者。

黙り居らぬか。野葡萄の皮にあの蟬が、孔をあければ、お前等はその飲物を横取りし、それから、死ねば、身ぐるみ食つてしまふ奴。

私の友はその表情的なプロヴァンス語でかう語つて、寓話作者によつて無實の罪を負はされた蟬の汚名を雪いで居る。

一四

蟬——穴を出づ

既にレオミユール (Réaumur) 在る以上、蟬に就いて再論する事は全く無益の業と思はれるけれども、弟子にして其の師の未だ知らざる所を知る場合は必しもさうでない。此の大博物學者は私の地方から研究材料を受けて居た。彼は酒精漬にして馬車で運んで來た資料に依つて研究したのであつた。所が私は蟬と共に生活して居る。七月になると蟬は私の庭を占領し、家の入り口まで進出する、此の草庵には二人の主が出来る。私は依然として庵内の主人であるが、庵外では蟬が絶對の女主人として不當の權力を振ひ、耳を聳するばかりの騒がしさである。かうして絶えず側近く生活した結果私はレオミユールの想像し得なかつた若干の細目を究める事が出来た。

夏至の頃に最初の蟬が姿を現はす。日に灼かれ、踏み固められた、人通りの多い小徑の地面に、拇指の入る程の圓い孔があく。これは蟬の幼虫が地を出る穴で、幼虫は深い地下から登つて來て地面で形を變えるのである。此の穴は耕された土地を除けば殆ど至る處に見られる。其の場所は通常日の激しく照りつける乾き切つた場所、殊に道端である。幼虫は場合に依つては、凝灰土や焼けた粘土をも

貫く程の強大な道具を備えて居るので、地を出るに方つては、好んで最も固い部分を選ぶ。

南面の壁の反射でまるで小さなセネガル（熱地）に變つてしまつた庭の小徑には斯うした出口が澤山ある。六月の末、私は最近に見捨てられたこれ等の井戸を調べてみた、土の固い事と云つたら之れを砕くのに鶴嘴が入用な程であつた。

孔の口は圓く、直徑約二センチメートル半である。これ等の孔の周圍には少しの除土もなく、外部を押し出された土の山も全然ない。これは不變の事實である。蟬の穴はもう一つの勇敢な土掘り虫セシコガネの巢のやうに決して上部に一つの山を戴いて居ない。作業の過程が此の相違を説明して居る。糞虫は外から内へと進んで行く。彼は先づ井戸の口から掘り始める。そこで彼は掘り出した材料を運び上げて之れを地面に積み上げる事が出来る。所が蟬の幼虫は、内から外へと行く。出口の戸は最後に開くのである。随つて此の戸は工事の終りに至つてはじめて通用するのだから、到底泥捨て場の役をしない。前者は入るのだから住居の入口に一つの土龍堆を作り、後者は出るのだから入口に何物をも積み集める事が出来ない、此の入口は最後に至つてはじめて出来るのだからである。

蟬の穴は深さ約四センチメートルで、圓筒形をなし、地勢によつて少しく迂曲するけれども、常に最短距離の垂直に近い。其の全長に亘つて全然何もない。此のやうな發掘の場合には除土の出るのが當然であるがどう探してみてもそれがない。何處にも見えない。此の穴の先端は行止まりで少し廣い室

をなして居るが、壁は一樣に平で、此の井戸の延長をなす横穴らしいものと連絡して居る跡は少しもない。

長さと同直徑とから割出してみると此の穴は約二百センチメートル立方の容積を有つて居る。取り去られた土はどうなつたのであらう。非常に乾燥してぼろ／＼になつた地中に穿たれて居るので、井戸も其の底の小室も、若し穿孔作業のほか何等の作業をも受けなかつたのなら、壁は埃だらけで直きに崩れ落る筈である。所が驚いた事には壁面は糊のやうになつた粘土で塗られて居る。尤もそれは嚴格に云つたら到底平滑だとは云へない。しかし、其の凹凸は一と塗りの塗料で隠されて居る。崩れ易い材料が膠で押えられて居るのである。

幼虫は行つたり來たり、地面近くまで登つたり、奥の隠れ家に下つたりするけれども、彼の爪のある足で壁土を崩れ落ちさせる心配は少しもない。若し壁土が崩れ落ちやうものならば管は塞がり、登る事は困難になり、退却する事は出来なくなる。坑夫は杭と横木とをもつて地下道の壁を支える。地下鐵道建設者は煉瓦を補装して隧道を支持する。之れに劣らぬ名技師たる蟬の幼虫は其の穴をセメントで塗り固めて、使用期間の長きに拘はらず常に之れを自由に通行出来るやうにして置く。

此の幼虫が附近の小枝で變態する爲め今や土から抜け出さうとする所を不意に襲ふと、彼は忽ち用心深く退却して、地下道の奥へ樂々と再び下つて行く。之れは今や永遠に見捨てようとする際にすら

も彼の住居が除土をもつて塞がれて居ない證據である。

登り口は一刻も早く日の光を見たがつて大急ぎで仕上げたやつつけ仕事ではない。それは一つの邸宅と云つてもよいやうな住居で、幼虫は此處に永い間滞在するに違いない。野呂を塗つた壁を見ればそれが分る。これが若し孔を開けてすぐに出てしまふ單なる出口に過ぎなかつたならば、これ程の用心は必要ない筈である。疑ふ餘地もなく、これは一種の氣象臺であつて、虫は此處で外部の天候を觀測して居るのである。地下一尋以上の深さにあつては、幼虫は、出土してよいまでに成熟しても、氣候の状態が好いかどうかを判斷する事が殆ど出来ない。彼の居る地下の氣候は、其の變化餘りに緩慢で、變態の爲めに日向に出るといふ彼の一生涯中での最も重要な行爲に必要な、正確な指示を彼に與える事は出来ない。

辛抱強く幾週間も、恐らくは幾月も、幼虫は土を掘り、土を片付け、垂直な煙突を作つて其の内壁を固める。たゞ外界から隔絶する爲めに地面に指一本程の厚さの層をのこして置く。下端には一つの隠れ家を作るが之れは他の部分よりも念入りに出来て居る。これが彼の避難所であり、待合室であつて、すべての情報を綜合して移住は延期するに如かずとなると、彼は其處で休んで居るのである。少しでも好天氣の豫感があると、早速上へ登つて行き、蓋になつて居る薄い土層を透して外界を聴診し、大氣の溫度と濕度とを調べてみる。

若し事情が彼の望みに副はず、柔かい蟬の脱皮に取つて致命的な大事件たる驟雨とか北風とかの危険があるならば、用心深く再び管の底に下つてなほも待つのである。若し之れに反して、大氣の状態が好都合ならば、爪で二掻き三掻き、天井を打ち落して幼虫は井戸からせり出すのである。

どの點からみてもさう信ぜられる、蟬の地下道は一つの待合室であり、一つの氣象臺であり、其處に幼虫は長い間滞在して、或は地面の近くに登つて外界の氣候をうかゞひ、或は奥深く下つて身を隠す。これで下端にある休息所の機宜に適して居る事も、壁面を支える塗料の必要も説明される。若し此の塗料がなかつたならば不斷の往來に此の壁面は必ずや崩れ落ちるに違いないのである。

それよりも説明の難かしいのは此の發掘に相當する除土の完全な消滅である。一井戸平均二百サンチメートル立方の土はどうなつたのか、それらしいものは外部にもなければ、又内部にもない。それに又灰のやうに乾いた土の中でどう云ふ風にして壁に塗つてある糊を獲たか。

カミキリムシ及びタマムシの幼虫の様に木を嚼ちる所の幼虫ならば、第一問に答を得るに違いないと思はれる。彼等は木の心を食べひつゝ道を開いて幹の中を進んで行くのである。木の心は少しづつ大腮で取り取られては消化され、此の開拓者の體を一端から他端へと通り抜け、途中其の貧弱な營養分を譲り渡し、虫體の後方に積集して、此の虫が二度と通る事なかるべき此の道をすつかりと塞ぐのである。或は大腮或は胃の極端な分離作用によつて、消化済みの材料は元の木よりも遙かに壓搾された

ものとなるその結果、通路の前方に一つの空間、一つの小房が出来、幼虫は其處で働くのであるが、此の小房は長さが極めて短く僅かに此の幽閉された虫の立ち働きに足るだけである。

蟬の幼虫が其の穴を穿つのも亦之れに類似の方法によるのではあるまいか。勿論、發掘によつて生じた除土は其の體を通りはしない。土はどのやうに軟かい腐蝕土であらうとも彼の食物としては何等の價値をも有たない。だがしかし、掘り取られた材料は仕事の進むに連れて單純に後方に投げ出されるのではあるまいか。

蟬は四年間地中に留まつて居る。此の長い間の生活が、出土準備の假の宿たる前記の井戸の底で行はれるのでない事は云ふ迄もない。のみならず幼虫は可なり遠い所から此處までやつて来るに違いない。彼は一個の放浪兒で一つの根から他の根へと其の吸嘴を突きさして歩くのである。彼が或は冬期餘りに冷い上層の土を避ける爲め、或はよりよき飲み場に腰を据ゑる爲めに一地點から他の地點へと移る時には、先づ鶴嘴の先で崩した材料を後方へ投げ捨てつゝ道を拓いて行くのである。此の方法に就ては議論の餘地はない。

カミキリムシ及びタマムシの幼虫と同様に、彼にも手足を動かすに必要なだけの僅かの空地が周圍にあればよい。濕つて軟かく、容易に壓搾し得る土は、彼に取つてはカミキリムシ及タマムシの幼虫が消化して糊の様にして出す木の心に相當する。それは容易に壓搾され、凝集して空地を残すのである。

困難は他にある。それは出口の井戸で、此の井戸の穿たれる土地と來ては極めて乾燥して居り、乾燥して居る限り此の土は容易に壓搾されない。幼虫が彼の通路を掘り始めるに方つて、掘り出した土の一部を、今は消滅してしまつて居る一つの前地下道内に、投げ捨てたと云ふ事は、現在の状態としては一もこれを立證するものがないに拘はらず、可なり有りさうな事と思はれる。けれども井戸の容積を考え、これ程多量の除土を置くべき場所を見出す事の如何に困難なるかを考えると、又疑が起つて「此の除土を捨てるには一つの広い空間が必要であつた。そして此の空間は又他の邪魔物を取り除けて獲られたものであり、しかも此の邪魔物を片付けると云ふ事が之れまたなかくに厄介な事であつた。一つの場所を作るには其處から掘り出した土を踏み込むべき他の場所が必要である」と考え、斯うして堂々廻りをしてしまふ。埃つぼい土を後方に投げ捨てて之れを壓搾すると云つただけではこれ程大きい空間の存在を説明するに足りないからである。こんな邪魔な土を片付ける爲めに蟬は何か特別の方法を知つて居るに違いない。一つ彼の秘訣を盗んでみよう。

一疋の幼虫が地から湧き出る所を調べてみよう。彼は殆ど何時も多少に拘はらず泥で汚れて居る。そして其の泥は或はしめつて居り或は乾いて居る。發掘道具たる前肢の其の鶴嘴の先端が泥土の細粒に蔽はれて居る。他の肢の籠手も泥だらけであり、脊は粘土で汚れて居る。まるでどぶ泥を、掻き廻して來た下水掃除人夫の様である。かうして泥まみれになつて居る事は幼虫が乾き切つた土から出て來

るだけ一層注意を惹くのである。埃だらけになつて出て来ると思つて居た所が泥だらけなのである。

此の方面に更に一步を進めると此の井戸の問題は解決される。私は一疋の幼虫が出口の道を掘つて居る所を掘り出した。好い加減に掘つくり返えしてみると時々斯うしたうまい所に出會はず。してみると外部からは少しもそれと見定める手がかりがないのだから、何もあちこちと駆け廻る事はない。此のうまい見つけ物は恰度掘り始めて居る所だつた。通路の長さは約一寸で何の邪魔物もない。そし

てどん底には休憩室が出来て居る。仕事は恰度其處まで進んで居た。さて女

工さんはどんな状態にあるかと云ふとまづ次のやうな様子であつた。



幼虫の自然状態

幼虫は土を出た所を捕まえたのに較べてすつと色が白い。眼はとても大きく特に白味を帯び、雲がかゝつたやうで濁つて居ても見えさうもない。

地下で視覚など何の要があらう。地から出た幼虫の眼は、之れとは反對に、眞黒で輝いて、如何にも視力のある事が分る。日向に出た未來の蟬は時とすると穴から可なり遠方へ、變態すべき支枝を探し求めなければならぬ。そこで目が見えると云ふ事は彼に取つて明らかに有要である。斯く脱出の準備期間中に視力が成熟しきると云ふ一事を以てしても、幼虫が其の登り道を大意で即席に作るのではなく、長い間その爲めに働いて居る事が分るのである。

のみならずなま白い盲目の幼虫は成熟した時よりも大柄である。液で膨れ上つてまるで水腫病に罹

つたやうである。指で摘まんでみると後方に一種の透明な液が滲み出て全身を潤ぼす。此の液體は腸から排泄されるのだが尿の一種であらうか。それとも單に樹液のみを以て養はれた胃の殘滓に過ぎないのであらうか。私はどちらとも斷言しない、たゞ言葉の便宜上尿と呼ぶ事にする。

所で此の尿泉、それが謎を解く鍵なのである。幼虫は前進するに連れ、掘るに連れて埃つぼい材料に此の尿をそゞぎかけて之れを捏粉のやうに變じ、直ちに腹壓をもつて之れを周壁にくつつけるのである。最初乾燥して居た土は忽ち粘つこい土になるのである。斯うして出來た泥は粗雑な土の隙間に入り込み、最もよく溶けた部分は更に深く滲透する。残る部分が壓搾され、積み重ねられて空間を埋める。そこで一つの自由な通路が出来て、しかも少しの除土も残らない。埃つぼい崩れ土は通路の穿たれる土地よりも一層緻密な、一層等質的な漆喰となつて即座に利用されるからである。

それ故幼虫は粘土質の泥の中で働くのである。さう云ふわけで、幼虫は汚れて居るのだが、何しろ乾き切つた土から出て來るものだから見る者はすつかり驚かされるのである。成虫になるともう坑夫仕事からも全然解放されるのであるけれども、それでも小便袋の使用を全然廢しはしない。残りは防禦手段として保存される。餘り側近くへ行つて観察すると、彼は其のうるさい奴にびつと小便を引つかけて俄に飛び去つてしまふ。此の二形式に於て、蟬は、其の水氣の少ない體質にも拘はらず一個練達の撒水夫である。

幼虫は如何に水腫病に罹つて居るとは云へ、溝に廻りあげねばならぬ長い土の柱を濡めらして、之れを壓搾し易い泥に變えるに足る程の液體を有つて居る筈がない。そこで水溜めは涸れ、新に水を貯えねばならない。何處でどう云ふ風にやるか。私にはそれがほど分るやうに思ふ。

私は幾つかの井戸を、斯うした發掘に是非必要な細心の注意を拂ひつゝ其の全長に亘つて掘り發いでみた。するとどん底の小房の壁に一本の生き生きとした木の根が嵌め込まれて居る。其の太さは時に鉛筆位であり、また時には麥藁の太さ位である。此の根の目に見える部分は僅かであつて、やつと數ミリメートルに過ぎない。他の部分は周圍の土の中に潜つて居る。此の樹液の源泉は偶然の遭遇であらうか、それとも幼虫が特に探し求めたものであらうか。私はどうも後の方だらうと思ふ。さう思はないでは居られない程どの井戸の底にも一つの小根があつた。少くとも私の發掘がうまく行はれた時にはさうであつた。

さうだ、蟬は未來の煙突の登り口となる彼の小房を掘るに方つて、一本の生々しい根の直ぐ近くを探し求め、小房の壁と續いて居てしかも突出しない部分を裸にむく。此の壁の生きて居る部分、之れが、私の思ふに、必要に応じて小便袋の内容を補給しに来る泉なのである。乾いた埃を泥に變える爲めに水溜めの水が盡きてしまふと此の坑夫は下の小房に降りて彼の吸嘴を突きさして、壁に嵌め込んだ樽から思ふ存分飲むのである。水筒が一杯になると、再び登つて行く。彼は再び仕事に取りかゝつ

て、固い土を濡らして爪で掻き落し易くし、崩れ落ちた土を泥に變じて周圍の壁に押しつけ、そして自由の通路を作る。と云つた具合に事は運ぶに違いない。直接の觀察は此の場合到底望めないけれども、論理とすべての状況とは之れを確言して居る。

若し樹根の樽がなく、其の上、腸の水溜めが盡きてしまつたならばどうなるか。その回答は次の實驗がしてくれる。——一疋の幼虫が土から出る所を捉える、之れを一つの試験管の中に入れ、乾いた土の一粒を軽く押しつけて之れを蔽ふ。此の柱は一センチメートル半の高さを有する。幼虫が今去つて來た穴は之れより三倍も長く、周圍の土は之れと同じ性質ではあるが、之れよりも遙かに固いのである。今斯うして私の短い埃つばい柱の下に埋められて、表面まで登る事が出来るであらうか。若し力さえ充分にあつたならば確に出来るに相違ない。固い土に穴を穿つて來たばかりのものに取つて軟かい一障害物など何であり得よう。

だが私に種々な疑問が起る。幼虫は外界と彼とを隔絶して居た薄い蓋を打破する爲めに彼の最後の液體準備を消費してしまつた。革袋はから／＼であり、生きた根がないからして之れを満すべき何等の方法もない。私が之れは失敗するなと思つたのには根據があつたのである。事實、三日間と云ふも此の埋没者は精根を盡して努力したが一寸程も登る事が出来なかつた。掘られた材料は、粘りがないので其の場に支える事が出来ず、忽ち剝けて崩れて足の下に落ちてしまふ。いくら働いても目に見

える程の効果がなく、何度でもやり直さなければならぬ。四日目に虫は斃れた。

水筒が一杯だと結果は全然違ふ。私は脱出作業の始まつたばかりの一疋の幼虫に同じ試験を施してみた。彼は尿液ですつかり膨れ上つて居てそれが滲み出して彼の身體を濡めらせる。彼に取つて仕事は楽なものである。材料は殆ど抵抗を示さない。坑夫の革袋から與えられる少しの濕り氣が之れを泥化し、之れを膠着し、落ちて來ないやうにする。溝が開かれる。尤も此の溝は甚だ不規則であり且つ上昇の進むに連れて後方が塞がれて行く。まるで此の虫が、水の貯えを新にする事の不可能なのを知つて、彼の所有する僅かの水を節約し、居慣れぬ場所から一刻も早く脱出するには是非必要な分量だけを消費して居るかのやうである。此の節約は如何にも巧みに行はれて約十日の後には虫は遂に表面に達したのである。

一五

蟬——變態

蟬が穴を出てしまふと、残された穴の口はぼかんと開いて、太い螺錐であけた穴のやうに見える。幼虫はしばし其の附近をさすらひつゝ小藪の上、タチヂヤカウサウの茂み、麥の莖、灌木の小枝など空中に足場を探し求める。見つかるると其處に攀ぢ登り、頭を上、前肢の鈎でしつかりと獅噛みつくのだが、掴んだが最後最う二度と離さない。他の肢は其の小枝の配置の具合さえよければ矢張支持に參與する。さうでない場合には前肢の二ツの鈎だけで十分である。それから一寸の間休息する。懸垂腕が硬化して確かりした支據となるのを待つて居るのである。

中胸部が第一番に脊の正中線から割れる。割目の兩縁は徐々に遠ざかつて新緑色の虫體をみせる。それと殆ど同時に前胸部も亦割れる。此の縦の割目は上方は頭の後部まで、下方は後胸部に達するが、それ以上には波及しない。眼の前方にて横に頭蓋被覆が裂ける。そして赤い單眼が現はれる。これ等の破裂によつて曝露された緑色の部分は次第に膨れたり、殊に中胸部に於てヘルニアのやうに隆起して來る。其處には緩慢な鼓動が見られる。血液の去來に由つて膨脹收縮が交互に行はれて居るのであ

る。此のヘルニアの働きは最初の中は目に見えないが、俄然其れが楔のやうに働いて抵抗の最も少ない十字形二線に従つて胸甲を破裂させてしまつた。

脱皮は急進歩をする。今や頭部は自由であり、口吻、前肢は徐々に其の鞘を脱する。體は腹面を上方に向けて水平となる。大きく口を開いた殻の下に後肢が現はれる、肢としては最後に皮を脱する部分である。翅は液で膨れて来る。未だ皺くちやな所は弓形に曲がつた發育不全肢に似て居る。十分間で此の變態の第一段は済んでしまふ。

次は第二段であるが之れはもつと永くかゝる。昆虫の體は殆ど全部自由になつた、たゞ腹の端だけが依然として其の鞘に收まつて居る。抜け殻は相變らず小枝をしつかりと抱き締めて居る。急速な乾燥によつて硬化し、最初に取つた態度を少しも變えずに保つて居る。これがこれから始まる運動の支據點なのである。

未だ引き抜かれない腹端によつて抜け殻に引き留められながら、蟬は頭部を下に眞直に仰向けに引つくり返える。其の色は薄緑で黄色くぼかされて居る。翅は、今まで厚ぼつたい發育不全肢のやうに凝結して居たが、一杯に集中して来る液體の爲めにびんと伸び擴げられる。此の緩慢微妙な作用が終ると、蟬は殆ど氣附かれぬ程の動作で腰の力を利用して起き上り、頭部を上普通の位置に戻る、前足で抜け殻に獅噛みついて、遂に腹端が其の鞘から引き抜かれる。これで引き抜きが終る。全部で此

の作業は三十分を要したのである。

之れで蟬は完全に其の假面を脱したのであるが、後刻の彼の姿とまあ何と違つて居る事であらう。羽根は重々しく、濕つて、硝子のやうに透明で翅脈が新緑色に走つて居る。前胸部及び中胸部にはかすかに褐色の雲がかゝつて居る。體の他の部分は淡緑で所々白味がかつて居る。空氣の熱に永い間浴さなくては、此の脆弱な虫は色彩の豊かな丈夫なものとはならない。二時間程の時が経つてもまだ目に見える程の變化が起こらない。前肢の爪だけで抜け殻にぶら下つたまま、蟬は一寸した風にも揺られて居る。相變らず痺弱さうで、相變らず緑色である。やつと褐色になり始める、するとどん／＼と色づいて行つて直きに仕上がる、三十分ばかりで充分だつた。朝の九時に支枝に登つた蟬は十二時半に私の目の前で飛び去つて行つた。

抜け殻は割目以外は完全な状態で残つて居る。そして如何にもしつかりと獅噛みついて居るので、晩秋の風雨と雖も必しも常に之れを打ち落す事は出来ない。其の後數ヶ月の間は勿論、冬の間に至るまでも古い抜け殻が、變態の際の姿勢のまま、で荆棘にひつかゝつて居るのを見出す事は極めて頻繁である。干からびた羊皮紙のやうな硬い性質が之れを永く保つ遺物として居るのである。

一寸後戻りをして、蟬が其の鞘から抜け出る時の體操をもう一度観てみよう。第一に、最後まで鞘に收められたまゝで居る腹端によつて引き留められながら、蟬は頭部を下に眞直に仰向けに引つくり

返える。此の翻筋斗によつて彼は翅と後肢とを引き抜く事が出来る。此の時には既に頭部と胸部とはヘルニアの隆起によつて殻を押し破つて外部に現はれて居るのである。次が此の反轉の軸をなす腹端を引き抜く時期である。之れが爲めには昆虫は脊骨にうんと力を入れて眞直に立ち直り、頸部を再び上方に持ち來し、前足の爪を以て抜け殻に獅噛みつく。之れで新しい一ツの足がよりが出来て、腹端を其の鞘から引き抜く事が出来るのである。

斯うして二ツの懸垂方法がある。第一は腹端であり、それから前肢の爪である。また二ツの主な動作がある。第一は下方へ反轉、第二は普通状態への復歸。此の體操は幼虫が頭部を上に一ツの小枝にとまり得る事、及び其の下方に空間の存在する事を必須條件とする。若し私が技巧を用ゐてこれ等の條件を取り除いたならばどうなるであらうか。之れはやつてみなければ分らない事であつた。

一本の後肢の端に一本の糸を結びつけて幼虫を試験管の内の靜かな大氣中に吊るしてみた。此の糸は一ツの下錘をなし、何物も其の垂直さを亂さない。變態期が近づいて是非とも頭部を上になければならないのに、斯うして妙な具合に頭部を下に置かれて居るので、此の可哀さうな虫は永い間足を顫はせ騒ぎ立て、一生懸命に立ち直つて前肢の鈎で吊糸なり、自分の後肢なりを掴まうとする。中にはどうにか目的を達して、どうやらかうやら立ち直り、鈎合ひの保ち難きに拘はらず、どうやら氣に入つたやうに身體を固定させて、他には別に障礙もなく變態を終るものもある。

しかし他の連中は甲斐ない努力に疲れる。糸を掴む事が出来ない、頭部を再び上方に引き上げる事が出来ない。さうすると變態を終る事が出来ない。時には脊の破裂が行はれ、ヘルニア形に膨れ上つた胸部を露出する。けれども摘出手術はそれ以上進まず、幼虫は間もなく斃れてしまふ。それよりも更に多いのは幼虫が少しの割目も出来ず完全な状態のまゝで死ぬ事である。

もう一つの試験。幼虫を廣口硝子瓶の中に入れる。底に薄い砂床を作つて歩行に使してやる。幼虫は歩き廻はる、けれども何處へも登る事が出来ない。滑かな硝子壁がそれを妨げるのである。かうした状態では此の囚はれの幼虫は變態を試みずに斃れる。此の悲惨な最後に對しては若干の例外を私は知つて居る。時とすると幼虫がまことに説明し難い特殊な鈎合ひ方法を用ゐて、砂床上で正規の變態を遂げるのを見た事があるのである。だが要するに、若し普通の位置或は何かこれに似寄りの位置を獲得する事が出来ないならば、變態は行はれないで虫は斃れる。之れが原則である。

此の結果から見ると、幼虫は變態期の近づくと共に彼に働きかける種々な力に抵抗する能力があるやうである。成熟すると、玉菜の長角も、豌豆の莢も必ずはじけて其の種子をこぼす。蟬の幼虫は種子の代りに成虫を包んで居る長角のやうなものであるが其の開裂を左右し、更に好都合の時機まで之れを延期する事が出来るばかりか、若し周囲の事情が不利であるならば全然之れを廢止する事も出来るのである。變態期が迫つて我が身内に起る激しい内的變化に惱まされながらも、しかも四圍の状況

非なる事を本能によつて警告されると、彼女は絶望的に抵抗し、我が身を開かんよりは寧ろ死を選ぶのである。

私が好奇心から彼女に受けしめる所の試練を除いては、蟬の幼虫が此のやうな方法で死ぬ危険に曝らされる場合があらうとは思はれない。穴の附近には必ず何かの茂みがある。地から出た幼虫は之れに攀ち登り、數分間の時があれば充分に此の動物性の莢は其の脊から割れるのである。此の開裂の速かさは屢々研究上私を困らせたものである。一疋の幼虫が附近の丘に姿を現はす。私は彼女が今正に小枝にしがみつかうとして居る所を發見する。之れが自宅ならばまことに興味ある觀察が出来るのである。そこで彼女を其の掴まつて居る小枝と共に紙袋に入れて大急ぎで歸宅する。十五分もすれば私は歸り着くのである。所が駄目である。家へ着く頃には緑色の蟬が殆ど抜け出して居る。見たいと思つた事が見られないわけである。私は私の調査方法を断念して、單に自宅の門口から數歩の邊に於て偶然好い按配に發見した掘出し物だけで満足しなければならなかつた。

かの教育學者シアコト (Jacobs) が其の當時云つて居た通り、凡ては凡ての中にある。此の變態の迅速さに就いて想ひ出すのは料理の一問題である。アリストテレスに據れば蟬は希臘人の非常に珍重した料理であつた。此の大博物學者の原文を私は知らない。私のやうな田舎者の文庫には其のやうな貴重な文献はない。偶然私の手許に一冊の尊い好著があつてよく其の間の事情を教えてくれるのであ

る。それはマチオル (Mathiole) の書いたディオスコリド (Dioscoride) の註釋である。マチオルは非常に博識であるからして、彼はアリストテレスを熟知して居るに違いない。私は彼に滿腔の信頼を感じる。

所が彼曰く「テツチゴメトラ未だ其の皮を破らざる中は蟬の味まことに美なりとアリストテレスの云へるは宜なり」と。テツチゴメトラ即ち蟬の母と云ふのが幼虫を指す古い言葉である事を知ると、アリストテレスに據れば、蟬はテツチゴメトラの皮未だ破れざる中がまことに美味である事が分る。

此の皮未だ破れざる中と云ふ一事によつて、此の美味しい食料品が何時頃收穫されたに違いないかと云ふ事が分る。それは土を深く耕す冬の間であり得る筈はない。蓋し、其の頃は幼虫開裂の心配はないからである。全然必要のない注意を勸告する筈はないのである。そこでこれは夏、幼虫が地を出て、地上をよくさがして見ると、それが一つ一つ見つかる頃の事だと云ふ事になる。これこそ皮が裂けないやうに多大の注意をしなければならぬ唯一の時期である。これはまた大急ぎで收穫し且つ料理しなければならぬ時期である。蓋し、數分間にして皮は裂けるからである。

此の古い料理上の評判、「まことに美味」と云ふ涎のたれさうな形容は其の眞に當つて居るかうどか。機會は絶好である。此の機會を利用してみようではないか。そして其の要があるならばアリストテレスによつて推賞された此の料理の名譽を恢復しようではないか。ロンドン (Rondelet) と云えば

あのラブレール (Rabelais) の博識の友であるが、彼は腐魚の腸をもつて作つたあの有名なソース、ガルム (Garum) を再発見した事を誇りとして居る。テツチゴメトラを食通等に返えしてやるのも功德ではなからうか。

七月の或る朝、太陽が既に灼けるやうに照りつけて蟬の幼虫の出土をうながす頃、家中の者が大人も子供もさがしに出かける。我々は五人がよりで庭の中、殊に一番有望な小徑の端をさがした。皮の開裂を防ぐ爲めに、幼虫が見つかるに連れて早速之れを水を入れたコップの中に浸した。窒息して變態作用が止まるだらうと云ふわけである。まる二時間我々一同、額に玉の汗を流して一生懸命に探した結果がたゞの四疋であつた。彼等は豫防水の中に入れられて或は死に、或は死にかけて居る。だが構はない、どうせ、フライになる彼等なのだから。

調理は出来るだけ簡単にする。すこぶる美と稱せられる其の持ち味を出来るだけ保たせる爲めである。油数滴、鹽一と撮み、玉葱少量、それだけである。「家庭料理の栞」には之れより簡単な調理法はない。晝飯には其のフライが獵師全部に分けられた。

満場一致で「食べられる」事を認める。尤も我々は食欲旺盛、加ふるに我々の胃は何等の偏見をも有つて居ない。それは一寸蝦クルマエビの味がするがバツタの小串焼の方が一層それに近い。しかしそれはとても堅く、水氣に乏しく、まるで羊皮紙を嚼むやうである。アリストテレス推賞の料理ではあるが私

は誰にもおすゝめしないつもりである。

勿論この有名な博物學者は一般に素晴らしくよく事情に通じて居た。彼の弟子たる王は、當時まことに神秘の國であつたあの印度から、マセドニア人の眼を最も驚かすに足る珍奇な品々を送り届けてよこした。幾組もの隊商が象や彪や虎や犀や孔雀を彼の所へ携えて來た、そして彼はそれ等を忠實に描寫した。しかも、本國たるマセドニアに於て彼はこの虫を實際には知つて居なかつたのである。一生懸命に畑を耕しつゝ屢々其の鋤先きにテツチゴメトラを見出し、之れが蟬の母である事を誰よりも先に知つて居た百姓たちから蟬の事を又聞きしたに過ぎない。それ故アリストテレスが其の偉業を遂行するに方つて爲せる所は、其の後プリヌ (Pline) が爲せる所にやゝ似て、しかも遙にお目出度い輕信さを帯びて居たのである。彼は田舎人の饒舌を聴いてそれを確な資料として記録して居たのである。

何處でも百姓と云ふ者はいたづら者である。彼等は我々が科學と呼んで居るくだらない事を嘲笑したがる。彼等は何でもない一疋の虫の前に足を止める者を笑ふのである。若し我々が一つの小石を拾ひ、之れを調べ、之れをポケットに入れるのを見るならば彼等はぶつと吹き出してしまふのである。希臘の百姓は斯うした悪い癖に特に長けて居た。彼等は町の者に云つたのである。テツチゴメトラは神様の御料で、其の味と來たら他に類がない、と。しかし、大袈裟な褒め言葉でお目出度い町人を釣つて置いて、しかも其の慾望を満す事の出来ないやうにして置いたのである。何故かと云つて、肝腎

な條件として此の美味い物は皮の裂けない中に採らなければいけないのだからである。

まあ、分量のたつぷりとある一皿を作らうと云ふ目的で、穴が出る所のテツチゴメトラを幾握りか取り集めてみるがよい。何しろ我々五人の同勢が蟬の豊富に居る土地で二時間かゝつてやつと四疋見つけたのだから。殊に諸君の搜索は幾日もかゝるに違いないから、其の間に皮の裂けてしまはないやうに充分気をつけるがよい。何しろ此の皮と來ては數分間で裂けてしまふのだから。私の見る所ではアリストテレスは一度もテツチゴメトラのフライを味はつては居ない。私の料理がそれを證明して居る。彼は何か田舎人の笑談を大眞面目で繰り返して居るのである。彼の云ふ所の神僕はとても食えた代物ではない。

いや、若し私が近所の百姓たちの私に語るすべての事に耳を借したならば私も亦、蟬に就て實に素晴らしい蒐集をなし得るに違いない。田舎に於ける蟬の物語の唯一例だけを茲に擧げてみよう。

何か腎臓に故障があるとか、水腫病で膨れ上るとか、強い清淨劑が必要であるとか云ふと村の薬局方は一齊に絶好薬として蟬をすゝめる。蟬は成虫の形で夏採集し、之れを珠數つなぎにして日に乾かし箆筒の隅に大切に保存して置く。家婦にして若し其の一と貯えを珠數つなぎにしないで七月の月を過してしまふならば彼女は、家婦の勤めを怠つたと思ふであらう。

少しく腎臓炎の氣味があるとか、何か尿道に故障があるかすると早速蟬の煎薬である。これ程効く

ものは他にないさうである。其の昔私が何かで具合が悪かつた時に、私に知らせずに此の煎薬を飲ませた事があると云ふ事を後になつて話に聞いた。飲ませてくれた人の親切には感謝するが私にはどうしても其の効能を信ずる事が出来ない。たゞ私の驚く事は此の同じ薬があつた古いアナザルバ (Anazarb) の醫者によつて既に推賞されて居る事である。ディオスコリドは云ふ「蟬は炙りて食せば能く腎の惱みを醫す」。此の醫薬の長老の昔からプロヴァンスの百姓は、橄欖、無花果及び葡萄を携えてフオセー (Phocée) からやつて來た希臘人が彼等に初めて傳えた所の此の秘薬に對する信仰を持ち續けて居るのである。たゞ一つの事が變つて居る。ディオスコリドは蟬を炙つて食えと教えて居る。今日では之れを茹でて利用し、煎じて飲むのである。

此の虫の利尿的性能に關する説明はまた素晴らしく他愛のないものである。蟬は此の土地ならば誰でも知つて居る通り、之れを捕えようとする者の顔に小便をひつかけて逃げる。そこで蟬は其の排尿力を我々に伝えるに違いない。とまあディオスコリド及び彼の同時代の者が理窟をつけたに違いない。今日猶ほプロヴァンスの百姓はさう理窟をつけて居る。

いやお目出度い人々だ。若し諸君にして、自分の小便で漆喰を捏ねて氣象臺を建てることの出来るテツチゴメトラの力を知つたらどうするだらう。ガルガントウア (Garbanua) が聖母寺の塔に腰掛け、彼の強大な膀胱の大洪水を以て、女子供は云はず、あの巴里幾千の彌次馬を溺れさせた和我々に

語つて居るラブリーの張喙をも信ずる事であらう。

一六

蟬—歌

彼自らの告白によると、レオミユールは一度も蟬の歌を聞いた事がない。また生きた蟬を見た事もないのである。此の昆虫はアヴィニヨン附近から砂糖入りの焼酒に漬けて送られたものである。かうした状態は、これでも解剖學者には充分なので、發音器の正確な描寫も行はれ得たのである。先生も立派に之れを描寫して居る。彼の慧眼は此の不思議な樂器の構造を極めてよく見て取つた。それで彼の研究は何人によらず蟬の歌に就いて一言しようとする者の研究の源泉となつたのである。

彼一と度出でて後はまた收穫すべき何物もない。たゞ僅かに二三の落穂を拾つて此の弟子は一つの束を作るつもりなのである。私にはレオミユールに缺けて居た所のもがあり餘る程有る。私にはあの耳を聳するばかりの奏樂者の騒ぎが欲しいと思ふ以上に聞こえるのである。そこで最う種子切れになつたかとも思はれる此の問題に於ても若干の新しい見解を獲られるかと思ふのである。それ故蟬の歌を最う一度問題にしてみよう。尤も既知の事實は單に私の説明を助けるに必要なものしか繰り返えさない事にする。

私の附近で私の採集し得る蟬は五種である、即ち、ナミゼミ (*Cicada plebeia* Lin.)、マンナゼミ (*Cicada orni* Lin.)、アカゼミ (*Cicada hematodes* Lin.)、クマゼミ (*Cicada atra* Oliv.) 及び法師ゼミ (*Cicada pygmaea* Oliv.) である。初めの二種は極くありふれたものであるが、他の三種は稀有のもので田舎の人々さへも殆ど知らない位である。普通の蟬は五種の中で一番大きく、一番人に知られて居り、其の發音器官が普通描寫されて居るのである。



ミゼナマ

雄の胸の下、後肢の直後に二つの大きな半圓形の板があり、右の板が上に左の板が下に互に少しく重なり合つて居る。これは此の騒ましい樂器の扉であり、蓋であり、制音器であり、まあ謂はば貝蓋である。之れを引き揚げてみよう。さうすると左右に一つづゝ大きな腔が口を開けて居る。之れはプロヴァンスでは禮拜堂 (*tribune*) と云ふ名で知られて居る。そして其の全體が教會堂 (*la cloison*) を形づくつて居る。此の兩腔は前方を薄い軟かいクリーム色の一枚の膜で限られ、後方は石鹼玉のやうな光彩を發する乾いた一枚の薄膜で限られて居るが、之れをプロヴァンス語で鏡 (*miroir*) と名づけて居る。

教會堂、鏡、蓋が俗には發音器官と見做されて居る。息の續かない歌手の事を彼れは鏡が破れて居ると云ふ。此の形容は詩想のない詩人にも適用される。しかし音響學は此の民間の信仰を否定する。

鏡を破らうが、鉄で貝蓋を切り去り、前の黄色い膜を引き裂かうが、蟬の歌は決してやまない。單に其の音色を變へ、少しく音を弱めるだけである。禮拜堂は共鳴器である。それは音を發しはしない。其の前後の膜の振動によつて音を増大し、扉の開閉によつて音色を變化させるのである。

眞の發音器官は他にあつて慣れぬ者には之れを發見する事が可なり困難である。兩禮拜堂の外側、腹と脊との接合稜線上に、一つの釘穴が開いて居るが、角質の壁で閉ざされ、貝蓋で蔽ひ隠されて居る。之れを「窓」と名づけよう。此の口は一つの腔に通じて居る、之れが音響室であつて隣りの禮拜堂よりもつと深いけれども廣さは之れよりも遙かに狭い。後翅の着け根の直後にほと卵形をした一つの輕微な突起が見えるが、光澤のない黒色なので銀色の纖毛を有する附近の外皮と區別される。此の突起が音響室の外壁なのである。

これに大きな割目を作つてみよう。さうすると發音器たるシンバルが露呈する。それは乾いた白い卵形の小さな膜で、外方に中高く、其の大直径の一端から他端へと三四本の褐色の脈の一束が走つて之れに弾力を與へ、周圍は堅い枠に固定されて居る。此の中高の鱗片が内部に引つ張られて曲り、少しく凹み、それから其の弾力ある脈の働きによつて急速に最初の中高の位置に戻つたと想像してみるとよい。さうすると此の一往復から一つの憂々たる響が生じる。

今から二十年程以前に首都の人々はたしか「ばつた」若しくは蟋蟀と呼ぶ馬鹿げた玩具に夢中にな

つた事がある。それは一枚の短い鋼鐵板の一端を金屬性の座に固定したもので、之れを拇指で押して凹ませ、それから其の指を離す。これを代る代ると其の板は、他に何の能もなく、とてもやかましい憂々の音を發したものである。しかもたつたそれだけの事で滿都の人氣をさらつてしまつたのである。此の「ばつた」も一時大した流行だつたが其の後忘れ去られたのは當然な事で、しかも其の忘れられ方の甚だしさは、今此のさしにも有名だつた玩具の話をして誰も分らないのではないかと危ぶまれる程である。

此の膜を張つたシンバルと鋼鐵の「ばつた」とは同じやうな楽器である。何れも弾性ある一枚の板を曲げそれがもとの状態に復歸する時に音を發するのである。「ばつた」は拇指で押して曲げるが、シンバルの中高はどうして其の形を變へるか、あの教會堂に戻つてみよう。さうして各禮拜堂の前方を限つて居る黄色い帷を破つてみよう、さうすると二本の、太い筋肉柱が現はれる。薄オレンジ色でV形に組み合はされた其の先端は昆虫の腹面の正中線上に置かれて居る。此の二本の肉柱は何れも上部がぼつきり切られたやうに終つて居り、此の切口から一本の短い細い線が出て行つて相互のシンバルに平面に附着して居る。

これが仕掛の全部であつて、其の簡略な事はあの金屬製の「ばつた」に劣らないのである。二本の肉柱が收縮し弛緩し短縮し伸長する。そこで其の末端の紐によつて各々其のシンバルを引つ張り、之

れを凹まし、そしてすぐさま放すと、シンバルが自分の弾性で舊位置に戻る。斯うして此の二つの發音鱗片は振動するのである。

此の仕掛の有効さに就いて確證が獲たい、死んでまだ間もない蟬に歌はせてみたい、と云ふ様な望みを抱く者があるとしたら、これ程容易い事はない。ピンセットで此の筋肉柱の一つを挟んで加減しながら何度も引つ張つてみるとよい。死んだ蟋蟀が甦える、一つ引つ張る毎にシンバルは憂と鳴る。尤も其の音は随分小さい。生きて居る名手が其の共鳴器を用ゐて獲る所のあの豊かな音色を缺く爲めである。しかしそれにして歌の根本的要素は此の解剖學者の技巧によつて獲られたわけである。

反對に、頑固な音楽狂で、人が指で捕まえると、今まで樹の上で我が身の幸を歌つて居たと同様な僥舌で、自分の不幸を嘆く生きて居る蟬を啞にしたいと思ふならば、彼の禮拜堂を荒らし、彼の鏡を破る事は無益の業である。こんな殘忍な傷害を加へた所で彼は叫聲を緩めはしない。それよりも、前に窓と名づけた所の體側の卸穴から一本の針を突つ込んで、音響室の奥のシンバルを刺した方がよい。ほんの一寸つゞつくとシンバルは穴があいて黙つてしまふ。もう一方の側にも同様の手術を施すと昆虫は完全に無音になつてしまふ、しかも何等目立たしい傷もなく彼は今まで通りびん／＼して居る、事情に通じて居ない者は私の針の一と突きの結果に驚かされて啞然として居る。何しろ鏡其他教會堂の附屬物を破壊しても、蟬を沈黙させる事が出来ないものであるから無理もない。何でも一寸し

た一と突きで蟬の腹を截ち割つても獲られない事が出来るのだから。

貝蓋は、硬い板であつて、しつかりと嵌め込まれて居て、少しも動かない。腹部自體が持ち上つたり下つたりして教會堂の閉閉を行ふのである。腹が下ると貝蓋は禮拜堂並に音響室の窓をびつたりと塞ぐ。さうすると音が弱まり、鈍くなり、抑壓される。腹が持ち上ると禮拜堂は口を開き、窓も自由になり、音は其の全力を發揮する。それ故シンバルを動かす筋肉の收縮と同時的に腹部を急速に振動させてあのかな弓の運びの結果かと思はれる種々な幅の音を出すのである。

静かな暑い日の眞晝頃、蟬の歌は長さ數秒の小節に區切られ、其の間に短い休止が入る。小節は急に始まり、腹部の振動が益々速かになるに連れて急調子で昇騰して響鳴の極に達する。數秒間同じ強さを保つてから次第に弱まり、音色が變つて一種のさわめきとなり、そのさわめきも腹部が休息状態に戻るに連れてだん／＼と小さくなつて行く。腹部の最後の鼓動と共に音ははたとやむ。休止の期間は大氣の状態によつて變る。それからまた俄に新しい小節が始まるが、これは第一小節の單調な反覆に過ぎない。斯うして歌は無限に續く。

時によると、殊に重苦しい夕暮頃など、蟬は日に酔つて歌の休止符を短縮する事があり、又全然之れを廢止してしまふ事さへある。さうすると歌は絶え間なく續くのであるが、やはり相變らずクレッシェンド、漸弱デクレッシェンドを繰り返して居る。朝の七八時頃には最う弓が動き出して、オーケストラは黄昏の光薄れ

行く午後の八時頃でなければやまない。合計、時計の文字板一週を以て奏樂時間とする。しかし空が曇つて居たり、風が餘り冷かつたりすると蟬は黙つて居る。

第二種は普通の蟬の半分程の大きさで此の土地では其の鳴き聲を可なり正確に模倣して之れをカカシ蟬と云つて居る。之れは博物學者の所謂滿那蟬で、前者よりも敏捷で且つ警戒心が強い。其の歌は嘎れ聲で強く、カン、カン、カン、カンの連続で、小節に分つ何等の休止もない。其の單調さと、其の鋭い嘎れ聲とは此の上なく堪らないものである。殊に酷暑の候、私の庭の二本の鈴懸の木の上でやるやうに、オーケストラが數百の演奏者から成り立つて居る場合にはとても堪つたものではない。まるで乾いた胡桃の一と山を袋に入れて殼の破れるまで搖つて居るやうである。此の體刑にも等しい苛立たしい音樂會にはたつた一つの微弱な緩和劑しかない。それは此の滿那蟬が普通の蟬ほど朝早くなくまた夕方もそれ程長くぐ／＼して居ない事である。

彼の發聲器官は、根本原理に於ては變る所はないけれども幾多特異な點があつて、彼の歌に特色を附與して居る。音響室が全然缺如し、隨つて其の入口たる窓もない。シンバルは後翅の着け根の直後に露出して居る。これ亦かさ／＼な白色の鱗片で、外方に圓く凸出し赤褐色の五本の脈の一束が之れを走つて居る。

第一腹環節から一枚の廣く短い硬い舌板が前方に突き出て居り、其の自由な一端がシンバルに觸れ

て居る。此の舌板は「がらがら」の薄板に比すべきもので、但だ廻轉する齒車の齒に當たる代りに、振動するシンバルの脈に強く或は弱く觸れるのであらう。あゝした嘎れた騒がしい音の出る原因の一部は其處にあるのだと私には思はれる。此の蟬を手に捕えて此の事實を確かめてみる事は殆ど不可能である。さうするとカカン蟬は驚き騒いで、到底彼の普通の歌を聞かせないからである。

二枚の貝蓋は互に重なり合つて居ない。それ所か却つて一つの可なり広い間隔でへだてられて居る。腹部の附屬物たる硬い舌板と共にシンバルを半分だけ蔽うて居るので、シンバルは他の半分が全然露出して居る。指で押してみても腹部は胸部との關節に於て殆ど口を開く事がない。のみならず、此の蟬は歌ふ時にじつとして居る。彼は普通の蟬の歌の節廻しの源泉であるあの急速な腹部の動揺を知らない。彼の禮拜堂は極めて小さく、共鳴器としては殆ど無きに等しい。それでも鏡は在るには在るが極めて小さく、ようやく一ミリメートル程である。要するに共鳴器は、普通の蟬に於ては極めて發達して居るにしても此の蟬に於てはほんの形ばかりである。それならば此の貧弱なシンバルの憂音がどうして堪え難いまでに強調されるか。

滿那蟬は腹話術者である。彼の腹部を日に透かして見ると、其の前方三分の二程が半透明である。残る三分の一は不透明で此處には、種の傳播と個體の保存に必要な諸器官を出来るだけ押し籠めてあるのである。此の部分を缺で切り取つてしまはう。さうすると腹の残りの部分が大きく口を開

いて一つの廣い腔を呈する。此の腔は外皮質の壁の他には何にもなく、たゞ其の背面のみが薄い筋肉層に蔽はれ、殆んど一本の糸に等しい細い食道管を支えて居る。それ故此の廣大な容積は虫の全容積の半分近くを占めて居ながら殆ど空なのである。奥の方にシンバルを動かす二本の柱、あの二本の筋肉柱がV形に集まつて居るのが見える。此のV形の先端の左右兩側に二つの極く小さい鏡が光つて居る。そして此の二本の脚の間には、胸部の奥の方まで空間が続いて居る。

此の空な腹と其の補助たる胸部とは、我が地方の如何なる名歌手と雖も之れに比べ得るものを有たぬ程の巨大な共鳴器を形づくつて居るのである。今切り落した腹の口を指で閉ざしてみると、發音管の法則に隨つて音は一段と低くなる。此の開いた腹の口に一つの圓筒、一つの喇叭形の紙の筒を裝置すると音は強くなり且つ低くなる。若し此の喇叭形の紙筒を巧みに按配し、其の廣い方の口を一箇の共鳴管の口に差し込むならば、其の音はもはや蟬の歌ではなくてまるで牡牛の啼き聲である。私の幼い子供達は偶然、私の音響學的實驗の際に其處に居合はせたのだつたが、驚いて逃げ出してしまつた。あれ程彼等になれつこになつて居る虫ではあるが怖ろしくなつてしまつたのである。

彼の音の嘎れて聞こえる原因は、振動中のシンバルの脈に觸れるあの「がらがら」の舌板であるらしい。あの音の強さの原因は疑ふまでもなく腹の廣大な共鳴器である。斯うして自分の腹と胸とを空にして之れを一つの樂器とするとは餘程の歌好きであるに違いない。生の主要器官は極度に小さくなつ

て狭い一隅に引つ込み共鳴器に宏大な場所を譲つて居る。歌が第一、其の他の事は二の次である。

だが幸な事に滿那蟬は進化論者たちの教えに従つて居ない。若し一時代毎に益々音楽熱が昂つて次第に腹の共鳴器が大きくなり遂に、私が彼に作つてやつた紙の喇叭のやうになつてしまつたらカカン蟬の一杯に居る此のブロヴァンスはいづれ住んで居られない土地になつてしまふであらう。

普通の蟬に就いて既に種々の詳しい説明を與えた以上、此の滿那の樹の堪え難いお饅舌たちをどうしたならば黙らせ得るかを説明する必要があるか。シンバルは外部からよく見える。之れを針の先で突きさせばよい、即座に完全の沈黙が得られる。何とかして私の鈴懸の樹の、短剣を有つた昆虫等の中に、之れまた静けさを愛する助手が居て、さうした仕事に献身的に働いてくれないものかしら。しかし之れは馬鹿な願ひである。さうしたら此の收穫時の壯大な交響樂に一つの調子が缺けてしまふではないか。

赤蟬 (*Cicada Hemato des*) は普通の蟬よりも少し小さい。之れは普通の蟬の翅脈及び其の他若干の體の筋が褐色であるのに對して、血のやうに赤い爲めに此の名があるのである。此の蟬は稀である。たまに山査子の生垣で之れを見出す事がある。樂器に至つては普通の蟬と滿那蟬との中間に位して居る。前者の如く腹の振動を行ひ、教會堂を開閉する事によつて音を強くし或は弱くする。また後者の如く其のシンバルは露出して居て共鳴室も窓もない。

さう云ふわけでシンバルは後翅の着け根の直後に露出して居る。其の色は白く、可なり規則正しい凸圓形を爲し、赤褐色の大並行脈が八本あり、他に之れよりも遙かに短い七本の脈がこれ等大並行脈の間に一本づゝ挟まれて居る。貝蓋は小さく、其の内縁が削り抜かれて居るので各自の禮拜堂を半分しか蔽うて居ない。貝蓋の削りによつて残された孔は、後肢の基部に固定されて居る一つの小さなパレットを屏として居る。此の屏は體に密着し或は少しく引き上げられて口を開いたり閉じたりする。他の蟬にも皆これと同様の附屬物があるのであるけれども、これよりも一段と狭く、また一段と尖つて居る。

その上、腹は普通の蟬の如く上から下に、下から上に大に動くのである。此の振動は腿節のパレットの運動と組み合はされて、禮拜堂をいろ／＼な程度に開いたり閉じたりするのである。

鏡は普通の蟬程の大きさはないけれども外見は同じである。胸部の方面で之れと相對して居る膜は色白く卵形で極めて薄く、腹を上げた時はびんと張つて居るが、腹を下げるとたるんで皺が寄る。緊張して居る時は振動して音を増大する事が出来るやうにみえる。

歌は節廻はしがあつて幾つかの小節に分かれ、普通の蟬の歌を想はせるがそれよりも遙かに愼ましやかである。歌に高い響のないのは恐らく發音室のない爲めであらう。力が同じ場合にはむき出しで振動するシンバルは、共鳴室の奥で振動するシンバルの音程の強さを有つ事は出来ない。尤も滿那蟬

にも此の種の共鳴器はないのだが、彼は腹の巨大な共鳴器によつて充分に此の缺を補つて居る。

私はレオミユールによつて圖示されオリヴィエ (Olivier) によつて記述されて居る Cicada tomen-
tosa なる第三種の蟬に出會つた事がない。此の蟬はプロヴァンス地方ではシガロン (cigalon) 或は寧ろシガロン (cigalon 小蟬) の名をもつて知られて居ると二人共に云つて居るが、此の名稱は私の附近では誰も知らなう。

私は他に二種の蟬を所有して居るが、恐らくレオミユールは之れを彼の圖示して居る蟬と混同して居るのであらう。其の一つは黒蟬 (Cicada atra Oliv.) でたつた一度出會つた事がある。もう一つは一寸法師蟬 (Cicada pygmaea Oliv.) で之れは私も澤山採集した。此の最後のものに就て一言して置かう。之れは私の地方で一番小さい蟬である。小さな蛇程の大きさで長さ約二センチメートルである。シムバルは硝子のやうに透明で、不透明な白色の脈三本を有し、外皮の一襲によつて僅かに蔽はれ、完全に外部から見え、少しの前庭もなければ發音室もない。序ながら此の點檢を終るに方つて注意すべき事は、此の前庭は單に普通の蟬のみにあるもので、他の蟬はどれも之れを有つて居ない事である。貝蓋は互に一つの廣い間隔で距てられ、禮拜堂の口を大きく開けつばなしにして居る。鏡は比較的大きい。其の形は隱元豆の影法師をみるやうである。腹は歌ふ際に動かない。滿那蟬の腹のやうにちつとして居る。その爲めにどちらも節廻はしに變化がないのである。

一寸法師蟬の歌は單調で鋭く、しかも小さくて、七月のうんざりするやうな午後の静けさの中でも數歩を距てると殆ど聞えない位である。萬に一つの氣紛ぐれから此の蟬が日に熾える叢を見捨てて多數に冷味みなぎる私の鈴懸の樹に移り住んでくれれば、それこそ彼れを一層よく研究したいと思ふ私の希ふ所であるが、此の可愛らしい蟬は決してあの狂氣じみたカカン蟬のやうに私の佗住居を擾がせる事はあるまい。

さあこれで面倒な描寫は済んだ。發音器の構造も分つた。最後にかうした音樂的大亂痴氣の目的が何であるかを調べてみよう。これ程の騒ぎが何の役に立つのか。一つの解答は不可避的である。妻呼ぶ雄の聲である。戀人の歌である。

此の答は極めて自然ではあるが私は敢て之れを問題にしてみたい。今や十五年と云ふもの普通の蟬と、あのやかましい仲間のカカン蟬とが私を無理やりに彼等の仲間にして居る。毎年の夏、二ヶ月間、私は彼等を目にし、彼等の聲を耳にして居る。喜んで耳を傾ける事はないにしても、幾分の熱心さをもつて彼等を觀察して居る、見ると彼等は鈴懸の樹の滑かな皮の上に皆頭を上に向けて列をなして並んで居るが、雄雌雜居して互に二三寸位しか離れて居ない。

彼等は吸嘴を刺し込んでちつとして飲んで居る。日が廻り影が移るに連れて彼等も亦ゆつたりとした横歩きで枝の周圍を廻り、一番日に照らされて一番暑い面に移つて行く。吸嘴が働いて居ようが、

移轉最中であらうが歌は一時たりともやめない。此のはてしない詠嘆曲を熱情の籠つた呼び聲と取る事が果して當を得て居るか。私はどうかと思ふ。此の一群中にあつて兩性は並んで居るのである。何人にもせよ肱と肱とをつき合はせて居る者を何ヶ月も呼ぶと云ふ事はない。のみならず此の上もなく騒がしい此の交響樂の最中に、雌が驅つけて來るのを私はたゞの一度だつて見た事がない。婚姻の前奏曲としては此の場合眼だけで充分である。蟬の眼は非常に好いのだから。求婚者がいつ果てると思はれない長々しい戀の告白をして何の役に立たう。求める相手はすぐ隣りに居るのに。

それではあの歌は冷やかな女の心を魅惑し之れを動かす一つの方法だとも云ふのであらうか。私の疑ひは依然として残る。私は雌たちの中に何等満足のあるしを見ないのである。戀人が其のシンバルを惜しげもなくいと高らかに打ち鳴らす時雌が身體を少しもちん／＼させたり頭でこつくり／＼したりするのを一度も見た事がない。

近所のお百姓たちの云ふ所によると收穫の頃蟬は彼等にセゴ、セゴ、セゴー（刈れ、刈れ、刈れ！）と歌つて彼等の仕事を勵ますのださうである。思想の收穫者と麥の穂の收穫者、何れも同じ刈入人、一は肉體の糧の爲めに働き、他は精神の糧の爲めに働く。それゆゑ私には彼等の説明が分かるのである。それで私は之れを優にやさしい純朴さとして採用する。

科學はこれ以上の説明を希ふ。しかし昆虫の世界は我々に取つて閉ざされた世界である。シンバル

の憂音が之れを促す雌蟬に對して如何なる印象を興へるかは垣間見る事は勿論、推測する事すらも全然出來ない事である。私の云ひ得るすべての事は、彼女等が冷やかな態度を示して居る所から見ると、彼女等は全然此の音に無關心らしいと云ふ事である。之れ以上強ひて穿鑿するのはやめよう。昆虫の深い感情は測るべからざる神祕である。私の疑ひのもう一つの動機は次の様なものである。歌に敏感な者は必ず聽覺の敏い者である。そして此の聽覺は警戒怠りなき歩哨のやうに極く些細な物音にも危険を警告する筈である。練達の歌者たる小鳥は極めて鋭敏な聽覺を有つて居る。枝間に揺れる一葉にも、行人の取り交はす一語にもはたと聲をひそめて不安げに身構える。所が蟬と來ては其のやうな感動から何とまあ遠い事か。

彼は極めて鋭い視覺を有つて居る。彼の大きな複眼は左右兩方面に起りつゝある事を彼に教える。彼の三つの單眼はルービーで出來た小さな望遠鏡で額の上方の視界をさぐる。そして我々の近づくのが見えると忽ち聲を收めて飛び去つてしまふ。だが其の蟬の歌つて居る枝のかげに身を隠して彼の五個の眼鏡の視野に入らぬやうにしよう。そして其處で喋つたり、口笛を吹いたり、手を打ち鳴らしたり、石と石とを叩き合はせたりしてみよう。之れが若し一羽の小鳥であつたならばそれ程にしくとも、諸君の姿が見えなくとも、早速歌をやめて夢中になつて飛んで逃げでしまふであらう。所が、蟬は平然として何事も起らなかつたかのやうに鳴き続けるのである。

此の問題に就いて私の行つた實驗中、最も記憶に値する一例だけを茲に語るとしよう。

私は村の大砲を借りた。と云ふのは鎮守祭の日に鳴らす小型の大砲を借りたのである。砲手は蟬の爲めに之れに装薬して私の所へ来て之れを打ち放す事をとて面白がつた。大砲は二つあつて、一番盛な祭の際のやうに火薬をうんと詰め込んであつた。どんな政治家が選舉演説に地方廻りをしたつて之れ程の火薬をもつて敬意を表された事はない。そこで硝子の毀れないやうに窓は皆開け放された。此の二つの爆音器は私の門口の鈴懸の樹の根本に置かれた。之れを隠蔽すべき何等の處置も取つて居ない。上の方の枝で歌つて居る蟬たちには下の方で行はれる事は見える虞れがないのである。

我々聴衆は六名である。比較的平靜な一時を待つ。歌手の數並に歌の強さ及びリズムを我々銘々に確める。そして我々は今や此の空中オーケストラ中に如何なる變化が起らんとするかを聞き取らんが爲めに耳を張つて身構える。砲が轟く。まるで雷のやうに……

所が上の方では一向平氣である。演奏者の數も同じ、リズムも同じ、音の強さも同じである。我々六名の立證は全然一致する、此の強大な爆發も蟬の歌に少しの變化をも與えなかつたと。第二の砲をもつてしても結果は同じであつた。

大砲の音にも少しも驚かず、少しも亂れぬ此の頑固なオーケストラから何と結論しなければならぬか。蟬は聲であると結論しようか。私には其處まで大膽に云ひ切る勇氣はない。けれども若し誰か

もつと大膽な人があつてさうだと斷言したにしても、私は如何なる理由を擧げて之れを反駁すべきかを知らないのである。少くとも私は蟬の耳の遠い事、「聲の高聲」と云ふあの有名な文句を蟬に適用し得る事を認めざるを得ないであらう。

小徑の石ころにとまつて、翅の青い「バツタ」が好い氣持に日に酔うて後肢の太腿で翅鞘のぎざぎざした縁をこする時、緑色の雨蛙があのカカン蟬と同じやうに風をひいて灌木の葉簇の中で咽喉を膨らませ、今や驟雨來ると云ふ際に之れをふくらませて音袋とする時、彼等は何れも不在の妻を呼んで居るのであらうか。決してさうではない。前者の弓の運動はやつと聞こえるか聞こえぬ程のきい／＼聲を出すに過ぎず、後者の大きな咽喉聲は徒らに空中に消えて行く。戀ふる妻は駆けつけて來ないのである。

昆虫は燃ゆる想ひを打ちあけるのにあのやうに騒がしく心情を吐露したり、饒舌な告白をしたりする必要があるのであらうか。まあ幾千幾萬と云ふ大多數のものを見るがよい。彼等は無言の裡に兩性相接して居るではないか。私はキリギリスのヴァイオリン、雨蛙の風笛^{ホルン}、カカン蟬のシンバルをもつて、單に各種の動物がそれ／＼の方法をもつて稱える所のあの宇宙的な生の歡喜を表示する手段であると見るのである。

若し誰かが蟬が彼等の騒がしい器官を動すのは何も其の音に頓着のあるわけではなく、たゞ自己の

生きて居る事を感じる喜びの爲めであつて、我々が満足に思ふ時に両手をすり合はせるのと少しも違はないと斷言した所で私は別にそれを怪しからん事だとは思はない。たゞそれ以外に、彼等の演奏に無言の雌の興味を惹かうと云ふ二次的の目的があると云ふ事は未だ實證されては居ないけれども、随分ありさうな事であり且つ自然な事である。

一七

蟬——産卵——孵化

普通の蟬は細い枯枝に卵を産みつける。レオミユールは調べてみて、産卵してある枝は皆桑の枝であると云つた。之れはアヴィニヨン附近で採集を託された人が種々の木の枝を探してみなかつた證據である。私が調べてみると、桑の木他に桃、櫻、柳、日本の木蠟樹、其の他の木がある。しかしそれ等は寧ろ稀である。蟬にはなるべく麥藁位の太さから鉛筆位の太さまでの、木質層の薄い、髓の豊富な細枝が必要なのである。これ等の條件さへ備はつて居れば、何の木でも構はないのである。産卵期の蟬によつて利用される種々な支枝の目録を作らうとしたならば、此の土地のあらゆる半木質植物を列挙しなければなるまい。それ故蟬の利用する種々な場所を示す爲めに其の中の若干のみを註として挙げるに止めて置く。(註)

註 私には次の諸木で蟬の卵を採集した。

スバルティウム・ユンケウム(Spartium junceum) アスフォデルス・ケラシフホヌス(Asphodelus cerasiferus)

リナリア・ストリアタ(Linaria striata) カルミンタ・ネヤマ(Calaminta nepeta) ヨネシフホネクイア

キトフンナキ (Hirschfeldia adpressa)、^{ノンドリラ・ユンケア (Chondrilla juncea)、アリウム・ボリアントウム (Allium polyanthum)、^{アステリスクス・スピノスス (Asteriscus spinosus) 等。}}

300

産卵してある小枝は地に横はつて居る事がない、多少に拘はらず垂直に近い位置にある。一番多いのが天然の場所にある場合で、時とするともとの木から離れて居る事もあるけれども、其の時でもやはり偶然にも突つ立つて居る。卵全體を受け容れられるやうな真直な滑らかな長い枝が殊に好まれる。私の收穫中一番よいのはスバルテイウム・ユンケウムの小枝で行はれる、これは麥藁に似て髓が一杯に詰つて居る。それから殊にアスフォデルス・ケラシフェルスケラシフェルスの長い莖がよい。之れは小枝に分れる前に一メートル近くも真直に突つ立つて居る。

原則として此の支柱は、其の種類ケラシフェルスの如何を問はず、枯れて完全に乾いてゐなければならぬ。しかし私のノートには未だ生きて緑葉と満開の花とをつけて居る莖に卵を生みつけてある若干の例を書きとめてある。尤も斯うした極く例外的の場合には莖其のものが可なりに乾燥して居るのである。(註)

註 カラミンタ・ネベタ、ヘルシユフェルデア・アドブレツサ

蟬の仕事と云えば、針の先を上から下へと斜に刺し込んで木質纖維を引き裂き、之れを外方に押し出して短い突起を作る。さうした搔傷を幾つも並べたやうなものである。其の原因を知らずしてこれ等の點々を見た者は先づ第一に、これは何か隠花植物か核菌類が膨らんで来て、其の半分ばかり頭を

出して来た瓶状果が上皮を押し破つたのだと思ふ。

若し其の莖が規則的でないとか、或はまた何疋もの蟬が後から後から同一點に産卵したとかすると、搔傷の分布が滅茶々々になる。どう見ても目移りがして、其の順序を辿り一疋の蟬の仕事のあとを見定める事が出来ない。たゞ一つ不變の特徴がある。それは搔き起こされた木質片の斜な方向であつて、これは蟬が常に真直な位置で仕事をして其の道具を小枝の縦の方向に上から下に突つ込む事を示すものである。

莖が規則正しく且つ滑らかで適當な長さを有する時は、點々はほど等距離を保ち殆ど直線をはげれない。其の数は一定して居ない。母虫が産卵の途中を邪魔されて他處へ産卵續行に行つた場合には可なり少ない。しかし其の一系列の傷跡が卵の全數を示して居る場合には三四十前後である。刺傷の數が同じでも一系列の長さは一定して居ない。之れを幾つかの實例に徴するに、三十傷の一系列が縦溝のある野麻で二十八センチメートル、コンドリユーで三十センチメートル、シヤグマユリで僅に十二センチメートルである。

これ等の長さの相違は支柱の性質によるのだと想像してはいけない。逆の事實がいくらでもある。シヤグマユリは右の例では切り込みの最も接近して居る例を示して居るが、他の場合には其の最も遠離して居る例を示す事もある。これ等の點の距離は到底説明を許さないさまじい事情によつて決定

301

される。殊に母虫の氣紛々れが之れを左右するので、母虫は此處に産卵を集中するかと思ふと、彼處に少し産むと云ふ風に勝手な事をやつて居る。私の測定によると一つの孔から次の孔への距離は平均八乃至十ミリメートルである。

これ等の搔傷の一つ一つは通常莖の髓部に穿たれて居る一つの斜室の入口である。此の入口には何の戸もない、たゞ若干の木質繊維の束があるが、之れは産卵の際に押しつけられ、産卵螿の双齒の鋸を引き抜いてしまつた時にまた集まつて來たものである。精々場合によつては此の柵の繊維の間に蛋白質のニスの乾いたやうな極く薄いきらくする膜を見る事もあるが、それとて常にある事ではない。之れは何か卵にくつついて來たか或は又、双刃の穿孔鏝の運動を容易ならしめる爲めの蛋白様の液の何でもない跡に過ぎないのではなからうか。

搔傷の直ぐ下に小房があるが、極く小さな溝で、前の小房の入口と其の入口との間の長さを殆ど全部占めて居る。時とすると間の仕切りがなくて、上層は下層と結合し、卵は數多の入口から挿入されたに拘はらず、一本の長い糸につながつて居る事さえある。だが一番多いのは小房が一つ一つ別々になつて居る場合である。

小房の内容も亦非常に區々である。一つの小房に對して私は六卵から十五卵までを數えて居る。平均は十卵である。一回の完全な産卵による小房の數が三十乃至四十であるからして、蟬には三百乃至

四百の胚種の準備のある事が分る。レオミュールも卵巢を調べて同様の數字を見出して居る。

實に立派な家族で、これならば随分危ない死滅の機會に對しても頭數でもつて對抗することが出来る。成熟した蟬が何か他の昆虫よりも一層危険に曝らされて居ようとは思はれない。眼はよく働かし、急に飛び立つ事も出来るし、飛ぶのも速い。其の住居は高い所にあるので芝生地の追刺どもを心配しないでもない。尤も雀は蟬が大好きらしい。時々、すつかり計畫を立てて置いて附近の屋根から鈴懸目にかけてまつしぐらに飛んで來て、驚いて悲鳴を擧げる此の歌姫をさらつて行く。嘴の先で左右からこつ／＼と二た突き三突き、大切に刻む。巢の雑達の御馳走だ。だが雀は何度手ぶらで歸る事だらう。相手は襲撃を豫知して攻撃者に小便の目潰しをくれて逃げてしまふ。否、決して雀の故に已むを得ず蟬がこんなに多くの子を産むのではない。危険は他にあるのである。其の危険が孵化の際にも又産卵の際にも如何に恐ろしいものであるかは後に述べる。

地を出でてから二三週間、即ち、七月の半頃に蟬は其の卵の始末をする。産卵状態をみる爲めに、偶然の好機會をあてにせずして、私は成功確實と思はれる若干の處置を施したのであつた。枯れたアスフォデルは此の昆虫の最も好む支柱である。從來の觀察で私はそれを知つて居た。また此の植物は莖が長く滑かなので最もよく私の計畫に適して居るに違いない。所で、私が此處に住むやうになつた最初の二三年間に、私は垣の薊を抜き捨て其の代りにこれ程取り扱ひ悪くない他の土着植物を植ゑた。

アスフォデルが其の新しく植ゑた植物の中にあつたのである。これこそ正に今日私に必要なものである。そこで私は前年の枯れ莖を其のまゝにして置いて、適當の季節になると毎日之れを見廻つた。

待つ間は永くない。七月も半ばになると最ういくらでも蟬がアスフォデルにとまつて産卵をして居る。産婦は何時も獨りである。一疋一莖ときまつて居て、競争者によつて此のデリケートな種痘の邪魔をされるやうな心配は少しもない。最初の占領者が行つてしまつたあとならば他のが來てもかまはず、其の次に更に他のが來てもかまはない。すべての蟬に對して餘地があり、しかも充分にある。しかしどれもこれも自分の番には獨りでゐたがる。のみならず彼女等の間には決していさかひがない。すべてが此の上なく平和に運んで行く。若し一疋の母虫がふとやつて來て、場所が既に占められて居るのを見ると、彼女は早速自分の思ひ違ひを悟つて他の場所を探しに飛んで行つてしまふ。

産婦は何時も頭を上にして居る。尤も之れは蟬がどんな場合にでもとる姿勢である。彼女は極く側近くから仔細に眺められても、虫眼鏡で覗かれても平氣で居る。それほど仕事に熱中して居るのである。長さ約一センチメートルの産卵螿は全部斜に莖に刺し込まれて居る。此の穿孔は大して困難な操作を必要としないらしい。それ程道具が完全なのである。見て居ると蟬は少しく身體をふるはせ、腹端を頻繁にびく／＼と擴げたり縮めたりする。それだけの事である。交互に働く二重鱧の錐が極く靜かな殆ど目に見えぬ程の運動をしながら木の中にさゝつて姿を消す。産卵の間は何も變つた事がない。

昆虫はちつとして居る。産卵螿の最初のひと刺しから産卵の終りまでに約十分の時が経つ。

さうすると産卵螿は曲がらないやうに整然と緩りと引き抜かれる。探り孔は木質纖維の接近によつて自然に閉ざされる。そして蟬はもう少し上の方へ眞直に攀ぢ登り、ほど彼の道具の長さに等しい距離に達すると、其處でまた一つの穴を穿つて新しい小房に十程の卵を産みつける。かうして産卵は下から上へと段々に行はれる。

これ等の事實が分ると、此の仕事が如何に巧みに手配りされて居るかが分る。小房の入口たる切り込みはほど等距離である。これは其の度毎に蟬がほど彼の産卵螿に相當する同じ距離だけ上進するからである。飛ぶのは非常に速いが、歩くとなるとまた非常にのろい。莊重なと云ひたい迄にゆつたりとした足取りで、日の一層よく當つて居る附近に移つて行く、それが生樹の枝で水を飲んで居る際の蟬の動作の全部である。産卵を行ふ枯枝の上でも彼女は其の四角張つた習慣を捨てないばかりか、仕事が必要だけに一層それを誇張しさへもする。彼女は出来るだけ身體を動かさないやうにし、隣り合つた二つの小房が重なり合はない程度に止めて置く。上昇歩度は消息子の長さで大體定められる。

のみならず、切込みは其の数の少ない時には一直線上に並べられる。實際、何處も同じやうな特質を有つた一本の莖の上では右なり左なりに斜行する理由は少しもないのである。太陽を熱愛する彼女は一番日當りの好い場所を選んだのである。此の上なく楽しい熱浴を背に受けて居る限り此の快い場

所を捨てて日光の直射して来ない別の場所に移るなどと云ふ事は間違つてもしないのである。

しかし、同一支枝上で産卵を完全に終る場合には長い時間を要する。一房十分として、時たま見かけたやうに一例四十房を算する場合には六七時間の時がある事になる。それで蟬がまだ仕事を終らない中に著しく日影が移る事がある。さうした場合には直線は彎曲して螺旋形の弧を描いて居る。産婦は日の廻るにつれて莖の周りを廻るのである、そして其の針痕の線は圓筒形日時計の針影の動きの跡を想はせる。

蟬が其の母性的な仕事に没頭して居る間に、極く小さな一疋の蠅が、之れ又一本の消息子を持つて居て、産みつけられた蟬の卵を次ぎから次ぎへと一生懸命に殺して居る事が往々ある。レオミュールも之れを知つて居た。殆どどの枝を調べてみても其の幼虫が居たので、彼は研究の初期には一つの思ひ違いをしたものである。しかし彼は此の大膽な暴漢が實地に行動して居る所は見事もなく、また見る事も出来なかつたのである。それは一種のカルシディット (Chalcidie) であつて長さ四五ミリメートル、全身眞黒で其の節だらけな觸角は末端が少しく太くなつて居る。鞘を拂つた産卵蟻が腹の下部の中頃に體軸と直角をなして突つ立つて居る。恰度或る種の蜂類に危害を加えるあのルーコスビー (Leucospia) の場合と同様である。私はうっかりして之れを捕えなかつたので分類學者等が之れに何と云ふ名稱を授けて居るかを知らない。尤も此の一寸法師の蟬殺しが既に目録に擧がつて居るかどう

かは分らないが。

それよりも私のよく知つて居る事は、蟬に足一本かけられただけでも壓し潰されてしまひさうな彼が此の巨人のすぐ傍で、平然として無謀とも不注意とも云ひやうのない大膽さを發揮して居る事である。私は其奴が三疋までも寄つてたかつて哀れな産婦を搾取して居るのを見た。彼等は蟬の後をついて廻して其の消息子を働かせ、或は適當の時機を待つて居る。

蟬が一つの小房に産卵して次ぎの小房を穿たうとして少しく上方に登ると、惡漢の一人が今蟬の捨てて去つた場所に駆けつける。そして殆ど、此の巨人の爪の下にあると云つてもよい其の場所でも少しも恐るゝ氣色なく、まるで自分の家で立派な仕事でもして居るかのやうに彼の消息子の鞘を拂ひ、之れを卵の柱の中に突つ込む。尤も切口には切れた纖維がさゝくれ立つて居るので、之れを避けて何處か側面の割目から突込むのである。此の道具の働きは緩慢だが、それは木に殆ど傷がなくて固いからである。そこで蟬は上の階に産卵する暇が充分あるわけである。

蟬が産卵を終るや否や、今まで彼のうしろでゆつくりと仕事をして居た小蠅の一疋が之れに代つて其の殺虫的な種痘をやりに来る。母虫が卵巢をすつかり空にして飛び去る時分には、彼女の小房の大部分は斯うして其の内容を死滅させる所の他虫の卵を注入されて居るのである。やがて一疋の小さな裸虫が大急ぎで孵化して、一疋一室の割合で、約一ダースの半熟玉子に食ひ肥つて蟬の子に取つて

代る。

此の様子でみると幾世紀に亘る経験もお前に何事も教えなかつたのだな、哀れな産婦よ！ お前の非常によい眼をもつてして、これ等の怖ろしい地質調査人どもが悪事を企みつゝお前の周囲を飛び廻るのを見のがす筈はない。お前は彼等を見、彼等をお前の踵に感じ、しかもお前は平気でされるまゝになつて居る。なりばかり馬鹿大きいお人好しな奴、振り返つたらいいではないか。あの一寸法師どもを踏み潰してやれよ。けれどもお前は決してそんな事はしないだらう。お前には本能を變える事が出来ないのだ、母としてのお前の憐みを軽減する爲めにすらも。

普通の蟬の卵は象牙のやうな光澤を帯びて白い。兩端が圓錐形で細長くて、恰度極く小さな機織梭のやうである。長さは二ミリメートル半、幅は半ミリメートルである。一列に並んで互に重なり合つて居る。滿那蟬の卵はこれよりも少しく小形で、整然と集まつて居る所は顯微鏡的葉卷束と云つた具合である。單に前者の卵のみに就いて語るとしよう。其の物語は要するに他のすべての卵の物語になるのだから。

九月も未だ終らない中に象牙の光澤ある白色は消えて小麦のやうな黄金色に代る。十月初めに、其の前方に二つの栗色の、圓い、非常にはつきりした小點が現はれる。これは目下形成中の小虫の目のあとである。もうまるで物を見るやうな此の二つの輝かしい眼と、圓錐形の前端との爲めに卵はまる

で錆のない魚のやうにみえる。胡桃の殻を半分に分つて水盤としたならば恰度似合ひさうな、如何にも小さな魚である。

同じ頃に庭の周囲のアスフォデルの上や附近の丘のアスフォデルの上に、近頃卵の孵化した跡が屢認められる。それは生まれたての虫が大急ぎで他の住居に引き越して行きながら門口に脱ぎ棄てて行つた古着のやうな、襤褸のやうなものである。これ等の抜け殻が何を意味するかは直きに説明する。

その間にも私は随分と熱心に捜し廻つたのであるから、相當の成績を擧げてよい筈なのだ、どうしても若蟬が巢を這ひ出す所を見る事が出来ない。私の虫小舎で飼育してみても矢張り駄目である。二年引き續いて、適當な時機に、蟬の卵を包蔵するあらゆる種類の小枝を百本程、箱に、管に、廣口瓶に採集した。どれ一つとして私があれば程見たいと思ふ蟬の生まれる所を見せてくれるものはない。

レオミュールもこれと同じ失望を経験して居る。彼は友人たちが送つてくれたものがどれもこれもどのやうに失敗に終つたか、其の巢を硝子管に入れ、ズボンのポケットに突つ込んで暖い温度を與えてやつてさへもどんなに失敗に終つたかを物語つて居る。失禮ながら先生、我々の書齋のいゝ加減な温度や、我々の股引のしみつたれた暖房器位では到底足りないのです。あの至高の刺戟が、あの太陽の接吻が必要なのである。もう身振るいする程冷え冷えとした幾朝かの後で、素晴らしい秋晴れの一日のかつとした日射しが好季節の最後のお別れに投げる、あの突然の熱が必要なのである。

さう云ふ具合に、晝の強い日射しが冷い夜と激しい對照をなす頃、私はいろ／＼と孵化の徴候を見出すのであつた。しかし私の行き方が何時も通過ぎて若い蟬は最う發つた後であつた。精々、時として、一疋の若蟬が今自分の生まれて來た莖に一本の糸でぶらさがつて、空中にもがいて居るのに出會はず位のものであつた。私はそれが蜘蛛の巢の切れはしにでも引つかゝつて居るのだらうと思つて居た。

たうとう十月二十七日、もう成功の望みなしと諦めて垣根のアスフォデルを刈り取り、蟬が卵を産みつけてある枯莖の一と抱えを私の書齋に持ち込んだ。すつかり棄ててしまふ前にもう一度すべての小房と其の内容とを調べてみるつもりだつたのである。其の朝は寒かつた。此の季節に入つて初めて燠爐に火が焚かれて居た。私は例の小さい薪束を爐前の一つの椅子の上に置いたが、別に燠の熱がこれ等の巢に及ぼす作用を試めさうなどと云ふ氣持は少しもなかつた。これから割らうとして居る莖束は此處に置いたのが一番手近だと云ふだけの理由で此の場所を選んだのだつた。

所が、私が一本の莖を割つてあちこちと虫眼鏡で眺めて居る間に、私のもうすつかり斷念して居た孵化が俄に私の側で始まつたのである。私の薪束に虫がうよ／＼し出す。若い幼虫が幾ダースも幾ダースも彼等の小房から湧き出して來る。其の数の多い事は觀察者としての私の野心を十分満足させるに足る程であつた。卵は恰度よく成熟して居た。強いしみ込むやうな爐の燠が野外の太陽に代つて仕

事をしたのである。此の意外の儲け物を大急ぎで利用するとしよう。

卵房の入口の、引裂かれた纖維の間に圓錐形をした一つの微虫が、二つの大きな黒點のやうな眼をして姿を現はす。これは外觀から云ふと、全然、先刻も云つた通りの極く小さな魚の前部に似た卵の前部なのである。まるで卵が動き出して桶の底から其の小さな廊下の口まで登つて來たかのやうである。卵が狭い溝の中を動き胚種が歩くとは。しかしそんな事は有り得ない事であり、曾て見た事がない。何かこれは私の目の迷ひであらう。莖を割つてみた。すると此の神祕の正體が分つた。本物の卵は幾分其の整頓を擾されては居るが、場所は變つて居ない。それ等は空なたゞの透明な袋になつて、前端が大きく裂けて居る。これからあの奇妙な生物が出たのである。其の最も顯著な特徴を擧げると次の通りである。

全體の形と云ひ、頭の格好と云ひ、また黒い大きな眼と云ひ、此の極微動物は卵よりも、なほ一層極く小さな魚の外觀を有して居る。しかも腹鰭に似たものがあるのでなほの事そんな風に見える。此の權のやうなものは前肢と一緒に一つの特別な鞘に收められて、後方に伏し、互に寄り添うて一直線に張られて居るのである。其の微弱な運動が卵囊脱出及びそれよりも一層面倒な木質溝脱出に役立つに違いない。此の艇を身體から少しく離したり、再び之れに近づけたりすると、先端の鈎が既に丈夫になつて居るので、足掛りが出來て虫は前進する事が出來るのである。他の四つの肢は共通の袋に包

まれて居て絶対に運動不能である。觸角も亦同様で虫眼鏡をもつてようやく見分け得る程である。要するに卵から出て来た生體は一個の船形小體であつて、二本の前肢が相寄つて作る所の一本の樞が腹面を後方に突出して居るのである。體節は極めて明瞭で、殊に腹部がさうである、且つ又全體は完全に滑かで一本の毛もない。

此の最初の蟬の状態に何と云ふ名を與えたものであらうか。今までに想像された事もない如何にも奇妙な、如何にも意外な状態である。希臘語をつきまぜて何かいかめしい名でも鍛え上げねばなるまいか。だが私はそんな事はしない。野蠻な術語は科學に取つてたゞ邪魔つけない荆棘に過ぎない事を確信するからである。私は極く簡單に初期幼虫 (larve primaire) と云はう。メロイド、ルーコスビ及びアントラクスに就いてもさう云つたのだから。

蟬の初期幼虫の形は非常に脱出に好都合である。孵化の行はれる溝は非常に狭くてやつと一疋の脱出者の通る餘地しかない。加ふるに卵は一列に並んで居ると云つても、頭と尻とがくつついて居るわけではなくて、一部分重なり合つて居るのである。後からやつて来た極微動物は、既に孵化してしまつた前の卵が其の場に脱ぎ捨てて行つた抜け殻の間を潜り抜けて行かなければならない。廊下の狭さに加えて空の殻が邪魔をして居るのである。

斯う云ふ状況であるから、幼虫は後刻其の假の鞘を破つてしまつた時のやうな状態では、此の七面

倒な隘路を踏す事が出来ないのである。邪魔な觸角、體軸から遠く擡げられた長い肢、途中そこいらへ引つかゝる先の曲つた鶴嘴、そんなものはすべて迅速な脱出の運動を妨げる。一房の卵は殆ど同時に孵化する。初めに生れたものは出来るだけ早く引き越して後のものに道をあけてやらなければならぬ。滑らかで、突起がなくて、楔か何かのやうに刺り込み、すり抜けて行く船形が必要なのである。それ故、種々な附屬物を一つの共通の鞘に収めてびつたりと身體にくつつけ、身體全部を一つの梭形となし、これにいくらかの可動性を有する一本の樞をとりつけた初期幼虫は、困難な通路を通じて日向に出る事をその任務として居るのである。

此の任務の期間は短い。事實此處にこれ等移住者の一つが大きな眼をした其の頭を現はし、切り込みの裂かれた纖維を押し上げるとする。彼は虫眼鏡で見てさへもはつきりとは見定め得ぬほどの極めて緩い速度で動きながら益々突起して来る。少くとも半時間経つと船形の物體が其の姿を全部現はすが、しかしその後端は出口に引き留められて居る。

早速脱出着が裂けて此の極微動物は前から後へと皮を脱ぐ。さうなつて初めて普通の幼虫の態を備えるが、レオミュールはこれだけしか知らなかつたのである。脱ぎ捨てられた抜け殻は一種の吊糸をなし、其の末端が小皿形に開いて居て、其處に幼虫の腹端が嵌め込まれて居る。幼虫は地面に落ちる前にゆつくりと日光浴をして身體を鍛え、手足を動かし、力試しをしながら彼の安全紐の端でゆら

りゆらりと揺られて居るのである。

レオレニールは之れを小蚕と云つて居るが、此の小蚕は最初は眞白で、それから琥珀色になる。これが地にあなを掘る本當の幼虫の姿なのである。觸角は可なり長く、自由に動いて居る。肢は其の關節を働かせて居る。前肢は其の鉤を開いたり閉ぢたりするが比較的丈夫な鉤である。尻の先でぶら下つて、一寸の風にも揺れながら、地上への翻筋斗を空中で準備して居る此の極く小さな體操の先生の様子ほど不思議な光景を私は殆ど知らない。ぶら下つて居る時間は不定で、あるものは約三十分で地に落ちるし、或るものは何時間も其の殻斗に尻を突つ込で居るし、中には翌日まで待つて居るものすらある。

早かれ晩かれ、此の微虫が落ちてしまふと後には、初期幼虫の抜け殻たる吊糸が残る。一巢の卵が皆瞬つて出てしまつた後の小房の入口には、斯うして短い細い振れて皺くちやになつた糸の束が干からびた蛋白のやうな風をして載つて居る。どれも其の端が殻斗のやうに口を開けて居る。まことにデリケートな、まことにはかない遺物で、一寸でも觸るとこなごなになつてしまふ。間もなくほんの一寸した風に吹き散らされてしまふのである。

幼虫に戻つてみよう。幾分の遅速はあるにしても何れも或は偶發的事故により、或は自分から地面に落ちてしまふ。蚕のやうに小さい此の虫は、その生まれたばかりの柔い肉が荒い土に觸れるのを、

彼の吊糸によつて防いで居たのである。ふわ／＼な羽根蒲團のやうな空氣に包まれて身體もしつかりと丈夫になつた。今や彼は浮世の荒浪に飛び込むのである。

彼の前途に幾多の危険の横はつて居るのが私には臆氣ながら見える。何でもない一と吹き風の風にも此の微分子は或は到底手の下しやうもない巖の上に吹き上げられ、或は少しばかりの水が濺んで居る轍の跡の大海に吹き込まれるかも知れない。また、一木一草の影もない饑餓の境たる砂地もあり、掘り起すには餘りに固い粘土質の土地もある。斯うした致命的な地域は到る處に見出されるし、それに又此の十月も末になると、風ばかり吹いて最も厭な季節になるので、これ等微分子を吹き散らす風も亦頻繁に吹くのである。

此の弱々しい虫には非常に軟かで、掘り易くて直ぐに身を隠す事の出来るやうな土が必要なのである。寒い日が近づいて來、霜や氷もやがて來ようとして居る。しばらくの間地面をうろついて居る事は非常に危険である。一刻も早く地下に下らなければならぬ。しかも深く潜り込まねばならぬ。此の唯一の、否應なしの、救ひの條件が多くの場合には實現されないものである。岩や、砂石や、固い粘土の上では此の蚕の小さな爪なんか何の役に立たう。小虫は適當の時機に地下の避難所を見出し得ないで斃れてしまふのである。

最初のト居がこれ程多くの危険に曝らされて居る事が、蟬の子の死亡率の高い原因である事はすべ

てが證明して居る。卵を荒らす所のあの黒い小さな寄生虫が既に、蟬の長時間に亘る多産の必要を我々に語つて居た。今度は最初の構居の困難さが、種族を適當な割合に維持するには、如何に一疋の母虫が三百乃至四百の種を蒔かねばならぬかを我々に説明して居る。蟬は法外にまびかれるので、法外に多産するのである。蟬は其の卵巢の富力をもつて無数の危険を打ち拂ふのである。

私がこれからしなければならぬ実験では、私は此の最初の構居の困難をなりとも、せめて彼から省いてやらう。私は非常にしなやかで眞黒なヒースの土を選んで之れを細かい篩でふるつた。其の色が濃いので、此の黄金色の小虫が何をして居るかを調べたいと思ふ時には容易に之れを見出す事が出来るわけであるし、其の質のしなやかさはよく彼のか弱い鶴嘴に適する筈である。私は此の土を一つの硝子の鉢の中にやんわりと積み上げ、其處に小さな一株のクチヤカウサウを植ゑ、幾粒かの麥を蒔いた。鉢の底には一つの孔もない。これはクチヤカウサウと麥の繁茂には是非とも必要なのであるけれども、さうすると囚人どもが其の孔を見つけてきつと脱走するに違いないのである。植物の方は此の水はけの悪さに惱まされるかも知れないが、少くとも斯うして置けば、私は辛抱強く虫眼鏡で探しさえすればきつとこれ等の虫を見つけた事が出来るわけである。それに私は灌溉を出来るだけ少なくして、やつと植物の枯死を妨げるだけにしよう。

萬端の設備整ひ、麥の新芽が伸び始めると私は生まれたばかりの六疋の蟬の幼虫を地面におろして

やる。瘠弱さうな虫どもは歩き廻つて可なり敏速に地床を調査する。中には鉢の内壁に攀ぢ登らうと試みるものもあるが成功しない。唯の一疋として地を掘りさうな様子がない。あまり其の様子がないので私は心配になつて、こんなに長い熱心な調査の目的は何だらうかと怪しみ出す。二時間経つてもぶら／＼歩きはやまない。

何を求めて居るのか。食糧か。私は生えかゝりの根が束になつて居る球根や、葉の切れ端や、生草の小片などを與えてみるが、何れも彼等を誘はず、彼等の足を引き留めない。明らかに彼等は地下に下るに先だつて適當な地點を選んで居るのである。私が殊更彼等の爲めに準備してやつた土の上では斯うしたたゆたひ勝ちな調査は不要である。全面悉く私が彼等から期待して居る仕事にまことによく適して居る、と私には思はれるのだが、どうもまだ之れでは足りないらしい。

天然の状態では、周圍一帯を歩き廻つて見る事も或は必要缺く可らざる事かも知れない。私があらゆる固い物體を除去して細かい篩にかけてやつたヒースの土の床のやうな柔い、場所はまあ稀だからである。それどころか、こんな小さな鶴嘴なんか齒も立たない様なごつ／＼の土地が多いのである。それで幼虫は適當な場所の見つかるまでにはあてもなくさまよひ、多少に拘はらず過歴をしなければならぬのである。そればかりか多くのものが無益な探査に疲れ果てて斃れる事は疑の餘地がない。それ故此の廣袤何寸四方かの一國土に探險旅行を行ふ事は若蟬の教育過程の一部をなすものなのであ

る。私の廣口硝子瓶の中の土は贅澤を極めたものであるから、そのやうな遍歴は無益なのだが、そんな事には一向お構ひなしに、仕来りの儀式通りに此の遍歴が行はれるのである。

それでも遂には此の旅人達も落ち着く。見て居ると彼等は其の前肢の鉤のやうに曲つた鶴嘴で地面を掘り始め、其處にまるで太い針の先で掘つたやうな穴を開ける。私は虫眼鏡を頼りに彼等が鶴嘴で掘つたり、實に少量の土を熊手で地面に掻き上げたりするのを見物する。二三分にして一つの井戸がぼつかりと口をあける。微虫は其處へ下りて行つて、身體を埋めて、それつきり見えなくなつてしまふ。

其の翌日私は鉢の内容を引つくり返えてみた、タチヂヤカウサウと小麦の根がしつかり張つて居て少しも崩れない。昨日の幼虫共は皆底に集まつて居る。硝子に遮ぎられて之れ以上進み得ないのである。二十四時間で彼等は約一センチメートルの厚さの土層を完全に踏えたのである。若し底の障壁がなかつたならば更に深く下つた事であらう。

途中彼等は私の植えた草の小さい根に恐らく出會つた事であらう。彼等は足を止めて之れに吸嘴を打ち込み、少しばかりの榮養分を攝つただらうか。どうもさうらしくない。空の鉢の底には若干の小根が這つて居る。六匹の捕虜の中一匹として其處に構え込んで居るものがない。多分鉢を引つくり返した時に其の振動でふるひ落してしまつたのかも知れない。

地下の彼等には根の汁以外に何の榮養分もあり得ない事は明らかである。成虫でも幼虫でも蟬は植物の汁を吸つて生きて居るのである。成虫になると枝の樹液を飲み、幼虫の時は根の樹液を吸ふ。だが如何なる際に最初の一口が吸はれるか。私には未だに分らない。前に述べた所によると生れたばかりの幼虫は、途中出會つた掛茶屋で愚圖々々して居るよりも一刻も早く深い地下に潜つて、目睫の間に迫つて居る寒さからのがれようとして居るらしい。

私はヒースの土の塊をまたもとの鉢に納め、掘り出した六疋の幼虫をもう一度其の地面に置いてみた。早速いくつかの井戸が掘られ、幼虫は其處に姿を消す。遂に鉢は私の書齋の窓の上に置かれ、其處で好いも悪いもあらゆる外氣の影響を受ける事になつた。

それから一ヶ月経つて十一月の終りにもう一度調べてみた。若蟬たちは離れ離れに土塊の底に蹲くまつて居る。彼等は根にくつついて居ない。外觀も大きさも變つて居ない。此の實驗の初めに見た通りの彼等である。たゞ前より少しく不活潑になつて居る。寒い季節の中でもまあ一番溫和な此の十一月の月中に、斯う發育が止まつて居る所を見ると、冬中少しの榮養分も攝られないのではなからうか。

若いシタリス (Sialis) と云へば、之れ亦微分子に生命を吹き込んだやうなものだが、アントフォール (Anthophor.) の廊下で卵から出るや否や重なり合つて、ちつとして、完全な斷食の中に冬の悪い季節を過ごすのである。蟬の子も大抵そんな風な生活をするのだらうと思はれる。一度霜や氷の

心配のない深い地下に潜り込んだが最後、彼等は獨り寂しく冬營にまどろみ、春を待つて附近の根に孔を穿ち、そしてはじめて食事をするのであらう。

右の種々な結果から導き出される結論を、事實の觀察によつて確證しようと思つたけれども駄目だつた。陽春四月の頃に三度私はタチヂヤカウサウの株を鉢から抜いてみた。土塊を碎き虫眼鏡で覗きながら探し廻はる。まるで一と山の藁の中に一本の針を探すやうである。やつと私の蟬の子たちが見つかつたと思ふと皆死んで居る。多分、私が此の鉢を圓い硝子蓋で蔽うてやつたに拘はらず寒さの爲めかも知れない。また多分、タチヂヤカウサウが彼等に適して居なかつたので餓ゑたのかも知れない。餘りに面倒なので此の問題の解決を斷念する。

此の種の飼育の成功には、冬の寒さを防ぐに足る廣い深い土層が必要なのであらう。私には何の根が一番好かれるのだから皆自分分らないのだから、小さな幼虫等が彼等の口に合ふものを勝手に選べるやうに、種々な植物を揃えて置いてやる必要があるであらう。これ等の條件は決して實現不可能のものではない。併し、それはよいとして少くとも一メートル立方はある龐大な土塊の中から、どうしてあの一と握りのヒースの黒土の中でさへ容易に探し出せなかつた微分子を再び見出す事が出来よう。それによつて、それ程大掛りな發掘を行つたならば、此の微小な虫を其の養ひ親たる根から振ひ落としてしまふ事は確かである。

蟬の地下生活の初期は我々の窺知し得ぬ所である。充分發育した幼虫の生活も矢張りよくは分つて居ない。野良仕事の際、少し深く地を掘れば、此の頑丈な土掘虫が鋤先に引掛つて來る事は極くありふれた事である。けれども樹液をもつて此の虫を養つて居るに違ひない所の木の根に、彼が食ひついて居る所を不意に見つけると云ふ事はまるで別問題である。彼は耕さるゝ土の振動に危険を豫知して吸嘴を引き抜いて何處かの地下道に隠れてしまふ。それで掘り出された時には最う飲む事をやめてしまつて居るのである。

しかし、耕耘は地下の平和攪亂を避け得ない爲めに地下に於ける種々な習性を我々に教え得ぬにしても、少くとも幼虫期の長さに就いては我々に教える事が出来る。二三の百姓が、三月に地を深く掘り下げの際、鋤の先で掘り出した大小すべての幼虫を私の爲めに集めて呉る事を喜んで引き受けてくれた。其の收穫は數百疋に上つた。體格の差の非常に明らかかなものを別々に集めて、全體を三組に分けた。幼虫が地を出る際に有つて居るやうな未だ充分發育して居ない翅のある大きいのと、中位のと小さいのとである。これ等の大きさの順序の一つ一つに相當して年齢が違つて居るのである。それに最近に孵化した幼虫を附け加えよう。これは私の粗野な協力者たちには當然目につかなかつた微小な虫であるが、之れで蟬の地下生活の推定年限は四ケ年となるのである。

蟬の空中生活期間は之れよりも容易に算定される。私は最初の蟬の聲を夏至時分に聞く。それから

一ヶ月の後にはオーケストラが其の最高潮に達する。中にのろまな奴は、極く稀ではあるが、九月の半頃まで貧弱な獨奏をやつて居る。之れが合奏の最後である。すべての蟬が同時に地を出るのではないから九月の歌姫が、夏至時分の歌姫と同期生でないことは明かである。此の前後兩極端の日附の間の平均を取ると約五週間となる。そこで、地下の勞働生活四ヶ年、日向の歡樂一ヶ月、之れが蟬の一生となるわけである。かうしてみると、もう成熟した蟬が狂氣のやうに凱歌を奏したからとて敢て非難するにはあたるまい。四年間、闇の中で、彼は汚ない羊皮紙の外套を着て居たのだ。四年間、鶴嘴の先で地を掘つて居たのだ。それが今泥まみれの土方が俄にしやれた服を纏うて、小鳥の羽根に劣らぬ翅を授けられて、熱に酔ひ、光に浸つて此の世にまたとない歡喜を味はつて居るのである。これ程立派に贏ち得た、しかもこれ程儂ない此の幸福を喜び稱えるには如何にシンバルを打鳴らすとも、なほその音を足れりとする事は出来まい。

蟬——獵

これも亦南部地方の虫で、興味の點から云へば少くとも蟬に匹敵しながら、名聲は遙かに之れに劣つて居る。少しもやかましく騒ぎ立てないからである。若し天が彼に假すに人氣收攬の第一條件たるシンバルを以てしたならば彼は、必ずやあの有名な歌姫の評判を蔽ひ隠したに違いない。それ程不思議なのが彼の形態であり彼の習性である。此の土地では彼を俗に祈り虫 (You Prego Dieu) と呼んで居るが其の正式の名は祈り蟬 (Mantis religiosa, Lin.) である。

科學上の術語と百姓の無邪氣な用語とが此の場合一致して、此の奇妙な虫を神託を告げる巫女にかたどり、神祕の法悦境にある女行者になぞらえて居るが、此の比喩の起源は遠い。既に希臘人は此の虫を占者、預言者 (Mantia) と呼んで居た。野人は類推に關して全く無雜作である。何處か外觀が似て居さへすればあとは想像で立派に補つてしまふ。彼等は日に灼かるゝ草原の上に様子の立派な一疋の昆虫が嚴かに上半身を起こして立つて居るのを見た。彼等は其の寛潤な薄い綠色の翅が長い麻のヴェールのやうに垂れ下つて居るのに目を止めた。彼等は其の前肢が、腕と云つてもよいやうな形を

して祈りの姿で天に向けられて居るのを見た。それだけでもう充分だった。其の後は民衆が想像で作り上げてしまったのである。斯うして太古の時代から、草叢には神託を宣ぶる巫女や、祈りを捧げる尼さんたちが澤山に住むやうになつたのである。

子供のやうに無邪気な好い人達よ、何と云ふ思ひ違ひをした事だ。あの祈りの様子は残忍な習性を隠して居るし、あの哀願するやうな腕は怖ろしい追剝道具なのである。其の手は珠数をつまぐつて居るのではなく、近くを通るものを盛殺しにしようとするので居るのである。直翅類の草食族としては到底想像する事の出来ないやうな例外として蠍は、生犠牲のみを食つて生きて居るのである。彼は平和な昆虫界の虎であり、途中に待ち伏せして生肉を買物として巻き上げる食人鬼である。若し彼に假りに充分の體力をもつてしたならば、彼の肉食慾と怖ろしいまでに完全な彼の良とは彼をして田園の恐怖たらしめ、祈り虫を悪魔的な吸血鬼と化する事であらう。

彼の殺人器を除いては蠍には何一つ恐怖の念を起こさせるものがない。すらりとした脊格好と云ひ、しやれた胴と云ひ、新緑の色彩と云ひ、紗の長い翅と云ひ、彼亦幾分の優美さをすらも備えて居るのである。大缺のやうに開いた莽猛な大腮などは有つて居ない。それどころか、啄ばむに相應しいと思はれる鋭い尖つた鼻面である。胸からぐつと抜け出したしなやかな首なお蔭で、頭部は旋轉したり、左右に振り向いたり、伏したり、仰向いたりする事が出来る。昆虫界では獨り蠍だけが視線を

導く事が出来る。彼は見廻はして調べる。顔に表情があると云つてもよい程である。

甚だ平和的に見える身體の全體と、著しい對照を爲すものは兇器としての彼の前肢であつて、捕獲肢と云ふ形容は如何にもよく當つて居る。腰關節部の長さとは稀に見る所であるが、其の役目は狼狽を前方に投げ出すのにある。此の良は犠牲を待つてなどは居ず自ら進んで之れを捕えるのである。少しばかりの裝飾が此の良を美化して居る。腰の着け根の内面が白い眼状斑のある美しい黒點で飾られて居り、更に幾並びかの細かい眞珠が此の裝飾を補つて居る。

大腿は之れよりも更に長く、紡錘を押し潰したやうな形で、下面前半分に二た並びの鋭い針がある。内側の一と並びは一ダース程の針で黒く長いのと、綠色で短いのが交互に並んで居る。かうして長さの違つたのが交互に並んで居る事は噛み合せの點を増して武器の効力を助長するものである。外側の一と並びはこれよりは簡單で四本の齒しか無い。最後にあらゆる針の中で一番長い三本の針が、此の二た並びの針の後方に突つ立つて居る。要するに大腿は平行齒列の鋸であつて、此の二齒列間に一つの溝があり其處へ折り曲げた脚が疊み込まれるのである。

脚は大腿との關節部で自在に動くが、之れまた一個の鋸で、同様に二列の齒がある、其の齒は大腿の齒よりも小さく、數多く、一段と密集して居る。その末端には一個の丈夫な鈎があるが、其の尖端は極上の針と鋭さを競ひ、且つ此の鈎の下面には溝があつて、二枚刃の彎曲した小刀若しくは小鉞の

やうである。

此の銚は突き刺したり引き裂いたりするのに此の上なく完全な道具で私に痛い思出を残して居る。何度、虫狩りの最中に、今捕えた此の虫に爪を立てられ、而も両手の自由がきかない爲めに、他人の力を借りて此の執拗な捕虜からのがれなければならなかつた。突き立てられた鉤をあらかじめ抜かず、無理に之れを引き離さうとしようものなら、薔薇の棘の様な搔傷を拵らえられるに違いない。我國の昆虫としてこれ程扱ひ悪いものはない。此奴は其の小鉈の先で引掻き、其の棘を突き立て、其の萬力で締めつけて殆ど防禦の餘地無からしめる。それでもなほ強ひて争つて、生身の指先を放すまいとしたら、勢ひ拇指に力を加えなければならず、さうすれば喧嘩はお終ひにはなるが虫は潰れてしまふ。休息状態では良は胸に疊まれて居て見た所別に害をしさうでもない。これが此の虫の祈りの姿である。しかし、何か獲物が通りかゝると此の祈りの姿勢は忽ち一變して、此の三段になつた長い殺人器が俄に繰り出され、其の端の投鉤が遠く飛んで銚のやうにさゝり、後戻りし、二枚の鋸で捕虜を挟んで連れて来る。萬力は恰度二の腕が前腕の方に疊まれると同様な運動で疊まれる。さうしたら最う往生である。バツタでも、キリギリスでも、それよりもつと強い他の虫でも、一度此の四列の針の齒車に取つかまつたが最後まで手も足も出ない。絶望的に身を藻掻かうが、暴れようが此の怖ろしい機械は最う放しはしないのである。

彼の習性を系統的に研究する事は、野放しの状態では到底不可能なので是非とも家で飼育してみなければならぬ。此の試みには少しの困難も伴はない。蟻螂は圓い鐘形の籠の中に入れても一向平氣である。美味しいものを食はせて貰ひさへすればよいのである。精選した食料品を毎日新しいのと取り更えてやらう。さうすれば望郷の念に惱まされる事は殆どないのである。

私は私の捕虜を容れる虫小舎としては十個程の金網の鐘形籠を使用する。食卓で蠅除けに用ゐるのと同じ物である。各鐘形籠は砂を盛つた一つの井の上に置かれる。枯れたタチヂヤカウサウの一と株と、後に至つて産卵の行はるべき一枚の平石、それが造作の全部である。これ等の小舎は殆ど終日、日の當つて居る私の昆虫研究所の大机の上に並べられる。そして其處へ私の捕虜を入れてやるのであるが、或るものは單獨に、或る者は一組にして入れる。

八月も下旬になると道端の萎れた草や、荊棘の中にぼつ／＼と蟻螂の成虫を見かける。雌は最う大きな腹をして日増しに其の数がふえて行く。之れに反して、ひよろ／＼な彼女等の夫たちは可なりにな数が少なく、時とすると私の夫婦ものを揃えて置く爲めの缺員補充に随分骨が折れた。と云ふのは虫小舎の中ではこれ等の一寸法師共が無残にも食ひつくされるからである。此の殘虐な行爲の話は後でする事として、先づ雌の事を話すとしよう。

これは實に大食ひで、數ヶ月間も養はなければならぬ場合には却々樂ではない。殆ど毎日食料品

を更えてやらなければならぬ。しかも大部分は一寸味はつてみただけでこんな物が食へるものかと云ふ風に捨ててしまふ。故郷の荊棘上では蠶螂もつと儉約家なのだらうと私は信じた。其處では獲物が豊富でないので捕まえたが最後徹底的に利用する。ところが私の虫小舎では濫費して居るのである。往々二た口三口やると、もうそれつきりで其の立派な御馳走を棄ててしまふ。どうもかうして囚はれの身のうさはらして居るらしい。

斯うした食事の贅澤を叶えてやる爲めに私は若干の助手の力を借りなければならぬ。近所の暇な子供たち二三人が麵麩片と一と切れの水瓜に釣られ朝晩附近の芝つ原へ行つて、目簾や葦の切れつ端に生きたまゝのバツタやキリギリスをつめ込んで来てくれる。私は私で、虫網を手に毎日庭の垣根を一と廻りして何か上等の獲物を、私の寄宿人たちに御馳走してやらうとする。

此の選り抜きの品は蠶螂にどれ程の膽力と體力とがあるかを知る用に供する。其の中に算えられるのは先づ灰色の大バツタ (*Pachytylus cinerascens* Fab.)。これは容積に於てこれを食ふべきものを凌駕して居る。額白デクチック (*Decique*) は強い大腮を有つて居るから指に氣をつけないといけぬ。奇妙なトリユクサル (*Truxale*) はピラミッド形の僧帽を冠り、薄荷畑のエフィビシール (*Ephipigere*) は其のシンバルを軋らせるが、其のでぶくの腹の先には劍がある。これ等一組の物騒な獲物に加えるに二つの怖ろしく醜惡な奴をもつてしよう。それは此の土地の蜘蛛の中で一番大きい二種の蜘蛛

で、其の一たるヘベル・ソアイホーズ (*Epeire Soyense*) は腹部が圓盤状で花模様の縁取りがあり、一法銀貨程の大きさがある。もう一つのヘベル・デアデム (*Epeire diadème*) は怖ろしく毛深く且つ腹が大きい。

野に在る蠶螂は斯う云ふ敵を攻撃するに違ひない。何しろ彼が私の鐘形籠の中で何とでも勇敢に戦を交える所を見ると、それを疑ふ事が出来ない。彼は叢の中に待ち伏せして居て、偶然の意外な大獲物の美味い汁を吸ふに違ひない。私の金網の中で私が惜しげなく興える立派な御馳走を頂戴するやうに。しかし斯うした大掛りな獵は、非常に危険なので、決して其の場限りの思ひつきでやれるものではない。彼の日常茶飯事の一として行はれて居るに違ひない。しかしかうした獵は稀であるらしい。機會がないのである。そして蠶螂は多分これまことに遺憾として居る事であらう。

あらゆる種類のバツタ、蝶、蜻蛉、大蠅、蜜蜂及び其の他の中位の捕獲物、それが通例彼の捕獲肢の中に見出される所のものである。それは兎に角、私の虫小舎では此の大膽不敵な獵師はどんな物が出ようと決して尻ごみをしない。灰色バツタにせよ、デクチックにせよ、エペールにせよ、トリユクサルにせよ晩かれ早かれ銚を打ち込まれ、銚で押さえつけられて美味さうに嚼ぢられてしまふ。これは正に語る價值のある事である。

大きなバツタが迂濶にも鐘形籠の金網を傳つて近づいて來るのをみると、蠶螂はぶるつと身を振る

はせて突然怖ろしい姿勢を取る。電撃だつてこれ以上迅速な作用を生じはしまい。其の變化が如何にも急激であり、其の擬容が如何にも怖ろしいので新米の観察者はたちまち躊躇し、何か自分の知らない危険があるのではないかと不安を感じて、手を引つ込めてしまふ。私などは随分古なじみではあるが、それでもぼんやり考へ事でもして居ようものならば相當驚かされる。

何しろ案山子のやうなものが、發條仕掛でびつくり箱の中から飛び出す怪物のやうなものが、不意に眼の前に突つ立つのだから。

翅鞘は開いて兩側に斜に撥ね上げ、翅は一杯に擴げて平行帆のやうに立て、大きな兜の前立のやうに脊上高くそり立てる。腹端は先づ渦巻形に反り上げ、次で下ろし、そして伸ばすが其の時に之れを激動させて一種の息のやうな、プフー、プフーと云ふ音を立てる。七面鳥が尾を輪に擴げる時の音に似て居る。蛇が不意に驚かされた時の呼氣のやうである。

四本の後肢で傲然と構え込み、其の長い胸を殆ど垂直に保つて居る。捕獲肢は最初は左右共に曲げて胸の前で合せて居るが、一杯に開いて十字形に前方に突き出し、眞珠の數列と、中央に白點を有つた黒斑とで飾られた腋の下を露呈する。此の二ツの目状斑は一寸孔雀の尾のそれに似たもので細かい象牙のやうな凹凸がある、これは戦時の玉飾で平常は秘藏されて居る。戦



クワチクテ白頭

争の爲めに自分の容姿を怖ろしく而も立派に見せる時でなければ寶石箱から取り出さないものである。蟻螂はちつと其の奇妙な姿勢を保つたまゝ此の蝗虫を監視し、其の方向に視線を据ゑ、其の位置の變るに連れて頭を少しく旋廻する。此の擬容の目的は明らかである。蟻螂は此の強大な獲物と尋常に太刀打をしたのでは餘りにも危険なのを知つて之れを威嚇し、志氣を沮喪させ、恐怖のあまり運動不隨に陥いらしめようとするのである。

蟻螂は此の目的を達するか。デクチックの光澤ある頭蓋の下、バツタの長い面の後ろに、どう云ふ變化が起こるか何人も之れを知る事は出来ない。其の自若たる假面上には何等の感動の色も現はれない。それでもなほ此の脅かされた虫が危険に氣づいて居る事は確かである。彼は自分の前に一個の妖怪が突つ立ち上り、鉤を振り上げて今や打ち掛らうとして居るのを見、自ら死に直面して居るのを感じる。しかも彼は未だ間に合ふ中は逃げない。飛躍に秀でて居て、此の爪から遠く遁れようと欲するならばよく之れを爲し得る彼であり、太い大腿を持つた跳躍家たる彼でありながら、阿房然と其場に止まり、或は更にゆるり／＼と近づきさへもする。

小鳥はかつと開いた蛇の口の前では恐怖に身體がすくみ、其の眼に射すくめられて飛び立つ事が出来ず、ばつくりとやられてしまふと云ふ。蝗虫の振舞も亦往々にして其の通りである。今や彼は妖術者の手近にある。其の二ツの投鉤は投げられ、爪は打ち込まれ、二重の鱗は閉ざされ締めつける。可

愛さうな奴は如何に反抗しても無駄である。彼の大腿は空を嘯むに過ぎず、彼の絶望的な足蹴は空を打つに過ぎない。何とも諦めるより仕様がなない。蠍は彼の旗指物たる兩翅を疊み、普通の姿勢に戻り、そして食事が始まる。



ルサクユリト

トリュクサルやエフィビエルの攻撃の際は、獲物が灰色バツタ及びデクチック程危険でないだけに、あの妖怪的姿勢もそれ程恐ろしくなく又それ程永い間でもない。屢々投鉤を投げるだけで充分である。又エペールに對しても投鉤だけで充分で、身體を横に捕まえてしまつて、毒針などは一向問題にしない。小形のバツタは私の鐘形籠の中にあつても又自由な天地にあつても蠍の常食であるが、之れに對して威嚇手段を用ゐる事は稀で、單に手近を通る迂濶者を捕えるだけである。

それ故、蠍は捕獲すべきものが相當手剛い抵抗をする惧れのある場合には其の獲物を恐怖させ、催眠させ、もつて確實に引つたくる方法を鉤に與え得るやうな姿勢を取ることが出来るのである。彼の狼狽は志氣沮喪して防禦能力を失つた犠牲を取つて押さえて締めつける。蠍は突然妖怪のやうな態度を取つて其の獲物をむすくませるのである。

此の奇怪極まる姿勢に於ては翅が大きな役割を演ずる。翅は極めて寛濶で外縁は綠色を帯び、其の

他の部分はことごとく無色透明である。多数の脈が翅を縦に扇狀に廣がつて居る。別にもつと細い横の脈があつて右の脈と直角に交り、之れと無數の網目を作つて居る。妖怪的態度を取る場合には、兩翅は擡げられ二平行面をなして突つ立ち兩々殆ど相接する。憩える蝶の翅の様である。此の二ツの翅の間を腹の巻き上つた先端が激しく躍動する。腹と翅脈網との摩擦から一種の息のやうな音が生ずる。先刻、私が防禦的態度を取つた蛇の呼氣に喩えた音である。此の不思議な音を眞似ようと思つたならば一枚の翅をひろげて其の上面を爪で速くこすればよい。

翅は雄に取つて是非必要である。と云ふのは雄はひよろ／＼の一寸法師で一つの藪から他の藪へと交ひの爲めにさまよひ歩かなければならぬからである。彼の翅はよく發達して居て十分に飛躍する事が出来る。尤も飛躍と云つても精々我々の四五歩の距離に過ぎない。此のしみつたれは至つて小食で、極くたまさかに私の虫小舎で彼がやつつけて居るのを見ると其れは一疋の瘠せたバツタで、此の上なく安全無害な、何でも無い獲物である。これによつて見ると彼はあの妖怪的な姿勢を知らないらしい。それは彼のやうな野心のない獵師には不必要だからである。

之れに反して、卵の成熟期には途方もなく肥滿して居る雌に何の爲めに翅があるのか分らない。雌は攀ち登つたり駆けたりするけれども肥滿の爲めに身體が重くて決して飛べない。それならば何の爲めの翅か。しかもこれ程廣い翅は他に一寸類がない。

蠓の近似虫たる灰色蠓(Anelides decolor)を観察するに及んで此の疑問は更に切實さを加える。

雄は翅を有するばかりか可なりに早い飛躍をさへする。雌は卵の一杯に詰つた腹を引き摺つて居るが其の翅は減退してほんの形ばかりとなり、恰度オーヴェルニユ及びサヴォアの乾酪製造人たちが裾の短い脊廣を着たやうな格好である。枯れた芝生地や石地を離れる事の無いに違いないものに取つては、此の短い服装の方が無益な紗の裾飾よりもよく似合ふ。灰色蠓があの邪魔な帆の形ばかりしか止めて居ないのは尤もな事である。

それならばもう一つの蠓が少しも飛躍しないに拘はらず翅を保持して居り、これを誇張して居るのは過りであらうか。決してさうではない。彼は大きい獲物を狩るのである。時とする待ち伏せ中に、取り押さえるに危険な代物が現はれる事がある。之れをいきなり攻撃したのでは致命的な打撃を受けるかも知れない。先づ其處へひよつこりやつて来た奴を嚇かし脅えさせて其の抵抗を壓倒する方がよい。さうした目的で蠓は突然其の翅を幽霊の白衣の様に擴げるのである。飛ぶ事の不得手な此の大きな帆は獵具なのである。斯うした戦略は小蠓とか生まれただばかりのバツタとか云ふか弱い獲物のみを捕えて居る小さな灰色蠓には必要がない。此の二個の



灰色蠓

獵師は同じ様な習性を有ち、何れも肥満の爲めに飛ぶ事が出来ないのであるが、各自の待ち伏せに伴ふ困難さに應じて其の服装を變えて居るのである。前者は荒くれた女武者、其の翅を擴げ、之れを旗指物と振りかざして敵を威嚇し、後者は賤しい小鳥刺し、其の翅を切り縮めて裾を短に端折つたのである。數日に亘る断食のあげく極度に腹の減つて居る時には、祈り蠓は自分の身體と同じ位か或はそれよりも一層大きな灰色バツタを、餘りに硬い翅だけ残して全部平げてしまふ。こんな怪物のやうな獲物を嘔ちるにも二時間もあれば充分である。これ程の大食は珍らしい。私は一二度其の實況を目撃したが、何時も此の貪食な虫がどうしてこれ程の食糧を容れる餘地を見出すのか、内容は容器よりも小なりと云ふ公理がどうして彼の爲めに覆えされるかを不審に思つたのである。私は彼の特別の胃の力を讚嘆する。食物はたゞ通り過ぎるばかりである。たちまち消化され、溶解され、消え失せてしまふのである。

私の鏡形箱の中の常食はバツタで其の大きさと種類とは甚だ區々である。蠓が其の捕獲肢の二つの萬力で同時に押さえつけながら、其の蝗虫を嘔ちる所を見るのも興味なしとしない。細く尖つた鼻面の斯うした御馳走には如何にも不似合であるに拘はらず、バツタの身體は全部消えてなくなつてしまふ。たゞ翅は少しばかり肉のある基部だけが利用される。肢も、硬い外皮も、皆平げられる。時とすると後肢の太い大腿をまるで羊の大腿肉の様に其の柄を引つ摺んで口へ持つて行き、味ひ、嘔つ

て如何にも満足さうな様子をして居る。バツタの肥つた大腿はきつと、羊の大腿肉が我々に取つて特別の御馳走であるやうに蠅に取つては一等の御馳走なのかも知れない。

餌食の攻撃は其の首筋から始まる。銚を打ち込まれた奴の身體の中央を一方の捕獲肢で押さえて置いて、他方の捕獲肢で其の頭を押し下げて頸の上部にばつくりと口を開かせる。此の甲冑の弱點を蠅の鼻面がさぐつて相當にしつこく嚙ぢる。一つの大きな傷口が後腦部に開く。蝗虫の足蹴は静まつで、餌食はぐつたりとなつてしまふ。さうなるともう運動が一層自由になつて、此の肉食虫は思ふがまゝに其の御馳走をあさるのである。

先づ首筋を嚙ぢると云ふ此の事實は常に必ず認められる事實であるから、必ず其の存在の理由があるに違いない。一寸話が横道に外れるが茲に有益な参考材料が一つある。六月の候、私は屢々庭の垣根のラヴアンドに二種の小さな蟹蜘蛛(Thomisus onustus Walck. 及び Thomisus rotundatus Walck.)を見かける。一つは繻子のやうな白さで、肢には緑と赤の環があり、も一つは眞黒で腹に赤い輪があり中央に葉状の斑點がある。彼等は優美な蜘蛛で、蟹のやうに横に歩く。彼等は獵網を編む事を知らない。彼等の所有する僅かな絹糸は卵を包む眞綿袋の爲めに絶對に保留されて居る。そこで彼等の戰略は花の上に待ち伏せして居て、其處へ蟹を集めにやつて來る餌食に不意に飛びかゝるのである。彼等の最も好む獲物は蜜蜂である。私は彼等が其の捕獲物の首筋とか何處か身體の一部分とかを鉤

で引つかけて居るばかりか、時には翅の末端をさへも引つかけて居るのを見つけた事が幾度か分らない。その何れの場合に於ても蜂は息絶えて、肢はだらりと垂れ、舌は伸びて居た。



(蟹二脚) モ グ ニ カ

毒鉤を首筋に打ち込むと云ふ事が私に考えさせる。これは蠅が彼のバツタを嚙み始める時の常套手段と實によく似て居る。そこで、直ちに斯うした疑問が起こる。軟い身體をして居てどの點からでも傷つけられ易い此の弱い蜘蛛が、どうして自分よりも強大で、敏捷で、致命的な毒針を有する蜂のやうな餌食を捕え得るのであらうか。

攻撃者と被攻撃者とは體力から云つても、武器の力から云つても格段の相違があるので、此の怖るべき捕虜の行動を阻害し、これを縛り上げる所の網も、絹網もない場合には、そのやうな闘ひは到底不可能と思はれる。其の對照は羊が狼の咽喉に飛びかゝらうとして居るやうだと云つても決して過言ではない。しかも其の攻撃が行はれ、弱者が勝ち残る。其の證據には幾多の蜜蜂がカニグモの爲めに數時間も生血を吸はれて死んで居るのを見えて居るのである。比較的の弱さは何か特別な技巧によつて埋め合はされて居るに違いない。此の蜘蛛は一見打ち克ち難く思はれる困難に打ち克ち得る戰略を何か有つて居るに違いない。

ラヴアンドの植込みの邊りで事件の發生をうかゞつたのでは、長い間足を留めてしかも不結果に終

る虞れがある。寧ろ私自ら決闘の準備を整えてやつた方がよい。そこで鐘形籠の中に一疋のカニグモと数滴の蜜をたらしラヴァンドの穂の一束とを置く。これに三四疋の生きた蜜蜂を加えて此の虫小舎が完成する。

蜜蜂どもは近所に怖るべきもののあるのを少しも氣にかけない。金網の圍いの周圍を飛び廻り、時折、蜜をたぐえた花の上に行つて一と吸ひ吸ふ。時とするに蜘蛛の極く近く、やつと半サンチメートルのあたりまで行く。彼等は全然危険を知らぬものやうである。年は取つても彼等の怖るべき加害者に就いては何事をも學んで居ないのである。カニグモの方はと云ふと、一本の穂の蜜の近くにじつと構えて居る。一段と長い四本の前肢を擴げ、少しく持ち上げて、攻撃の構えをして居る。

一疋の蜜蜂が其の一滴の蜜を飲みやつて来る。時機到来！蜘蛛は飛びかゝつて其の牙で此の不謹慎者の翅の端を捉えると同時に、肢で不器用にそれを押さえる。數秒の時が経つ。蜜蜂は力の限りじたばたするが、攻撃者が背中に乗つて居るのでどうにも短剣が届かない。此の肉薄戦を何時までもやつて居るわけには行かない。抱きすくめられた方が何時抜け出すか分らないからである。そこで相手は翅を手放して突進し餌食の首筋に狙ひ違はず咬みつく。牙を立てられたらもうお終ひである。後は死を待つばかりである。蜜蜂は呀つと云つたきり、今までの盛な騒ぎもやんでもう附をかすかに顛はせるばかり、そして此の最後の痙攣もやがて消えてしまふ。

カニグモは相變らず其の餌食の首筋を咬えたまゝで御馳走にありつくが彼はもう動かなくなつた死骸の肉を頂戴するのではなく靜に其の血を吸るのである。頭の血が盡きると、何處か他の所を、腹でも胸でも手當り次第に吸ふ。私が戸外で觀察して居るとカニグモが或時は其の牙を蜜蜂の首筋に打ち込み、また或る時は何處か他の所に打ち込んで居るのを見たが其のわけが之れで分つたのである。第一の場合はまだ捕獲して間がなく、加害者がまだ初めのまゝの姿勢を保つて居たのであり、第二の場合それはそれから大分時が経つて、腦の血が盡きたので其の傷口を捨てて何處でも構はず他の豊富な場所に咬みついて居たのである。

斯うして餌食の血の涸れるにつれて彼の牙をあらこちらと少しづつ移しながら此の小さい吸血鬼は、陶然として其の生贅の血をゆる／＼と満喫するのである。私は此の食事が七時間も間斷なく續くのを見た事がある。それすらも私の無遠慮な検査が彼を驚かせたばかりに彼は其の餌食を手放したのであつた。打ち棄てられた死骸は蜘蛛に取つては一文の價値もない殘肴ではあるが、少しも四肢を切断されて居ない。肉を嚼まれた跡もなく、目に見える程の傷もない。蜜蜂は血が涸れて居るだけである。

私の愛犬ブルが生きて居た頃、彼は其の敵の首の皮を咬えて先づ敵の牙を封じ込んだものである。これは犬屬一般の手である。相手が口をかつと開いて唸りながら、眞白な泡を吹き、今にも飛び掛らうとして居る。少しでも警戒心があつたならば其の頸筋をつかまえて彼をちつと動けないやうに押さ

えつけないでは居られない。蜘蛛が蜜蜂と闘ふ場合には目的は同じではない。彼の捕虜の何を恐れねばならないか。何よりも先づあの針である。一寸刺してもひどい害をするあの怖ろしい短剣である。

しかも彼はそんなものには一向構はないで首の後部を狙ふのである。餌食がまだ死なない限りは其處ばかりを狙つて決して他の場所を狙はない。けれども此の場合彼は犬の戦術に倣つて敵の頭をちつと動かないやうに押さえつけようとするのではない。頭はあまり危険ではないのである。彼の計畫は其れよりも更に有効なものであるが、其の目的が何處にあるかは蜜蜂の頓死によつて察する事が出来る。

首筋を咬まれるや否や捕虜は斷末魔の苦しみをやる。してみると神経中樞が毒液によつて冒され毒せられ、生命の根元たる爐の火が忽ちにして消えるわけである。斯う云ふ風にして、長びけば確かに攻撃者の不利に終るに違いない闘争を避けて居る。蜜蜂は武器として鎗と體力とを有つて居るが、繊細なカニグモは武器として優れた殺人法を有つて居るのである。

再び蠍に戻つてみよう。彼も亦、捕えた蜜蜂を絞め殺す事の實に巧みなあの小さな蜘蛛の得意とする、あの當身の術を幾分心得て居るのである。彼は頑丈なバツタを捕え、また時には強大な蠍を捕える。餌食がどうしても自由にされまいとしてじたばたしたのでは面白くない。靜に此の食糧を食つた方がよい。食事中にごた／＼があつたのでは味が落ちる。所で、これ等の昆虫の主要な防禦手段と云へば後肢である。あの頑丈な挺で亂暴に蹴飛ばすのである。そればかりか鋸のやうに齒がついて居

て若し運悪く蠍の太つ腹に觸らうものならそれを斷ち割つてしまふに違いないのである。此の後肢を無能に陥らしめるにはどうしたらよいか。それに又其他の肢もさうである。別に危険と云ふ程ではないのだけれども、絶望的に振り廻はされたのでは矢張り邪魔なのである。

これ等の肢を一つ一つ切り取ると云ふ事も嚴密に云つて出来ない事ではない。尤も少し手間がかかるし、それに又危険が伴はない譯でもない。蠍はそれよりもつとつまい事を考へて居る。彼は首筋の解剖學上の祕密を知つて居るのである。先づ捕虜の首筋の半分ばかり口を開けた所を攻撃して、頸の神経節を噛み、筋力の根源を塞いでしまふのである。これで相手は無力に陥るが、しかし即死はしない。と云ふのはこの粗野なバツタの生活力はあの蜜蜂のやうに美妙なデリケートなものではないからである。しかし最初の一口をやるには最う充分で、間もなく足蹴や手振り身振りは次第に衰へ、すべての運動は停止する。そして此の獲物は、どんなに大きなものでも、もうすつかり落ち着いて悠々と食ひ盡す事が出来るのである。

私は嘗て獵り虫の中に麻痺させるものと殺すものとを區別し、其の何れもが怖ろしい解剖學通であると云つた事があるが、今日此の殺すものの中にあの首刺しの達人カニグモと、強大な獲物を悠々と食ひ食はんが爲めに先づ其の神経節を噛んで其の運動を止めてしまふ蠍とを附け加えたい。

蠍螂——戀

蠍螂の習性に就いて右に知り得た僅かばかりの事實は、彼の俗稱によつて人の想像する所とは似ても似つかぬ事である。「神祈り」なる言葉を聞いては誰でも平靜水の如く、敬虔な態度に祈りすまして居る一疋の昆虫を豫想して居たのであるが、さて目の前に現はれた所をみると意外にも一疋の肉食虫であり、恐怖の餘り氣の遠くなつた捕虜の脳味噌を嚼ぢる殘虐な妖怪なのである。しかもそれとてもなほ最も無殘な方面ではない。同類相互の關係に於てさしにも惡名高い蜘蛛の間にすらも見られぬ程の殘虐な習性を蠍螂は有つて居るのである。

私の大机を塞いで居る鐘形籠の數を減じ、研究に必要なだけの昆虫數は保存しながらも少しく場所の餘裕を作らうとして、私は同じ虫小舎に數疋の雌を入れ、時には十二疋程も入れた。廣さから云へば、此の共同家屋は適當なものである。捕虜たちの運動にはあり餘る程の餘地があるし、それに捕虜たちは腹が重いので殆ど運動を好まないのである。

彼女等は圓天井の金網にぶら下つて、じつと腹ごなしをして居るかさうでなければ何か餌食の通り

かゝるのを待つて居る。野外の藪の中でも斯うやつて居るのである。

しかし同居には又同居で危險が伴ふ。私は菊鉢架に枯草が無くなるとあの溫和な驢馬でも喧嘩する事を知つて居る。私の寄宿生たちはそれ程打ち解け易い性質ではないので、腹が減ると不機嫌になつてお互に喧嘩を始めると云ふ事は如何にもありさうな事である。そこで私はよく注意して虫小舎にはバツタを充分に供給し、日に二回新しいのと取り替えてやる。これで内亂が勃發しても饑饉を口實にする事は出來ないわけである。

最初の中はさう調子は悪くはない。庶民其の堵に安んじて、蠍螂は各々其の手近にやつて來るものだけを引つさらつて之れを嚼ぢり近所隣りへ喧嘩賣りに出掛けるやうな事はしない。併し此の泰平期も永くは續かない。腹は膨れて來るし、卵巢の中では珠子のやうな卵が成熟するし、婚姻と産卵との時機が近づいて來るのである。さうすると一種の怖ろしい嫉妬心が勃然として起つて來る。しかも此の女性的競争の原因となり得るやうな雄は一疋たりとも其處には居はしないのである。卵巢の作用が彼女等の心を惡化させ、同類相食む狂亂に陥らしめるのである。威嚇、肉薄戰、肉食の饗宴が行はれる。さうするとまた例の妖怪的姿勢、翅音、投鉤を伸ばして空中に振り上げる怖ろしい身振りなどが現はれて來る。しかもあの灰色バツタ、或は額白デクチックの面前に於てすらも彼の敵意表示は之れほど脅威的ではあるまいと思はれる程である。

どう云ふ動機からか私には推測する事も出来ないが、隣り合つた二疋の蟻螂が俄然突つ立ち上つて果し合ひの身構えをする。彼女等は頭を左右にくりくると廻はし、互に目で挑み合ひ、侮辱し合ふ。ビュフ！ ビュフ！ と翅を腹で摩つて突撃の譜を奏する。若し此の決闘が最初の引つ掻ききづだけで終りを告げて、それ以上重大化する必要のない場合には、捕獲肢は折り曲げたまゝで、書物の頁のやうに開かれ、體の側方に投げ出されて彼女の長い胸部を縁取る。素晴らしい姿勢ではあるが必死の闘ひの時程怖ろしくはない。

それから一方の投鉤を突然伸ばして敵を突き刺し、同じやうに急激に手繰り込み、再び身構える。敵は之れを反撃する。二疋の猫が爪で引つ掻き合ふ所はやゝ此の劍撃に類する。軟かい太鼓腹に一寸でも血を見るか、或は又少しも手傷を負はなくとも、一方が負けた事を自認すると引き退がる。相手も其の旗指物を收めて何處か別の場所へバツタの捕獲を畫策しに行く。尤も表面平氣を装つては居るが相變らずいつ何時たりとも喧嘩のやり直しを辭しない腹である。

喧嘩の結末が更に慘澹たる状況を呈する事が屢々ある。其の場合には必死の果し合ひの姿勢が完全に發揮される。捕獲肢は擴げられ空中に突き立てられる。負けた奴こそ災難。相手は之れを其の萬力で押さへつけて即座に食ひ始める。先づ首筋をやつつける事は云ふ迄もない。此の醜惡な大饗宴はまるで爺でも嘔つて居るかのやうに平然と行はれる。此の食卓の婦人客はまるで合法の料理を賞味する

かのやうに己が姉妹を賞味して居るのである。そして周圍のものどもも之れに異議を申立てない。自分達も機會のあり次第同じやうにやりたいと思つて居るのである。

いやまことに殘虐な虫ではある。狼さへも同類相喰まぬと云ふ。蟻螂はそんな事は平氣である。彼は其の好物たるバツタが周圍に豊富にある場合にも其の同類を食つて舌鼓を打つのである。彼は人類の怖るべき惡癖たる人肉嗜食癖に相當するものを有つて居るのである。

斯うした錯亂、斯うした懷胎期の虫の嗜慾はなほ一層醜惡堪え難い程度に達する事がある。彼等の交尾の有様を見よう。そして多數群居の混雜を避ける爲めにすべての夫婦を異なる鐘形籠の中に隔離しよう。各組にその住宅を興えて何者も彼等の婚姻の邪魔に來らぬやうにする。それに食糧を忘れないやうにし、しかも何時も豊富にして置いてやらう。饑餓が口實として引合ひに出されない爲めである。

時は八月の末頃である。ひよろ／＼の色男は機正に熟すと判断する。彼は強大な妻の方へ色目を使ふ。彼は妻の方へ顔を向け、首を曲げ、胸を張る。尖つた小さな顔は殆ど熱情的な人面である。斯うした姿態でちつとしたまゝ、永い間想ふ相手を眺めて居る。相手は一向無關心らしく身動きもしない。しかし色男は何か承諾の合圖、と云つても其の秘訣は私に分つて居ない、を認める。彼は近づいて行き、突然翅を擴げる。翅は座學的な振動に顫えて居る。これが彼の戀の告白なのである。貧弱な彼が

豊饒な彼女の背に飛び乗り、一生懸命に其處に獅噛みつき、身體の安定をはかる。一般に仕度が長い。そしてやつと交尾が行はれるが、之れ亦なか／＼に長く、時とすると五六時間に及ぶ。

此のちつとして居る夫婦の間には何一つとして注意に値するものがない。そしてやつと別れたかと思ふと、また間もなく前よりも一層親しげな様子で一緒になる。此の哀れな小男は其の愛人から卵巢に活氣を興えるものとして愛されるのは事實であるが、又高味の獲物としても愛されるのである。事實、其の日のなか、遅くも其の翌日には彼は妻の爲めに捕えられる。妻は慣例に従つて先づ其の首筋を噛ちり、それから組織的に少しづつ食つて行つてたゞ翹だけを殘して食ひ盡くしてしまふ。斯うなつてはもう御房方ごぼうの嫉妬ではなくてたしかに饑餓から來る惡食である。

今受胎したばかりの雌が第二の雄をどう迎えるであらうかを知り度いと云ふ好奇心が私に起つたのである。所で私の調査の結果はまことに醜聞的である。蠶螂は多くの場合決して男性の抱擁と其の翌宴に飽く事を知らない。期間はと一定して居ないが兎に角一と休みすると、既に産卵したと否とに拘はらず第二の雄が迎えられて、それから第一の雄と同様に食はれてしまふ。第三の雄が入れ代つて其の任を果たし、そして食はれて姿を消してしまふ。第四の雄も亦同様の運命を有つ。二週間の間に私は斯うして一疋の蠶螂が七疋までも雄を消耗したのを見た。そのすべてに對して彼女は胸を貸し、そのすべてをして生命をもつて戀の陶醉を支拂はしめたのである。

このやうな暴食は、程度に種々の差があり、また種々な例外はあるにしても、頻繁に認められる事である。非常な暑さで、電壓の高い日には、かうした暴食が殆ど通則となつて居る。そのやうな時には、蠶螂は苛々して居る。澤山の蠶螂と一緒に居る鐘形籠の中では雌たちは何時になく盛に食ひ合ひ、夫婦ものを隔離してある鐘形籠の中では、常よりもなほ雄は交尾後つまらない餌食として待遇される。

此の夫婦間の殘虐行爲の口實として私は斯う考へ得るならば考へたいと思ふのである。自由の天地にあつては蠶螂はこんな風には振舞はないのだ。雄は、其の任務を果たしてしまふと、身をひるがへして遠くへ行き、此の怖ろしい山の神から廻れる餘裕があるのだ。何故かと云ふに、私の虫小舎でもある期間の猶豫が時とすると翌日まで興えられるからである、と。實際藪の中でどう云ふ風に行はれて居るか私には全然分つて居ない。偶然と云ふ貧弱な手掛かりは未だ曾て野天に於ける蠶螂の戀に就いて何等の情報をも私に興えて居ないからである。そこで私は虫小舎の中で起る所の事に據つて判断しなければならぬのだが、此の虫小舎では捕虜たちは日常りの好い處で充分に御馳走を頂戴して住ぬも廣々と、少しも懷郷病に罹つて居る様子がないのだから、彼女たちが其處でやつて居る事は普通の状態に於ても亦彼女たちのやつて居る事に違ひないのである。

所で、これ等の事實は避難の猶豫を雄に興えたと云ふ口實を拒否して居る。私はある隔離された一

と組の夫婦の次のやうなひどい有様を見たのである。雄は其の生命附與の職務に専念してしつかりと雌を抱いて居る。しかし、此の可哀想な奴には頭がない、首がない、殆ど胸もない。相手は鼻面を肩越しに振り向けて、甚だ平然と、其の優しい愛人の遺骸を嚼ぢり續けて居る。しかも男性の軀幹は、しつかりと獅嚙みついたまゝ、其の仕事を續けて居るではないか。

戀は死よりも強しと云ふ。之れを文字通りに解釋して、此の警句がこれ以上顯著な確證を與えられた事は今まで決してない。首の無い奴が、胸の半分まで食ひ取られた奴が、死骸がなほも生命を與えんとして頑張つて居るのである。彼がやつと雌を手離す時は生殖器の在る腹を傷けられた時である。夫婦の契りが完全に濟んだ後で其の戀人を食ひ、もう精根盡き果てて之れ以上何の役にも立たない一寸法師を食事に供すると云ふ事は感情などと云ふものを一向問題にしない昆虫界にあつては或る程度まで分かる事である。しかし行爲の最中に之れを嚼ぢるに至つては如何に殘虐な空想を逞しうするもなほ及ばぬ所であらう。私はそれを見たのである。此の二ツの目で見たのである。そして未だに其の驚きが消えないのである。

仕事の最中を不意にやられて奴さん逃げたり身をかはしたり出来たらうか。否、決して出来ない。そこで斯う結論しよう。蠍の戀は蜘蛛の戀と同程度に、殊によつたらそれ以上に、無殘なものである。私は虫小舎の場所の狭さが雄の殺戮を助長すると云ふ事を否定するものではない。しかし此の殺

戮の原因は他にあるのである。

多分之れは石炭紀に、昆虫がまだ怪奇な發情行爲によつて自己の下拵えをやつて居た頃の、地質學的時代の名残なのであらう。蠍の屬する直翅類は昆虫界の初生兒である。彼等は粗野で、變態不完全で、樹狀の羊齒の間を彷徨して、蝶や、大玉押コガネや、蠅や、蜜蜂のやうなデリケートな變態を行ふ昆虫の唯々一つもが未だ存在しなかつた頃に既に榮えて居つたのである。産まんが爲めの破壊に急であつた此の狂暴な時代にあつては、習性は溫和ではなかつた。それで蠍はこの太古の妖怪の微かな追憶として多分昔日の戀を續けて居るのかも知れない。

餌食として雄を食ふ事は蠍科の他の昆虫に於ても慣例となつて居る。あの小さな灰色蠍は如何にも可愛らしく、私の鐘形籠の中にあつても如何にも穩かで、多數雜居にも拘はらず決して近所隣りに喧嘩を賣ると云ふ事がないのであるが、而も其の雄を引捕えて之れを食ふ一事に至つては其の兇暴さに於て尼蠍に劣らないのである。私は此の閨房に必要缺く可らざる補充員を供給する爲めに奔命に疲れてしまふのである。折角翅振りのまことに立派な、まことに輕快な奴を見つけて、籠の中に入れてやるや否や、彼は最早彼の協力を必要としない雌共の中の一疋によつて、大抵は忽ち爪を立てられて食はれてしまふ。一度卵巢が満足を得てしまふと兩種の蠍は雄を身頼ひする程嫌ふ、と云ふよりも寧ろ雄を美味しい蠍肉としか認めないのである。